

★「北斎翁嘗人に語りて曰く、余の美人画は、阿榮におよばざるなり。彼は妙に画きて、よく画法にかなへり」（飯島虚心『葛飾北斎伝』 p 309～310 ルビは筆者）。

### 【阿榮の絵、気韻生動、筆力非凡なり】

「（露木氏の話）梅彦氏注、嘗阿榮に依頼し、稲荷社前に供する発句の奉灯の口画を画かせたるが、阿榮諾して盆栽の桜のかげに、猫児の戯るゝ所を画く。下筆密にして、設色佳麗なり。同氏阿榮に謂て曰く、奉灯の口絵なれば、此の如く細密なるを要せずして可なるべし。阿榮曰く、此の絹本は、裏打せし者なれば、画きたるなり。従来裏打ちせし絹本は画き難きものなれば、尋常の画工ならば、謝絶して画かざるべし。妾は、試みに其の画き難きものに画きたるなり。知らず知らず、細密になりたれど、他人のいふごとく、画き難きものにあらずと。同氏携へ帰りて、熟視すれば、気韻生動、筆力非凡なり。よりて奉灯となすは、おしければ、更に他人をして、口画を画かしめ、神前に供し、しかして此の阿榮の画は、裱装して珍藏せしが、後火災に罹り、これを失ふ、惜むべしと、同氏の話。」（『葛飾北斎伝 p 310 ルビは筆者による）

注）梅彦氏：露木梅彦。名は孔彰。北斎から号を譲られ、露木為一と号す。

●絵本『唐詩選画本 五言律』（1月。半紙本 5冊。見返しに『画本唐詩選』。前北斎為一画。袋には「前北斎為一老人画」。22.7×15.8（嵩山房・小林新兵衛版。国文学研究資料館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/フリーア美術館：ブルヴェラー・コレクション蔵）



1164 『唐詩選画本 五言律』六編 見返し（国文学研究資料館）

「送遠」

※唐詩選五言律の略解書。中国の故事や動植物を描く。「送遠」と呼ばれる絵は、杜甫が戦地に赴く友人を送った詩を題材にして、馬に乗り雪景色を眺める男の後ろから下僕がついて行く様子を描き、天保4年～5年（1833～34）の『詩歌写真鏡』の「無題」の絵に反映している。

五編～七編は高井蘭山著。北斎は六編・七編（天保7年：1836）を描く。六編巻一に11図、巻二に15図、巻三に13図、巻四に12図、巻五に6図の挿絵を描く（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。全七編三十五巻三十五冊。初編は天明8年刊（文化2年再

刊)、二編は寛政2年刊(文化11年再刊)、三編は寛政3年刊、四編は寛政5年刊、五編は天保3年刊。七編は天保7年刊。

●合巻『出世奴小方之伝』(1月。二冊。柳亭種彦の依頼で制作された合巻の表紙絵。歌川国直が美人を描き、北斎は国直の美人の背景になる雪景全体を描いている。柳亭種彦作。「柳亭応需雪景写 前北斎為一」の書き込みがある。印之印。鶴屋喜右衛門版。

島根県立美術館:永田コレクション/早稲田大学図書館蔵)

※『花雪吹縁柵』(合巻。天保3年:1832)同様、合巻の表紙絵。図は、国直が、高札のある雪の岸辺に、黒い高下駄を履き、版元の「鶴屋」の文字と定紋の鶴のマークが書かれた傘をさして、両袖に手を入れて立っている芸妓を描く。北斎は、川の水辺に水鳥が三羽泳ぎ、雪が降りしきる対岸には雪を被った屋根の家並みと、竪川辺りの材木を多く立ててある背景を描く。



1165『花雪吹縁柵』左:裏表紙 右:表紙(『2019 新北斎展図録』より転載)

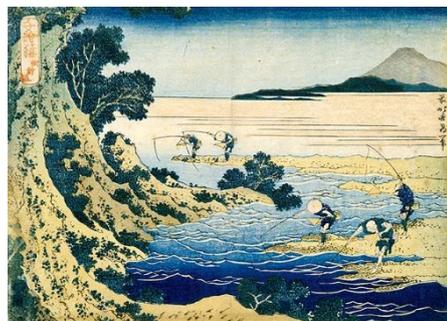
●読本『新編水滸画伝』二編後帙(秋。五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。英屋平吉版。早稲田大学図書館蔵)

●読本『新編水滸画伝』三編前帙(秋。五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。英屋平吉版。早稲田大学図書館蔵)

●絵本『千絵の海』(この頃か。横中判揃物。10図(他に、出版されなかった校合摺の〈品川〉〈上総浦〉がある。森屋治兵衛版。フランス国立図書館に画帖仕立てがある)

☆〈蚊針流〉前北斎為一筆。18.4×24.8 フランス国立図書館/東京国立博物館/中外産業株式会社:原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵)

※「蚊針」は、羽毛などで蚊や虫の形に作った疑似針で、川魚を釣るのに用いた。川の流れに任せて糸を垂れる漁法と思われる。5人の男が釣り糸を垂れている。



1166 蚊針流(フランス国立図書館)

☆〈待ち網〉前北斎為一筆。18.2×24.7 フランス国立図書館/東京国立博物館/中外産業株式会社:原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵)

※「待ち網」という漁法は、水中に網を張って魚を捕らえる方法。烈しい水流が滝のように流れる中で竿や網を張っている男たちのいきいきとした動きが描かれる。



1167 待ち網(フランス国立図書館)

☆〈宮戸川長縄〉前北斎為一筆。18.5×25.8 すみだ北斎美術館/フランス国立図書館/ミネアポリス美術館/東京国立博物館/中外産業株式会社:原安三郎コレク

蔵)

※「宮戸川」は隅田川下流の別称。版下絵の画題では「両国」と記されている。現在の台東区蔵前付近の図。岸边近くに停めた船の中で獲ったものを桶に入れる男や船頭たち。川の中央でも船から網を入れて貝などを獲ろうとしている男や岸边で竿をさしている男もいる。対岸には規則正しく並ぶ御船蔵の建物が描かれる。右隅の小さく見える橋は元柳橋といわれる。

1168 宮戸川長縄 (フランス国立図書館)



☆〈絹川はちふせ〉無款。18.2×24.7 島根県立美術館/ギメ美術館/フランス国立図書館/ボストン美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵)



※絹川は奥日光から発する鬼怒川のこと。「はちふせ」とは、籠を魚のいそうな水面にかぶせ、底穴から手を入れて魚を手づかみにする鉢伏漁法をいう。大勢の男がそれぞれに川に籠を入れている姿を、小高い岸边でのんびりとそれを見る男の図。

1169 絹川はちふせ (フランス国立図書館)

☆〈五島鯨突〉18.2×24.9 前北斎為一筆。すみだ北斎美術館/フランス国立図書館/東京国立博物館/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※五島列島の島の高台から鯨のいる漁場を俯瞰する構図。五島鯨はゴンドウ鯨と呼ばれ大型のいるかをいう。

司馬江漢『画図西遊譚』(1794)第4巻にある図を参照したか。

1170 五島鯨突 (フランス国立図書館)



☆〈甲州火振〉重要美術品。〈甲列火振〉と記されている。無款。18.2×24.7 島根県立美術館/フランス国立図書館/東京国立博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション/日本浮世絵博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵)



1171 甲州火振 (フランス国立図書館)

※深夜に水面を火で照らして行う漁法。火振り漁法。「夜振」「焼網」などとも呼ばれるという。関東の秩父地方、神奈川の中郡、飛騨地方、静岡の秦原郡などで行われていたという(『浮世絵八華5 北斎』平凡社)。星の点在する暗い空の下、烈しい水流の中に入り赤々と燃える松明を水面で振りかざしている。

画稿と版下絵あり(檜崎宗重『北斎論』p383)

☆〈<sup>そうしゅうとねがわ</sup>総州利根川〉〈総列利根川〉と記されている。  
18.2×24.6 前北斎為一筆。すみだ北斎美術館/フランス国立図書館/ギメ美術館/千葉市美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

1172 総州利根川 (フランス国立図書館)



※利根川は坂東太郎とも呼ばれ関東で親しまれた川で、江戸や房総などへの貨物輸送に利用された。その川で船を止め、四つ手網引き揚げる船中の男は必至に踏ん張っている。この構図は『富嶽百景』の「<sup>あみうら ふじ</sup>網裏の不二」(三編)にも見られる。

☆〈<sup>そうしゅうとらこ</sup>総州銚子〉〈総列銚子〉と記されている。前北斎為一筆。18.2×24.4 フランス国立図書館/ギメ美術館/ホノルル美術館/大英博物館/千葉市美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※「富嶽三十六景」の〈神奈川沖裏浪〉と同図趣。怒涛の中で必死に小舟を操る船頭たちの図。銚子は千葉県銚子で、利根川河口に開けた漁港。天保5年(1834)か6年(1835)に相州・豆州や浦賀に行っているの、あるいは銚子にも滞在したか。

1173 総州銚子 (フランス国立図書館)



☆〈<sup>しもさうのぼと</sup>下総登戸〉前北斎為一筆。18.2×24.9 フランス国立図書館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)



※登戸は現在の千葉市にある地で宿場として栄えた。木更津などを結ぶ要地。『富嶽三十六景』にも「登戸浦」の作品がある。房総半島を望む干潟で大勢の男女が潮干狩りをしている風景。

1174 下総登戸 (フランス国立図書館)

版下絵あり(檜崎宗重『北斎論』p384)。

☆〈<sup>そうしゅううらが</sup>相州浦賀〉〈相列浦賀〉と記されている。18.4×24.9 前北斎為一筆。島根県立美術館/ギメ美術館/フランス国立図書館/日本浮世絵博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※浦賀は神奈川県横須賀市浦賀で、三浦半島の東端の港町。江戸湾の入り口であるところから幕府によって享保5年(1720)に奉行所と番所が下田から移設された。1175 総州浦賀(フランス国立図書館)  
夜明け方に常夜灯のある磯で数人の男たちが釣りをする静かな風景が描かれる。北斎は天保5年(1834)の冬又は天保6年(1835)の春、相州、豆州へ旅し浦賀に蟄居しているので、その時の想いもこの作品に反映し



ているか。

●「千絵の海：校合摺・版下絵」

※校合摺は、墨版ですべてを表現するのではなく、色の明度差を作り出す下塗り段階のもの。絵師の指示した色の数だけ墨摺する。版下絵は、彫刻のための下絵で、これを版木に逆さに貼り付けて彫るので、残存することは基本的にない。

☆〈品川〉（校合摺のため『千絵の海』10 図に含まない。前北斎為一筆。17.8×24.6  
フランス国立図書館/東京国立博物館蔵）

☆〈上総裏〉（校合摺のため『千絵の海』10 図に含まない。前北斎為一筆。17.9×24.6  
フランス国立図書館/東京国立博物館蔵）

☆〈两国〉（17.8×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）

☆〈甲列(州)火振〉（17.8×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）

☆〈下総登戸〉（17.8×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）

●錦絵『西村屋大判花鳥シリーズ』（この頃か。天保3年（1832）説もある。横大判。前北斎為一筆。全10 図。〈芥子〉一図を除き背景を地潰しにしている。全十図は大英博物館/ミネアポリス美術館/ボストン美術館/ギメ美術館蔵）

※植物等の説明は「デジタル大辞泉」による。

☆〈芥子〉（24.8×36.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館蔵/大英博物館/ミネアポリス美術館/ボストン美術館蔵）

※羽ペンを使ったのではという見方もある（『在外日本の至宝』7 巻「浮世絵」作品解説）。

芥子は、ケシ科の越年草。高さ1.5メートル。葉は白みを帯び、縁にぎざぎざがあり、基部は茎を包む。初夏、下を向いていたつぼみが上向き、大形の紅・紫・白色や絞りの4 弁花を開くが、北斎は5 弁で描く。種子は小さくて黒色、料理に用いる。白花の未熟な実からは阿片の原料をとるが、日本では栽培などが厳しく制限されている。



1176 芥子（すみだ北斎美術館）

☆〈芙蓉に雀〉（25.1×36.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ベルリン東洋美術館/シカゴ美術館/大英博物館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ /チェスター・ビュティ図書館/ギメ美術館蔵）

※花咲く芙蓉の左脇で羽ばたきながら静止している雀。芙蓉の葉が墨で塗りつぶされたように描かれる。

1177 蓉に雀（島根県立美術館）

芙蓉はアオイ科の落葉低木。暖地の海岸近くに自生。葉は手のひら状に裂けていて、先がとがる。夏から秋、葉の付け根に淡紅色の大きな5 弁花を



開き、1日ではぼむ。園芸品種には城・紅などの花色や八重のものもある。

☆〈桔梗にとんぼ〉（「桔梗・蜻蛉」とも。24.8×36.2 東京国立博物館/ホノルル美術館/ボストン美術館/ギメ美術館/ミネアポリス美術館蔵）

※密集するように花咲く桔梗の上を飛ぶ一匹のとんぼの図。

桔梗は、キキョウ科の多年草。日当たりのよい山野に生え、高さ約1メートル。葉は長卵形で、裏面がやや白い。8、9月ごろ青紫色の釣鐘形の花が咲く。秋の七草の一。

1178 桔梗にとんぼ（ボストン美術館）



☆〈紫陽花に燕〉（25.0×36.2 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館/ギメ東洋美術館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館蔵）

※紫陽花の右上から羽ばたいてくる燕の図。

紫陽花はガクアジサイ～日本で改良された園芸品種。高さ1～1.5メートルの落葉低木。葉は大きな楕円形。初夏、淡青色から淡紫紅色に変わる萼のある小花が、球状に集まって咲く、庭木にする。

1179 紫陽花に燕（島根県立美術館）



☆〈檜扇〉（「檜扇花」とも。24.8×36.2 島根県立美術館：永田コレクション/ベルリン東洋美術館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ギメ美術館蔵）

※細い茎の先に米印のように開いた花と鋭く突き出すような葉が描かれる。檜扇は、アヤメ科の多年草。本州中部以西の山野に自生。剣形の葉が2列に互生し、扇形に広がる。夏、黄赤色で内側に多数の暗紅色の斑点をもつ6弁花を開く。

1180 檜扇（島根県立美術館）



☆〈菊に虻〉（「菊に蜂」「菊花に虻」とも。

23.8×36.8 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/シカゴ美術館/フリーア美術館/ギメ東洋美術館/ /ボストン美術館/ミネアポリス美術館蔵）

1181 菊に虻（島根県立美術館）

※画面いっぱいに花開いた菊を目指して左上から虻が飛んでくる図。

菊は、キク科の多年草。日本の代表的な花の一。主に秋に咲き、花の色・形などにより、非常に多



くの品種があり、大きさにより大菊・中菊・小菊と大別される。古く中国から渡来したとされ、江戸時代には改良が進んだ。観賞用に広く栽培され、食用にもなる。

☆〈牡丹に蝶〉（「牡丹に胡蝶」とも。24.9×36.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/ブルヴァー・コレクション/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ホノルル美術館/ギメ美術館蔵）

※華やかに咲き誇る牡丹の右上で舞う蝶を描く。

南蘋派の画風といわれる。

牡丹は、ボタン科の落葉低木。高さ 1～2メートル。葉は大きく、羽状複葉で、互生する。5月ごろ、白・紅・紫・黄色などの大形の花が咲く。花びらは 5～8 枚あるが、重弁や二段咲きなどさまざまな園芸品種があり、寒牡丹もある。



1182 牡丹に蝶（島根県立美術館）

☆〈杜若にきりぎりす〉（「杜若にばった」とも。24.8×36.2 フィッツウィリアム美術館/ミネアポリス美術館/ギメ美術館蔵）



※杜若の花が開き、細長く突き出している葉にしがみつくように逆様にとまっている一匹のきりぎりすの図。杜若は、アヤメ科の多年草。湿地に群生。

葉は剣状で幅広く、基部は鞘になり茎を挟む。初夏、濃紫色の花を開く。

1183 杜若にきりぎりす（ミネアポリス美術館）

☆〈朝顔に蛙〉（24.8×37.5 東京国立博物館/フィッツウィリアム美術館/シカゴ美術館/ブルックリン美術館/仏・ベレス・コレクション/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ギメ美術館蔵）

※朝顔の葉に同色で溶け込むように描かれた蛙。

朝顔は、ヒルガオ科の蔓生の一年草。茎は左巻き。葉は大きな切れ込みがある。夏の朝、らっぱ状の花を開く。種子は漢方で牽牛子といい、緩下剤などに用いる。東アジアの原産で、奈良時代に薬用植物として中国から渡来。江戸初期より園芸植物として栽培され、多くの品種が作られた。



1184 朝顔に蛙（ミネアポリス美術館）

☆〈百合花〉（25.8×37.6 シカゴ美術館/ケルン美術館/大英博物館/ミネアポリス美術館/ケルン美術館/ボストン美術館/東京国立博物館/ギメ美術館蔵）

※花開いた白百合と、これから開こうとする花が描かれている。四条派の筆致が認められるという(『在外日本の至宝』7巻「浮世絵」作品解説)。

百合は、ユリ科ユリ属の多年草の総称。温帯を中心に分布し、カノユリ、オニユリ、ヤマユリ、テッポウユリ、スカシユリなど、園芸用に栽培されるものも多い。鱗茎が食用になるものもある。葉は線形などで平行脈が走る。夏、白・黄・橙色などの大形の6弁花を開く。北斎は5弁で描いている。



1185 百合花 (ミネアポリス美術館)

●錦絵「諸国瀧廻り」(全8図。縦大判。前北斎為一筆。西村屋与八版。国立国会図書館/東洋文庫/島根県立美術館/川端龍子記念館/東京国立博物館/サンフランシスコ美術館/すみだ北斎美術館/ベルリン東洋美術館/日本浮世絵博物館/ミネアポリス美術館/大英博物館/山口県立萩美術館: フォン・コレクション/ホノルル美術館/ギメ美術館/メトロポリタン美術館/ポーランド美術館/東洋文庫: 岩崎文庫/中外産業株式会社: 原安三郎コレクション蔵)

※天保4年の西村屋の吉見種繁作『改色団七島』巻末広告に「富嶽三十六景」に続き「諸国瀧廻り 右同画 是もまへに准じ、いと珍らしき絵なり」とある。

☆〈和州吉野 義経馬洗滝〉(38.5×25.7)

※文治元年(1185)頃、源義経が都落ちので吉野地方をさまよった際、義経が馬を洗ったという伝説から取材。滝の下で馬を洗う二人の男。急な岸边と馬の茶色と幅広にS字型に流れ落ちる滝の藍色が対比される。奈良県吉野町喜佐谷の高滝と考えられている(『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青 VOL2 日本浮世絵博物館P43)。



1186 和州吉野 義経馬洗滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈木曾路ノ奥阿弥陀ヶ滝〉(37.5×25.7)

※阿弥陀ヶ滝は、美濃国の最先端(岐阜県南部)の毘沙門岳山麓にある滝。高さ約80m。上部が阿弥陀仏の背光のように見えるところから名付けられたという。険しい山を切り割るように、溜まる川水を一気に落としている。落差60mの水は下に行くほどに縦筋を流れるように描いている。滝の途中の突き出した場所では、毛氈を敷いて爛酒で酒宴をする三人の男が描かれる。



1187 木曾路ノ奥阿弥陀ヶ滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈美濃ノ国養老の滝〉(37.1×25.1)

※美濃国(岐阜県)にある養老の滝。高さ約32m、幅約7m。貧しい樵夫が滝から美酒を得て親孝行したという伝説で有名で、古くから霊泉として崇められていた。垂直に落ちる滝の下では笠を被る男が滝を見上げ、その傍らの粗末な小屋の中では数人の男が休んでいる図。



1188 美濃ノ国養老の滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈相州大山ろうべんの瀧〉 (36.8×26.1 アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※大山は神奈川県伊勢原市・秦野市・厚木市にわたる標高 1252 呎の山で、江戸から近い相模なので大山詣として大山寺(大山阿夫利神社)に参詣する人々で賑わった。この図は、多くの参詣人が「大願成就」と墨書きした細い木の板(木太刀)を持



ち、良弁の滝で水垢離をしている様子を描く



1189 相州大山ろうべんの瀧 (日本浮世絵博物館)

☆〈下野黒髪山きりふりの滝〉 (38.6×26.2)

※日光三名瀑の一人で、霧降の滝をいう。男髪山(男体山)に流れる、日光参詣途中の名所。上流から流れ落ちる滝水は下方で幾筋にも別れている。滝の下で見上げる三人の男と、滝の真横から眺める二人の男が描かれる。校合摺がある (38.2×25.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/クロード・モネ財団蔵)

1190 下野黒髪山きりふりの滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈東都葵ヶ岡の滝〉 (37.8×25.7 クロード・モネ財団蔵)

※葵ヶ岡は、現在の千代田区永田町近くの赤坂溜池に流れていた滝。この付近は大名や旗本の家が並ぶ武家屋敷であった。画面左上に描かれる葵坂には武士や道を掃く男などが描かれ、坂の突き当たりには辻番所を描く。画面右側は溜め池と堰から落ちる滝とその下の波打つ水面の三種の水の様子を描き分けている。



1191 東都葵ヶ岡の滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈東海道坂ノ下清瀧くわんおん〉 (38.2×26.5)



※清瀧は、東海道の鈴鹿峠前の坂下宿にある滝。清瀧観音や岩屋観音も呼ばれる石堂があり、多くの信仰の対象であったという。滝の流れる傍らの山中の石堂に行く人、石堂の前でしゃがんで手を合わせて拝む人などを描く。滝は細々と描かれ、むしろ参詣の人に焦点を当てた構図になっている。

1192 東海道坂ノ下清瀧くわんおん (日本浮世絵博物館)

☆〈木曾海道小野ノ瀑布〉 (38.1×25.9)

※木曾郡寢覚の床に近い滝。図の左半分にまっすぐ下に落ちる滝により、垂直を強調した画面構成となっている。滝の右に祠があり、その下の橋の上で滝を眺める数人の男が描

かれる。このシリーズで唯一滝を横から見た図。広重「木曾海道六十九次」の〈上ヶ松〉に影響した。

1193 木曾海道小野ノ瀑布 (日本浮世絵博物館)



●錦絵「雪月花」(この頃か。横大判三枚揃物。前北斎為一筆。西村屋与八版)

※下記「勝景 雪月花」とは別物。

☆〈雪月花 隅田の雪〉24.4×36.4 すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/ミネアポリス美術館/



太田記念美術館/ホノルル美術館/足立区立郷土博物館蔵)

※隅田川の雪の川面に一艘の漁船と土手を行く二人の男の図。図中央に木立の中に富士塚が見える待乳山聖天宮、右下に川に突き出た隅田神社(現東京都墨田区堤2丁目)の祠が描かれる。

1194 雪月花 隅田の雪 (東京都江戸東京博物館)

☆〈雪月花 淀川の月〉25.5×37.1 すみだ北斎美術館/ミネアポリス美術館/アムステルダム国立美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/江戸東京博物館蔵)

※月下の淀川を往来する旅客を多く乗せて川下に行く何艘かの船。遠くには岸边の人足が船を綱で川上に引いている。右には淀城と水車が描かれる。



1195 雪月花 淀川の月 (東京都江戸東京博物館)

☆〈雪花月 吉野の花〉24.5×36.8 日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/ミネアポリス美術館/太田記念美術館蔵)

※馬子や旅人が雲と見まがうほどの満開の桜を見ながら道を往来する。図中の荷物の風呂敷に、「永楽」の文字や、三つ巴の版元の商標が書き込まれている。北斎は文化年刊末頃の関西旅行の際、吉野を訪問しているとされている。この図の画題のみ「雪花月」となっている。



1196 雪花月 吉野の花 (東京都江戸東京博物館)

●錦絵「勝景 雪月花」(この頃か。天保1年～4年(1830～33)説もあり。小判(九ツ切)錦絵9枚続揃物。前北斎為一筆。赤松庄太郎版。島根県立美術館:永田コレクション/太田記念美術館:長瀬コレクション/ギメ美術館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館蔵)

※東都(江戸)、山城(京)、摂津(大坂)の三都それぞれから雪・月・花の三景ずつ計9枚の構成。同一寸法の9図を大奉書一枚に作画・製版・摺刷にして、その後に切断したもの。

☆〈東都 品川の雪〉 (12.5×16.2 品川区立品川歴史館蔵)

1197 東都品川の雪 (島根県立美術館)

※湾のまわりの品川宿が雪に覆われている図。



☆〈東都 隅田の月〉 (12.5×16.2)

※夕暮れに、隅田神社近くに三隻の舟が浮かぶ図。左隅に薄く月。

☆〈東都 飛鳥山の花〉 (12.5×16.2)

※桜の花が飛鳥山のあちこちに咲いている図。山上では花見客が小さく描かれる。

1198 東都 飛鳥山の花 (島根県立美術館)



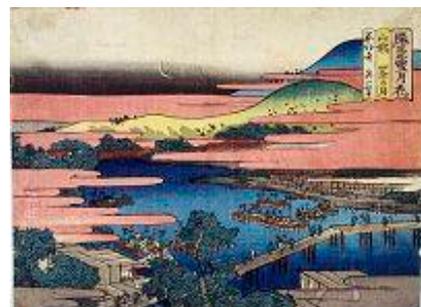
☆〈山城 峯峩ノ雪〉 (12.2×16.7)

※茅屋の屋根や松の木に雪が被り、手前の橋には農夫や旅人のいる図。

☆〈山城 四条の月〉 (12.2×16.7)

※四条橋を渡る人々。川に浮かぶ納涼の屋台でくつろぐ人々。山の向こうに三日月。

1199 山城 四条の月 (島根県立美術館)



☆〈山城 嵐山の花〉 (12.2×16.7)

※渡月橋を渡る人々と、橋の下を通る船の図。

☆〈摂津 能瀬の雪〉 (12.5×17.0)

※茅屋の家が点在する雪の山道を往来する人々。

☆〈摂津 淀川の月〉 (12.5×17.0)

※淀川に浮かぶ三隻の屋根覆いの舟。遠く山の横に三日月。

1200 摂津 淀川の月 (島根県立美術館)



☆〈摂津 桜の宮花〉 (12.5×17.0)

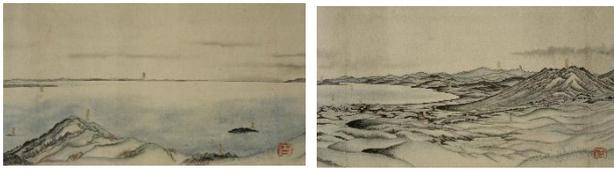
※藍摺りの空の下で

咲き誇る桜の木々。鳥居に続く道には牛に乗った人などが描かれる。

1201 摂津 桜の宮花 (島根県立美術館)

●巻物絵「豆州日金山眺望絵巻」(この頃か。紙本着色一卷。巻物。画狂人北斎画。印ふもとのさと。29.3×337.5 北斎館蔵)

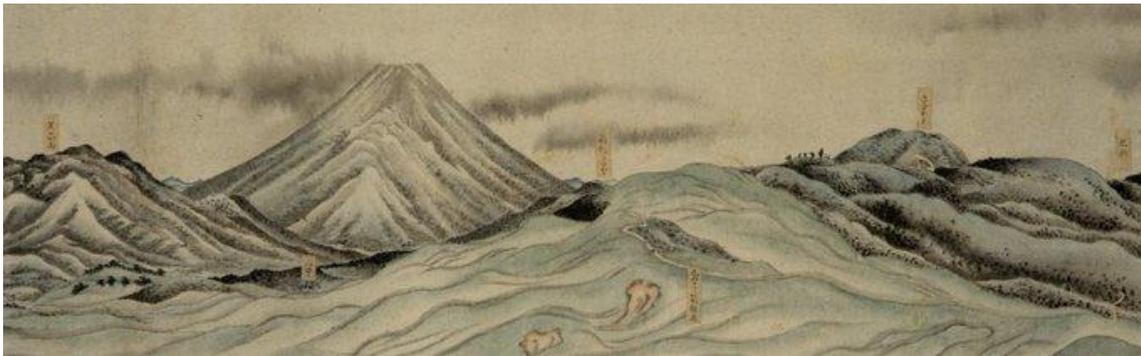
注) 日金山：静岡県熱海市伊豆山字日金山の十国峠のこと。箱根外輪山から南に続く尾根。伊豆山権現と箱根権現を結ぶ信仰道の要所。



※伊豆の十国峠からの眺望が広がる図。沖の遠くに伊豆大島の三原山の噴煙が描かれる。

煙が描かれる。

1202 豆州日金山眺望絵巻（部分：北斎館）



【年齢入り落款を以後継続して記す】

●屏風絵「玉川六景図」（紙本着色六曲一双押絵貼屏風。時年七十四 前北斎為一筆。

印葛しか。各扇 132.0×47.8 フリーア美術館蔵）

※人物の六扇と景物の六扇の二隻となっていて、人物の一隻の第五扇目に「玉川六景 時年七十四 前北斎為一筆」と記される。落款に年齢を記すのは、既に文政4年（1821）「玄徳 関羽 張飛」（摺物：行年六十二 葛飾為一翁燈下席上画）、「桃園三契」（摺物：行年六十二翁葛飾為一燈火席上画）、天保元年（1830）「工芸職人下絵集」（七十一翁北斎為一筆/七十一翁為一筆）、「下絵帖」（七十一翁北斎為一筆）の作品でなされているが、「玉川六景図」から年齢入り落款が継続的に使用されたとされる。全12図。



1203 玉川六景図 フリーア美術館の配列（綴プロジェクト高精細複製画）



1204 玉川六景図 本来の配列（綴プロジェクト高精細複製画）

※フリーア美術館所蔵では、右隻に人物図、左隻に風景図が配されているが、元来は人物画と風景画が対になっていて、全部で六対の配置であったことが雑誌『日本美術画報』初編巻九（明治 28 年：1895）に掲載された写真から証明されている（2019「フリーア美術館の北斎展」リーフレットより）。

※本来の配置：右隻の右から、

☆〈摂津の国 三島の玉川〉

〈1 扇：歌人相模の図〉と〈2 扇：砧の道具と衣の図〉の対。几帳の脇に座る相模の図。相模は、998～1061。平安時代の女流歌人。中古三十六歌仙の一人。「見わたせば波のしがらみかけてけり 卯の花さける玉川の里」（後拾遺和歌集 175）と、せき止められた摂津三島の玉川（大阪府高槻市）の国の白波が、卯の花が咲いているようだと言ったことを踏まえる。対の 2 扇には、卯の花の白さから連想して砧の白い布を描く。

☆〈山城の国 井手の玉川〉

〈3 扇：山吹の咲く山道を行く白衣の仕丁二人と背負われる貴族の子どもの図〉と〈4 扇：水の中を泳ぐ鯉一匹の図〉の対。井手の玉川（京都府綴喜郡井手町）は源順（911～83）「春ふかみ井手の川波たちかへり 見てこそゆかめ山吹の花」（拾遺和歌集 68）など古来多く詠まれた山吹の名所。4 扇では、川波から水に泳ぐ鯉を連想したのか。

☆〈紀伊の国 高野の玉川〉

〈5 扇：樵が、柴木の束に腰掛けて遠くの溪流を眺めている図〉と〈6 扇：崖に松の木が生える溪流の図〉の対。同画趣では僧侶や旅人が溪流を眺める図が多いといわれるが、ここでは樵の図にしている。弘法大師の歌と伝えられる「わすれてもくみやしつらん旅人のたかのゝおくの玉川の水」を踏まえたか。

※本来の配置：左隻の右から、

☆〈近江の国 野路の玉川〉

〈7 扇：源俊頼と月の図〉と〈8 扇：萩と野路に流れる玉川の図〉の対。野路の玉川（滋賀県近江市）は、萩の名所。源俊頼「あすも来む野ちの玉川はぎこえて 色なる波に月やどりけり」（千載和歌集 281）の歌を踏まえる。脇息に右肘を掛け寛いで満月を眺める図と、萩の咲く曲がりくねる野路の玉川が描かれる。

☆〈武蔵の国 調布の玉川〉

〈9 扇：臼に杵をたてる砧の図〉と〈10 扇：玉川を行く一隻の舟と民家の図〉の対。臼に入れた白布を堅杵で突く二人の女の図と、調布の玉川（東京都・神奈川県）を行く柴木を積んだ一隻の舟。船頭が竿さしている。向こう岸には民家が並んでいる。調布の玉川は、「多摩川にさらす手作りさらさらに 荷そこの児のここだ愛しき」（万葉集・東歌）などに多く「砧」が詠まれて有名。

☆〈陸奥の国 野田の玉川〉

〈11 扇：溪流の上を飛び交う千鳥の図〉と〈12 扇：僧侶の図〉の対。白波を立てて流れる玉川の上を、ほぼ垂直に群れをなして飛ぶ千鳥の図と、頭巾を被り腰を屈めて後ろ手を

した僧侶。裾が風に靡いている。側に笠と荷物が置かれている。能因法師(988~?)「夕されば汐風こしてみちのくの 野田の玉川千鳥鳴くなり」(新古今和歌集 643)の歌を踏まえる。

●絵暦「宝船図」(1月。中判色摺。前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※画中に、「天保四のとし睦月初市 本町五丁目」とあるので、信州・松本で行われていた初市の祭礼で、本町五丁目が繰り出した宝船を描いたことが分る。

※これは、実際に祭礼の宝船を見た可能性があるという(『新北斎展図録』p336)。また、松本滞留中の作ともいわれる(井上和雄〈浮世絵志3号〉「北斎研究断片(三)」の説を『年譜』で紹介)。

図は、「宝」と書いた大きな帆を立てた龍首の船に米俵などを乗せている。帆の上に月の大小が示される。

●団扇絵「狛」(この頃か。大判団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。21.7×28.5 伊勢屋市右衛門(角辻)版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※蒲公英が咲き初夏の雰囲気の中で、鞆に手をかけて戯れる狛の毛並みが流れるように描かれる。印「辻」が用いられていることから天保6年(1835)頃の「群鶏」、天保4年頃(1833)「雉と蛇」と同シリーズか。

1205 狛(太田記念美術館)



●団扇絵「雉と蛇」(この頃か。大判団扇絵判錦絵。

前北斎為一筆。伊勢屋市右衛門(角辻)版。重要美術品指定。22.6×29.1 ギメ美術館/東京国立博物館〈21.5×28.3〉蔵)

1206 雉と蛇(東京国立博物館)



●「群鶏」(この頃か。大判団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。伊勢屋市右衛門(角辻)版。22.5×29.0 重要美術品指定。東京国立博物館蔵)文政5年~6年説あり。また、『2005 北斎展図録』(p350)の解説では、版下絵と署名は、天保5年3月「卍」に改名する以前になされたものの、何らかの理由により版行が遅れ、天保6年に検

閲を受けて出版されたものとしている。

※それぞれ七羽の雌雄の鶏は眼光鋭く固まるように集まって描かれる。背景はベロ藍で塗りつぶされる。団扇の形に沿って切りとり団扇に貼って使用した。「狛」と同シリーズか。

1207 群鶏(東京国立博物館)

右下に、囲みに辻の版元印がある。従来は、南伝馬町二丁目の辻屋安米兵衛とされていたが、近年、岩切友里子の研究で、団扇問屋の角辻と呼ばれた



伊勢屋市右衛門であるという（『2017 北斎一富士を超えて』図録 p 160）。

天保5(1834) 甲午 75 歳 いつものおやぢ、土持任三郎、三浦屋八右衛門、前北斎為一、 葛飾前北斎為一老人、前北斎為一述記、前北斎記老人、七十五 齡前北斎改画狂老人記、 画狂老人記、前北斎為一改画狂老人記、前北斎記、齡七十五 歳北斎為一改記 印 富士の 形、葛しか：孫(25 歳) 阿栄(37)
---

◇諸国飢饉。

◇2 月 7 日、江戸神田大火（甲午火事）。神田佐久間町より出火。2 月 13 日まで続き、死者 4000 人といわれる。

◇6 月、江戸町会所で窮民 33 万 4000 人に施米。

◇7 月 6 日、歌川国安没（41）。

◇長崎オランダ商館参府。

◇水野忠邦、老中に就任。

○歌川広重『近江八景』（この頃か。名所に因む和歌を載せる）。保永堂版『東海道五拾三次』完結。

○斎藤月岑(1804～1878)『江戸名所函会』（前半 1～3 卷 10 冊。後半は天保 7 年：1836 刊）。

### 【画狂老人記期 肉筆画に傾注】

★この年まで転居 56 回に及ぶ。

### 【愚老も久々疝痛にて、未だ歩行相成らず候】

★5 月 4 日付け、小林新兵衛宛書簡（『葛飾北斎伝』 p 234～235）「時候御機嫌奉 伺 候。愚老も久々疝痛（筆者注：胸や腰の痛み）にて、未歩行不相成候て、乍存御無沙汰仕候。江川注も此節は、大病に御座候間、相頼候儀不相成候、（中略）全快次第参上仕、万々御礼可申上候以上。

五月四日

御留守にても、此書面御開封被成、遠方故、何卒金談御済し被下度候。

いつものおやぢ

小林新兵衛 様

土持仁三郎 九拜

御店衆中様

御留守にても御開封被成下候様奉 願 候」。

注) 江川：江川留吉。北斎が信頼していた彫り師。

※これによれば、疝痛をわずらい、彫師の江川留吉も大病のため、仕事が出来ず、全快次第、挨拶に伺うが、遠方にいるので云々と記している。「遠方」とは浦賀蟄居中を指すとされる。この頃は手紙の自称に土持仁三郎や三浦屋八右衛門などの署名を用いている。

「土持」とは朱楽菅江の洒落本『大抵御覧』（早稲田大学「古典籍総合データベース」より）に「（略）かたはらの山をきりたいらげ、その土を以て、新規に山のかたちをきづ

く。それより、老若男女を論ぜず、(略)われもわれもと土をはこぶ。力すぐれし<sup>そうし</sup>壯士は、十人前も一人ではこび、或は一もつこう、二もつこう、又やごとなき<sup>ひめごぜん</sup>姫御前も紙につゝみてそれ<sup>それ</sup>くに、多少を論ぜず<sup>つちもち</sup>土持して、だんだんつもる一<sup>いっきのこうついで</sup>簣功終に九<sup>きゅうじん</sup>初の山となれり」とある。人それぞれに応じて土を運び積み上げて高い山となるというイメージから名乗ったか。

★8月16日、<sup>やなぎばし</sup>柳橋の<sup>かわうちやはんじろう</sup>河内屋半次郎の料理屋で書画会を催す。書画会は、期日の前から揮毫する画家や書家のなどの名を宣伝しておき、客は揮毫する画家達を眺めながら会食し、気に入った書画を買い求めるといふもの。絵師たちの資金集めでもある。

★「画狂老人記」時代、錦絵はほとんど描かず。肉筆画を多く手掛ける。

### 【卍に改め、北斎なることを知らず】

※「梅彦氏曰く、此の頃、北斎の名世に顕れて、婦女子といへども知らざるものなし。然るに名を<sup>まんじ</sup>卍と改めし時は、人皆前の北斎なることを知らずして、大に怪みたり。それにつき一話あり。北斎翁、嘗て川柳風の狂句を好み、名を百姓といひ、秀吟頗る多し。実に<sup>かつしかれん</sup>葛飾連<sup>とうりやう</sup>注1の棟梁たり。或時<sup>あるとき</sup>中橋<sup>なかはし</sup>注2の小川といへる茶店にて、<sup>せんりやうてん</sup>川柳点<sup>かいかん</sup>注3の開卷<sup>かいかん</sup>注4ありしが、其の帰りがけ、人々と共に日の暮れければ、日本橋の<sup>あまだな</sup>雨店<sup>あまだな</sup>注5にて、<sup>おだわらちやうちん</sup>小田原提灯<sup>あし</sup>注6一ツを買ひ求めんとするに、これなし。只油も引かぬ白き提灯のみありたり。連中の<sup>ゆめすけ</sup>夢助といへる人(本所<sup>ほんじよたてかわ</sup>堅川の人)指して<sup>ゆびさ</sup>卍さん<sup>まんじ</sup>チョット、かきて給はれといふ。翁はよしくとて、<sup>かたわら</sup>傍の<sup>すずりぼこ</sup>硯箱にありし筆を採り、提灯のさげる方を見世の男にもたせ、底の方を左の手にもちて、???<sup>なかく</sup>注7ニツ三ツを画きたり。其の男これを見て、おまへさんは、なかく画心がありますといひしに、人々ドット笑ひて、いとおかしかりしとて、翁嘗て余に語れり」(『葛飾北斎伝』p139~140 ルビは筆者)

注1) 葛飾連：狂歌や俳諧等の愛好者のグループを連という。北斎は自分の川柳グループの主催者だったのだろう。

注2) 中橋：中橋広小路。日本橋の南、<sup>とお</sup>通4丁目に隣接した地帯(現東京都中央区八重洲3・4丁目) (『葛飾北斎伝』脚注)。

注3) 川柳点：前句付の評点を行う川柳の会 (『葛飾北斎伝』脚注)。

注4) 開卷：俳句や川柳を一座の前で披露すること。

注5) 雨店：<sup>あまだな</sup>尼店であろう。<sup>むらまち</sup>室町一丁目西側の一面の<sup>りやく</sup>俚俗の称(現東京都中央区室町一丁目)。古く<sup>あまがさきや</sup>尼ヶ崎屋某という漆器店があり、この略称に由来するという (『葛飾北斎伝』脚注)。

注6) 小田原提灯：ぶらさげて携行する円筒状の提灯。天文年間(1532~55)小田原の<sup>じん</sup>甚左衛門の創始によるといふ (『葛飾北斎伝』脚注)。

注7) ???：実際は疑問符の下の子がない模様似た図柄が三つ並ぶ。意味不明。

### 【どら孫を自立させるも、依然物入りの生活】

★放蕩の孫に店を持たせ肴売りとさせ、女房を持たせる。

※10月23日、<sup>すうざんぼう</sup>嵩山房(小林新兵衛)宛書簡(金策依頼の手紙の一部)。

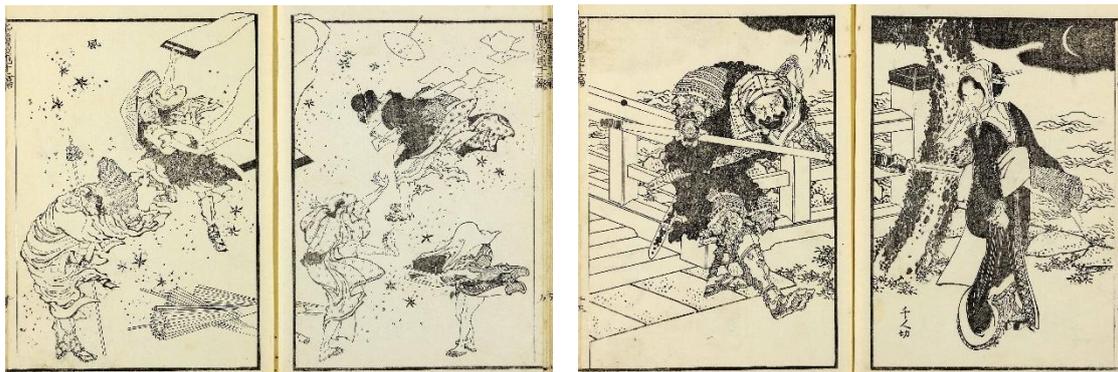
「(略)さて、愚老どら者にふり込め、夫より人足<sup>にんそくじま</sup>島脚注、彼是と評議仕、色々<sup>つかまつり</sup>打寄相<sup>いろいろうちり</sup>

談之上にて、引受人等出来仕、店を為持、肴売と相成、両三日中には、ヤツト女房を、もたせ候手筈に候、乍然未だ老人の物入に罷成候(略)」(『葛飾北斎伝』p233 ルビは筆者による)。

脚注) 人足島：免囚や無宿者の収容と何らかの技術習得を目的として石川島に設置した人足寄場。現在の東京都中央区佃2丁目辺。

※この二ヵ月後には出奔したといわれる。孫は25歳ぐらいである。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十二編』(1月2日。初摺版は墨摺。無款。22.7×15.7 すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館：フルヴェー・コレクション蔵)



1208 伝神開手『北斎漫画』十二編 (ARC 古典籍データベースより)

※奥付には書肆として、河内屋喜兵衛(大坂心斎橋筋)、永楽屋東四郎(尾州名古屋本町七丁目)、同出店(江戸日本橋通本銀町)、角丸屋甚助(同麹町四丁目)と記されている。最終ページに彫工の江川留吉の名が記される。

※十一編は文政6年(1823)～天保4年(1833)頃に刊行か。

序文「北斎漫画は、雇愷之注甘蔗(筆者注：さとうきび)を食ふが如く、漸佳境に入れり。十二編に臻て狂態百出、筆力老てますく壯也。僧正注2が俵と軽量を論じ、一蝶注3が鞠と高低をあらそふべし。絵難房注4ふたゝび生るとも、いかでか間然する事を得ん。天保甲午芍薬亭注5」(『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より)

注1) 雇愷之：344?～405? 中国東晋の画家。サトウキビをかじるにも、一般の人と違って先端の方から甘い根の方へとかじるのが常であり、その理由を問われたときに「漸く佳境に入る(漸入佳境)」と答えたという。この言い回しは、感興が高まる形容として使われるようになる(Wikipediaより)。

注2) 僧正：鳥羽僧正が米俵が風に吹かれて塵灰のように飛んで、それを小僧や法師たちが追いかけている絵を描いたので、院がその意味をたずねたところ、寺に届けられた供米を俵に入れるとき不正が行われて、中は糟糠(米ぬかなど)だけになって軽いので風に吹かれて空に飛んでしまう旨を描いたのですと答えた。そのことで上皇は、俵に米を詰める際に不正が行われている事を知り、以後供米の取扱が厳しくなったという『古今著聞集』の話の念頭にしている。

注3) 一蝶：1652～1724。英一蝶。江戸元禄期の画家。一蝶の「清水の舞台の蹴鞠図」

には、清水寺の舞台の高欄の上で蹴鞠をしている人物が描かれている。『古今著聞集』の「蹴鞠名人成通の事」にある藤原成通が清水の舞台の高欄の上で蹴鞠をした逸話を題材にした一蝶の絵を念頭にしている。

注 4) 絵難房：平安末期から鎌倉初期、後白河法皇の頃の人。どんな名画でも必ず非難した人。『古今著聞集』11 に「同御時、絵難房といふ物候ひけり。いかによく書きたる絵にも必ず難をみいだすものなりけり」と記される。

注 5) 芍薬亭：1767～1845。芍薬亭長根。江戸後期の狂歌師。

☆表紙：「北斎漫画十貳編図」と横書きで書かれた下に、(前北斎為一) (尾州書肆) (永楽堂)の文字を人物のあちこちに配している図。

●絵本『絵本忠経』(1月。墨摺一冊。半紙本。葛飾前北斎為一老人画。見返しには、前北斎卅老人画。高井蘭山注解。奥付に「天保五甲午年正月発兌」とある。江戸・小林新兵衛、大坂・秋田屋太右衛門、大坂・敦賀屋九兵衛、京都・出雲寺文次郎、京都・勝村治右衛門、江戸・岡田屋嘉七、江戸・英大助、江戸・須原屋茂兵衛版。22.8×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東洋文庫蔵)



1209 絵本忠経 (大英博物館)

●錦絵『諸国名橋奇覧』(春。横大判揃物。全11枚。前北斎為一筆。西村屋与八版)

※全11枚のシリーズは不自然として、檜崎宗重氏は「甲陽猿橋」あたりを付け加えて12枚揃とするという意見を『名品揃物浮世絵8北斎I』解説で紹介している。あるいは10図の予定であったが、後から「摂州阿治川口天保山」1図を付け加えたのではとする見方もある(『2017北斎一富士を超えて』展図録p120)。

☆〈かめみど天神たいこぼし〉(25.3×37.8 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館/メアリス美術研究所/フルヴェアール・コレクション/ホノルル美術館/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※江東区にある亀戸天神には境内の心字池に架かる小さな太鼓橋がある。菅原道真を祀り毎月25日に書道の手習いで多くの人が参詣したという。境内には梅や藤が見事に咲き名所となっている。本図では数名の人物が橋上などで静かに池などを眺めている、梅や藤も描かれていない。全体に周囲の景色を簡略化して太鼓橋を強調している。



1210 かめみど天神たいこぼし (メトロポリタン美術館)

☆〈足利行道山 くものかけはし〉 (25.7×38.2 メトロポリタン美術館/北斎館/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館・チチンコレクション/ポーランド美術館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/ウィクトリア・アルバート博物館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館：ブルヴェーラー・コレクション/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※行道山浄因寺（栃木県足利市）の名刹を舞台に、本堂と茶室・清心亭に架けられた突桁橋（両岸からの跳木で橋の桁を支える構造で脚柱が無い橋）を描く。空中に浮いているような橋を円形に描き、峨々たる山の峰を強調することで、修験道の山の厳しさを出している。人物は描かれない。



1211 足利行道山 くものかけはし（メトロポリタン美術館）

☆〈山城あらし山吐月橋〉 (25.6×37.3 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：ブルヴェーラー・コレクション/すみだ北斎美術館/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※吐月橋は、京都嵐山の大堰川に架かる渡月橋のこと。霞のかかる山中に法輪寺の堂が小さく見え、その前の川岸には桜が咲き誇っている。橋には桜を楽しむ人や歩いている人が数人描かれ、川面にはゆったりと筏が行く。



1212 山城あらし山吐月橋（メトロポリタン美術館）

☆〈すほうの国きんたいはし〉 (25.0×36.9 メトロポリタン美術館/北斎館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/山口県立萩美術館/島根県立美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館ブルヴェーラー・コレクション/ホノルル美術館//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※錦帯橋は、山口県岩国市の錦川（岩国川）に架かる日本三大名橋の一。太鼓橋の連なる雨中の橋上で、傘をさしている侍の後を笠を被って長鐘を持って従う男や、鉄箱を担いだ男などが描かれる。遠方に岩国城が見える。後摺版では、雨が削られている。



1213 すほうの国きんたいはし（メトロポリタン美術館）

☆〈飛越の境つりはし〉 (25.7×37.9 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館：新庄コレクション大英博物館/ミネアポリス美術研究所/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/太田記念美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館ブルヴェーラー・コレクション/ホノルル美術館/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/ブリュッセル王立美術歴史博物館//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※飛越は、飛驒と越中、あるいは越後を指すか。農家の夫婦が荷を背負って渡る吊橋はその重さに大きく下に撓んでいる。橋の右の山頂には二匹の鹿が静かに草を食んでいる。このような橋が実際にあったか、どこにあったかは不明。

1214 飛越の境つりはし (メトロポリタン美術館)



☆〈かうつけ佐野ふなはしのこづ〉 (24.9×36.8 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館:新庄コレクション/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/ミネアポリス美術館/太田記念美術館/ギメ美術館/群馬県立歴史博物館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館:フルヴェラー・コレクション/ホノルル美術館//中外産業株式会社:原安三郎コレクション蔵) 1215 かうつけ佐野ふなはしのこづ (メトロポリタン美術館)



※上野国佐野にあった船を並べた橋。万葉集巻 14 にある「上野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離かるがへ」と詠われる烏川(群馬県高崎市上佐野)で有名な橋だが、北斎の頃には既になく、「古図」によって描いたもの。ほぼ右へ直角に折れて対岸に渡る橋の上を雪を被りながら渡る二人の男と、馬に乗った男とその手綱を引く男の図。雪景色の図になっているのは、藤原定家の「駒とめて袖うちはらふかげもなし 佐野のわたりの雪の夕暮れ」からの着想ともいわれる。但し、この佐野は和歌山県新宮市の佐野である。「百橋一覽」(文政6年:1823)の右下に、小さく同じ構図が描かれている。

☆〈東海道岡崎矢はきのはし〉 (25.0×37.4 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館/ホノルル美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館:フルヴェラー・コレクション/ホノルル美術館//中外産業株式会社:原安三郎コレクション蔵)

※矢作川に架かる多くの橋梁に支えられる太鼓橋。橋上には多くの旅人が行交い、橋下の中州らしい所で大的を射る弓道の演武が行われている。この弓道は、藤原為家の和歌「あづさ弓矢矧の里のかば桜 花にのみいるわが心かな」を踏まえているのではないかという説もある(『名品揃物浮世絵8北斎I』解説)。

橋の手前の下の洲には柄の長い傘が刺してあり、その面には版元の永寿堂の文字や版元印、版元の住所(馬喰町二丁)がさりげなく記されている。

1216 東海道岡崎矢はきのはし (メトロポリタン美術館)



☆〈魚ちぜんふくろの橋〉 (25.8×38.4 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館:永田コレクション/大英博物館/福井県立美術館/フリーア美術館:フルヴェラー・コレクション/クラブ・ホーン・コレクション/ルヴェラー・コレクション/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/神奈川県立美術

館/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※福井県足羽市内に架かる九十九橋を描く。石橋と木橋を中央で組み合わせた珍しい橋が北斎の興味を惹いたのではともいわれる。橋の向こう側の岸辺にすだれのように立てかけてあるのは、越前の名物である奉書紙だろうか。『日本山海名物図絵』(宝暦4年：1754 平瀬徹斎作。長谷川光信画)三巻の「越前福井石橋」を参考にしたといわれる。



※校合摺がある(島根県立美術館：永田コレクション蔵) 1217 ちちぜんふくみの橋 (メトロポリタン美術館)

☆〈三河の八ツ橋の古図〉(25.8×38.1 メトロポリタン美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/すみだ北斎美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館：ブルグエーラー・コレクション/ホノルル美術館/メトロポリタン美術館/アレックス・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※『伊勢物語』九段の杜若で有名な八つ橋(愛知県知立市の東部、逢妻川南の水郷地帯)を描く。「ある男」が伴の者に「ここに咲くかきつばたの五文字を頭に据えて旅の心を詠め」と所望され、「からころも きつつなれにし つましあれば はるはるきぬる たびをしぞおもふ」(いつも着て柔らかく着なれた唐衣のように、慣れ親しんだ妻を都に残して、はるばるとここまで来た旅をしみじみと思うことだ)と折り句を詠んだ故事で有名な橋。但し北斎の頃にはこの橋はなかったと思われ、「かうつけ佐野ふなはしの古づ」同様「古図」によって描いたもの。杜若が群生する上に架けられた曲がりくねった橋を旅人や農夫などが渡っている。



1218 三河の八ツ橋の古図 (メトロポリタン美術館)

☆〈摂州阿治川口天保山〉(25.2×37.8 この図のみ「應需似浪花之図 前北斎為一筆」の落款がある。メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/大英博物館/すみだ北斎美術館/フリーア美術館：ブルグエーラー・コレクション/ホノルル美術館/神奈川県立歴史博物館/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館/アレックス・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

1219 阿治川口天保山 (メトロポリタン美術館)

※天保山は、阿治川(安治川)河口に、天保3年(1832)に完成した人工の小丘で眺望がよいので行楽客で賑わったという。図は、天保山全体が描かれ、麓から山頂にかけての道の途中に架かる二橋を描く俯瞰の構図になっている。全体が遠景となっていて、人物も小さく描かれている。「似浪花之図」とある



ので、大坂で描かれたなにかの図から描いたと思われる。

☆〈**摂州天満橋**〉(25.8×37.6 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/ギメ美術館/クラブ・ホン・コレクション/フリーア美術館 プルヴァレール・コレクション/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※天神橋、難波橋に並んで浪花三大橋の**一**で淀川に架かる。旧暦6月25日(現在は7月25日)、天満天神の大祭の人出の賑わいが描かれ、橋上には提灯がたくさん据えられ、所狭しと人々がいる図。橋下には提灯を付けた何艘かの船が浮かんでいる。



1220 摂州天満橋 (メトロポリタン美術館)

●錦絵「**西村屋版中判花鳥シリーズ**」(正月。縦中判揃物。10枚揃。2図ずつ組み合わせた装丁となっている。漢詩や俳句が添えられる。前北斎為一筆。西村屋与八版)

※『千代椿良著聞集』(曲亭馬琴作)第二輯の出版広告(西村屋与八の天保5年の広告)に「花鳥色紙絵 極彩色」とある。動植物の説明は「デジタル大事典」による。

☆〈**芍薬 カナアリ**〉(24.3×17.9 大英博物館/東京国立博物館/ギメ美術館蔵)

※背景は全てベロリン藍(ペルシャン・ブルー)。紅色に咲く芍薬の花の蜜を吸うように近づくカナアリ(カナリア)。漢詩は「千葉揚州種 春深覇衆芳 王十朋」

芍薬は、ボタン科の多年草。高さ60センチ。葉は複葉。初夏、大形の紅・白色などのボタンに似た花を開く。漢方で根を乾かして鎮痙・鎮痛剤とする。カナアリは、カナリアで、アトリ科の鳥。野性のもはスズメ大、全体に緑褐色で、カナリア諸島などに分布。日本には18世紀末に長崎に舶来。姿を楽しむ巻き毛カナリア、声を楽しむローラーカナリアなどがあり、羽色も黄・白・灰・赤・橙色などさまざま。



1221 芍薬 カナアリ (大英博物館)

☆〈**鶯 垂桜**〉(24.3×18.2 大英博物館/ベルリン東洋美術館/ギメ美術館/オーストリア応用美術館/東京国立博物館/ホノルル美術館蔵)

※垂桜の枝に逆様にとまる鶯。喉の部分が淡紅色なので雄の鶯である。背景は無地で全てベロリン藍(ペルシャン・ブルー)。雪萬の句「鳥ひとつ 濡て出けり 朝さくら」が添えられる。



1222 鶯 垂桜 (大英博物館)

垂れ桜は、バラ科の落葉高木。ウバヒガンの変種で、枝先が垂れ下がるもの。3月上旬に淡紅白色の花を開く。紅色の花をつけるベニシダレなど品種も多い。鶯は、アトリ科の鳥。全長16センチくらい。頭は黒く、背は青灰色。雄は頬の辺りに淡紅色の部

分がある。山地の樹林にすみ、フィーフィーと口笛を吹くような声で鳴く。

☆〈**文鳥 辛夷花**〉 (25.0×18.1 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東京国立博物館/すみだ北斎美術館/ベルリン東洋美術館蔵)

※辛夷の花を付けた左上から右下に流れる茎の途中で止まって休む文鳥。足でしっかり体を支え、下に向かって飛び立とうとしているようにも見える。背景を紅色で上からのグラデーションで描いている。漢詩は「東風日夜發 桃李不禁吹 檢点濃華事 辛夷落較遲 陳淳」

1223 文鳥 辛夷花 (大英博物館)

文鳥は、カエデチヨウ科の鳥。全長約 15 センチ。体は灰色で、頭や尾が黒、ほおが白、くちばしは太く赤い。飼い鳥とされ、全身純白のものもある。ジャワおよびバリ島の原産。辛夷は、モクレン科の落葉高木。山野に見られ、葉は幅広の倒卵形。春、葉より先に、大形の香りのある白色の6弁花をつける。秋に実が熟すと裂けて赤色の種子が垂れ下がる。



☆〈**藤 鶺鴒**〉 (25.8×18.6 大英博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館蔵)

※垂れる藤の下で、鋭く尾を立てた鶺鴒が止まっているように見える。背景は淡紅色で、上からのグラデーションで描いている。漢詩は「引蔓出雲樹 垂綸覆巢鶺」

藤は、マメ科の蔓性の落葉低木。山野に自生し、つるは右巻き。葉は卵形の小葉からなる羽状複葉。5月ごろ、紫色の蝶形の花が総状に垂れ下がって咲く。園芸品種が多く、棚作りなどにして鑑賞する。鶺鴒は、スズメ目セキレイ科の鳥のうち、キセキレイ・セグロセキレイ・ハクセキレイなどの総称。水辺でみられ、スズメより大形。尾が長く上下に振る習性がある。

1224 藤 鶺鴒 (大英博物館)



☆〈**子規 杜鵑花**〉 (24.4×18.0 大英博物館/東京国立博物館蔵)

※杜鵑花が赤く咲き乱れ、その上を飛ぶ子規。背景は雲と青空が描かれる。背景は上部を薄いベロ藍で描く。漢詩は「只驚白昼山竹裂 杜宇初聞第一声 楊誠齋」



子規は、時鳥、杜鵑とも表記する。カッコウ科の鳥。全長 28 センチくらい。全体に灰色で、胸から腹に横斑がある。アジア東部で繁殖し、冬は東南アジアに渡る。日本には初夏に渡来。キョキョキョと鋭く鳴き、「てっぺんかけたか」「ほぞんかけたか」「特許許可局」などと聞きなし、夜に鳴くこともある。自分の巣をもたず、ウグイス・ミンサザイなどの巣に托卵する。

1225 子規 杜鵑花 (大英博物館)

☆〈**黄鳥 長春**〉 (26.0×19.0 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東京国立博物館蔵)

※図の左右に薔薇の花が描かれ、横に伸びた細い茎に止まる黄鳥。黄鳥は高麗鶯のこと。

背景は上部を薄いベロ藍のグラデーションにしている。乙二の句「はらの華 ありぬる折か 岡の家」が添えられる。

高麗鶯は、セズメ目コウライウグイス科の鳥。全長 26 センチくらい。全体に黄色で、尾や翼の先、目から後頭部にかけて黒い。中国・朝鮮半島・東シベリアに分布。日本では迷鳥。鳴き声がよい。ウグイスとは別種。黄鶯、朝鮮鶯とも。長春は、長春花のことで庚申薔薇の別名。コウシンバラは、バラ科の常緑低木。主に5月ごろ紅紫色の花を開くが、四季を通じて咲く。名の庚申は隔月の意で、たびたび花が咲くことによる。中国の原産で、庭園に植えられる。



1226 黄鳥 長春（島根県立美術館）

☆〈鶇 白粉花〉（25.2×18.7 東京国立博物館/ミネアポリス美術館/ベルリン東洋美術館蔵）

※白粉花の茎に止まり上を見ている鶇。賛の句は「白粉の花や牡丹のうしろ垣 瑤台女」

鶇は、アトリ科の鳥。全長 23 センチくらい。体は灰色で、頭・風切り羽・尾羽は紺色。くちばしは太く黄色。木の実を食べる。さえずりは「お菊二十四」などと聞きなされ、「月日星」とも聞こえるところから三光鳥ともいう。東アジアに分布。白粉花は、オシロイバナ科の多年草。園芸上は一年草としても扱われる。高さ約1メートル。葉は広卵形で、対生する。花は夏から秋にかけて咲き続け、色は紅・白色や絞りなどがあり、らっぱ状で、夕方に開く。江戸時代、種子の白い粉をおしろいの代用にした。



1227 鶇 白粉花（東京国立美術館）

☆〈翡翠 鳶尾艸 瞿麦〉（25.0×18.8 東京国立博物館/ギメ美術館蔵/ヴィクトリア・アルバート博物館/ホノルル美術館蔵）

※鳶尾艸は、あやめのこと。青いあやめの根元に赤いなでしこが咲き、カワセミがアヤメの緑の葉の間から顔を覗かせている。漢詩は「回顧生碧色 動揺揚縹青 蔡邕」

翡翠は、ブッポウソウ目カワセミ科の鳥。全長 17 センチくらい。頭から背にかけて光沢のある青緑色、腹は栗色。くちばしは大きく、黒色で、雌は下くちばしが赤。水に飛び



込んで魚を捕って食べる。鳶尾艸は、射干、著莪とも表記する。アヤメ科の多年草。林下に群生し、高さ50~60センチ。葉は剣状。5月ごろ、黄色い斑点のある白い花を咲かせる。種子はできない。胡蝶花ともいう。瞿麦は撫子とも表記する。撫子は、ナデシコ科の多年草。山野に自生し、高さ約50センチ。葉は線形で白色を帯び、対生。夏から秋、淡紅色の花を開き、花びらの先は細く裂けている。秋の七草の一。

1228 翡翠 鳶尾艸 瞿麦（東京国立博物館）

☆〈<sup>アオ</sup>鶇<sup>いすか</sup>（鶇）<sup>おにあざみ</sup>小薊〉（25.4×18.6 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館蔵）

※赤い<sup>あざみ</sup>薊の花を咲かせている緑の茎に止まっている<sup>いすか</sup>鶇。背景の上部はベロ藍でグラデーションに彩色している。「鶇」は「鶇」の誤表記。賛の句は「暮るまで日あたる岸や花薊 桃坡」

<sup>いすか</sup>鶇は、アトリ科の鳥。全長 18 センチくらい。全体に雄は暗紅色、雌は黄緑色。くちばしは曲がって上下が食い違い、松やモミの実を食べる。ユータシアと北アメリカに分布。日本には冬に渡来するが、繁殖することもある。<sup>おにあざみ</sup>小薊は鬼薊と表記する。鬼薊は、キク科の多年草。日本特産で、本州の山中に自生。高さ 0.5～1 メートル。全体に毛が多い。葉は基部が広く、縁に長いとげがある。6～7 月ごろ、粘りけのある紫色の頭状花をつける。



1229 鶇（鶇） 小薊（島根県立美術館）

☆〈<sup>もぐ</sup>鶇<sup>るり</sup>翠雀<sup>ゆきのした</sup>虎耳草<sup>へびいさご</sup>蛇莓〉（25.4×18.6 東京国立博物館/ベルリン東洋美術館/すみだ北斎美術館蔵）

※赤い<sup>へびいさご</sup>蛇莓と緑の<sup>ゆきのした</sup>虎耳草に向かっている<sup>もぐ</sup>鶇と<sup>るり</sup>翠雀。背景の上部はベロ藍で下に向かってグラデーションになっている。賛の句は「百舌鳴や分別は皆草にある 蘿雲」

<sup>もぐ</sup>鶇は百舌、百舌鳥とも表記する。鶇は、モズ科の鳥。全長約 20 センチ。雄は頭部が赤茶色で目を通る黒い帯があり、背面は灰褐色、下面は淡褐色。雌は全体に褐色。くちばしは鋭い鉤状をし、小動物を捕食。秋になると、獲物を木の枝などに突き刺して速贄に作る習性があり、また、長い尾を振りながらキイキイキチキチと鋭い声で高鳴きをする。平地や低山の林縁で繁殖。<sup>るり</sup>翠雀は瑠璃鳥で、ヒタキ科ヒタキ亜科の鳥。全長 17 センチくらい。雄は背面が瑠璃色でのどから胸が黒色。雌は全体に褐色。日本へは夏鳥として渡来、溪流近くで繁殖し、冬季は東南アジアへ渡る。高い木の上で朗らかにさえずる。オオルリ。<sup>ゆきのした</sup>虎耳草は「雪の下」と表記する。ユキノシタ科の多年草。湿った所に生える。全体に毛があり、茎は紅紫色で地をはい、節から小苗を出して増える。葉は多肉質の腎臓形で、長い柄があり、裏面は暗赤色。夏、20～50 センチの花茎を伸ばし、白い花をまばらにつける。花びらは5枚あり、下の2枚が長い。葉を腫れ物の民間薬にし、食用にもする。<sup>へびいさご</sup>蛇莓は、バラ科の多年草。原野や道端にみられ、茎は地をはい、節から新芽を出してふえる。葉は3枚の小葉からなる複葉で、長い柄をもつ。4～6 月、黄色い5弁花をつけ、実は赤く熟し、食べられるが味は淡白。



1230 鶇 翠雀 虎耳草 蛇莓（すみだ北斎美術館）

●団扇絵『<sup>うたわあ</sup>団扇絵シリーズ』（「<sup>にしむらやちゅうばんからちゅう</sup>西村屋中判花鳥シリーズ」の別摺版。所在不明）団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。版元不明）

●錦絵『<sup>もりしげんちやうおおげん</sup>森治版長大判シリーズ』（仮題。5 図。前北斎為一筆。長大判揃物。各平均 52.0

×23.6 森屋治兵衛版 すみだ北斎美術館/東京国立博物館蔵)

☆〈滝に鯉〉 (「鯉の滝登り」とも。重要美術品。52.2×23.2 大英博物館/ホノルル美術館蔵)

※滝を上る鯉と、滝下の烈しい水流から顔をのぞかせる鯉。



1231 滝に鯉 (大英博物館/ホノルル美術館)

☆〈牧馬〉 (「群馬」とも。51.3×23.5 日本浮世絵博物館/東京国立博物館蔵) ※若松の茂る野原に放たれた馬の群れ。手前には朱色の馬と茶色の馬(鹿毛)が大きく描かれ、葦毛(白馬)の小馬が足元で懐いている。遠景に、水面を泳いで向こう岸に渡る馬や腹這いの馬、小松の生えた丘に二頭の馬などが描かれる。

1232 牧馬 (日本浮世絵博物館)



☆〈游亀〉 (「水中の亀」とも。重要美術品。50.0×23.8 東京国立博物館/ホノルル美術館蔵)

※水中に三匹のが泳いでいる。手前の亀は幸福の象徴である末広がり(ハシラ)の尾を靡かせている瑞亀となっている。水草の浮く水面は日の光を浴びて輝いている。

1233 游亀 (東京国立博物館)



☆〈桜に鷹〉 (「止まり木の鷹、桜」とも。

52.0×23.6 東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵)

1234 桜に鷹 (日本浮世絵博物館)

※桜の花が咲く側の鷹狩用の架垂れの紐付きの架(止まり木)に止まって天を見上げる鷹の凜



とした表情の図。

☆〈雪の松に鶴〉 (「雪中松に鶴図」「鶴二羽 雪の松」とも。49.6×23.2 島根県立美術館:永田コレクション/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/ヴィクトリア・アルバート博物館/大英博物館/千葉市美術館/ホノルル美術館蔵)

※雪を被った湾曲した松の老木に二羽の鶴(一羽は羽を広げている)がとまっている図。手前の鶴の羽はペロ藍で描かれる。

1235 雪の松に鶴 (日本浮世絵博物館)



### 【イメージとアイデアが自在に広がる『富嶽百景』】

●絵手本『富嶽百景』初編(3月。半紙本薄墨摺一冊。江戸馬喰町、

西村屋祐蔵（成鄰堂）版。連梓：永楽屋東四郎、角丸屋甚助、西村屋与八。柳亭種彦序文。七十五齡前北齋為一改画狂老人卅筆。[印]富士の形。各平均 22.6×15.7 大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/檜崎宗重コレクション/東京国立博物館/国立国会図書館/山口県立萩美術館/浦上蒼穹堂/日本浮世絵博物館/東洋文庫：岩崎コレクション/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション

※二編は翌年出版される。三編の刊行年は不明。

※初編から三編まで全 102 図。河村岷雪の「百富士」（1767）に倣う。『富嶽三十六景』から更に富士に対する画興を深化させたと思われる。『富嶽百景』では、富士から受ける自由なイメージを広げていて、単調な墨摺のグラデーションを生かし、『富嶽三十六景』で描ききれなかった富士との自由な関わりや心象を表現したと思える画帖となっている。イメージのコラージュであり、名所絵や風景画の範疇を超えている。

### 【色をすて、墨一色の濃淡で大地の空気が動く】

※檜崎宗重『北齋論』（p 425）に参考にするべき記述がある。

「（略）晩年北齋は風景画の表現に色数を二三色に限定した。絵手本類では僅かに一色にしたものがある。それは線を以て立つ北齋が、線をすてることが出来ず、線を有効に働かせる為の色削減であったとみるべきであるが、この富嶽百景に至っては、思ひ切つて色をすて、墨一色摺となした。墨を濃淡二色に分ち、濃墨を以て線を作り淡墨を以て色感を凝集表現した。従つて線は有効に活動して居り、而も大地の空気が動いてゐるのである。実にこれこそ風景版画の絶妙ちいふべきであつて、北齋最大の傑作となすに憚らない」

### 【我真面目の画訣この譜に尽せり】

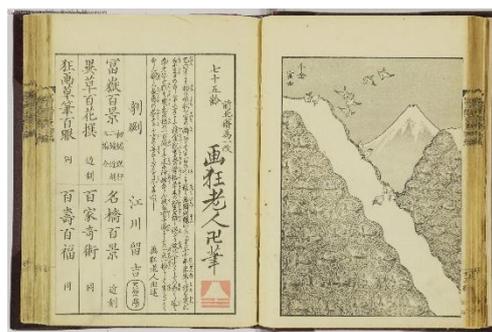
※西村屋与八・西村屋祐蔵（成鄰堂）の前年の広告。

「（略）此編ハ翁諸州を遊歴せる比普く勝槩（筆者注：勝景に同じ）を搜り佳景を索め山川原野閭巷（筆者注：村里）僻陋（筆者注：田舎びた所）幽邃の地といへども遺漏なく其真趣を模写し 篋笥（筆者注：四角い竹籠）に秘蔵する縮図なり 翁僕に語りて曰 我真面目の画訣この譜に尽せりと 愛玩して措ず 僕展覽するに些々たる片楮の中千山万水の妙境を収め丹青の奇絶所謂全龍の頭然たる者也（略）」（檜崎宗重『北齋論』：『年譜』資料 21 所収。ルビは資料のまま。読みやすくするため句点を示す空白を施した）

### 【己六歳より物の形状を写の癖ありて（略）七十年前画く所は実に取に足るものなし】

1236『富嶽百景』初編・跋文（大英博物館：古典籍 ARC ホールデータベースより）

※跋文「己六歳より物の形状を写の癖ありて半百の比より数々画図を顕すといへども七十年前画く所は実に取に足るものなし 七十三歳にして稍



禽獸虫魚の骨格草木の出生を悟し得たり 故に八十歳にしてハ益々進ミ九十歳にして猶其奥意を極め一百歳にして正に神妙ならん歟 百有十歳にしてハ一点一格にして生るがごとくならん 願はくは長寿の君子予が言の妄ならざるを見たまふべし 画狂老人卍述」。

【初めて川柳の号である「卍」の落款を用いる】

※「天保五年、北斎翁『富嶽百景』の初編を画しし時、名を改めて卍といふ。これより落款には、かならず画狂老人卍、或は前北斎卍と書す」（『葛飾北斎伝』 p 138）

文政 8 年（1825）の川柳本『十二評十六題 狂歌国尽』（瀬川路蝶撰）の序文には「干時文政酉夏 前北斎為一述卍」とある。

※「富嶽百景」以後、錦絵・風景画を離れ、故事古典・歴史・動植物・教訓本に専念。歌川広重の風景が人気であることの影響もあるか。

【初編】（平均 22.6×15.7）

☆〈袋〉（図上部に横書きで、「天保甲午 新鑄（筆者注：新彫に同じ）」とある。足を紐でつながれ止まり木に止まる鷺を描き、前北斎為一改画狂老人卍筆と署名する。西村屋祐蔵版（成鄰堂）。オランダ国立民族学博物館蔵）

※以下の図版は山口県立萩美術館・浦上記念館作品検索システムより。

☆〈扉：富嶽百景 成鄰堂〉

☆柳亭種彦の序文。

☆〈木花開耶姫命〉



※富士山の神体とされる木花開耶姫命（浅間大神）が鏡をかざす姿を描く。江仙（江川仙太郎）彫刻。

1237 木花開耶姫命

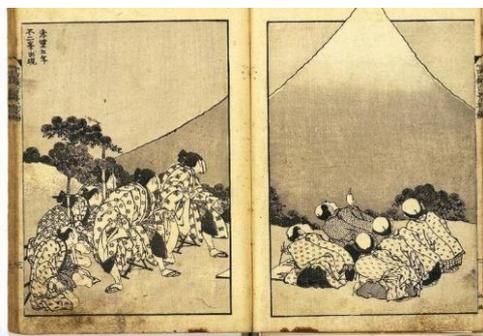
☆〈孝靈五年不二峯出現〉

※孝靈 5 年（BC286）に富士山が出現したと伝えられ、新たな山を検分する役人たちと、座つて富士を指差しながら記録する男たちを描く。江仙彫刻。

1238 孝靈五年不二峯出現

☆〈役ノ優婆塞富嶽草創〉

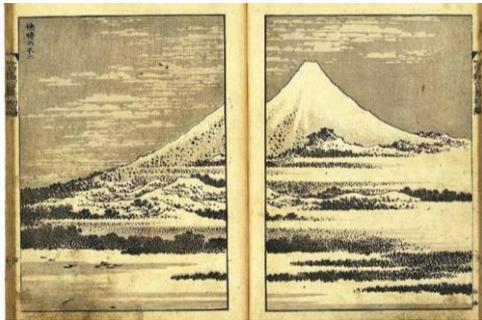
※役ノ優婆塞は文武天皇の頃の山岳修験者の祖といわれ、坐ったまま金剛杖を抱え、右手の指で印を結び、前に置いた高下駄を見つめる姿を描く。伊豆に流されたとき、夜に空を飛び富士山で修行したと言われる。江仙彫刻。



☆〈快晴の不二〉

※『富嶽三十六景』の「凱風快晴」に似た富士の図。24.0×16.0 静岡県立中央図書館蔵。

富士の裾には残雪が点苔で描かれる。左上の空には鳥が三羽飛んでいるように見える。江仙彫刻。



1239 快晴の不二

☆〈不二の山明キ〉

※富士の山容が描かれなないのは、『富嶽三十六景』の〈諸人登山〉と同様。旧暦6月1日の山開きに「不二」の字を書いた饅頭笠を被った群衆が、S字のように狭く曲がりくねった山道を行く。一人だけ笠の内側の顔を見せて法螺貝

を吹いている。江仙彫刻。

1240 迂り 不二の山明キ

☆〈迂り〉

※同じく富士の山容は描かれず、金剛杖を使いながら大砂走り、または砂走りと呼ばれる七合目からの砂場を杖をついて、逆S字に滑り降りる男たちを描く。皆「不二」の字を記した饅頭笠を被り、顔を見せない。



☆〈宝永山出現〉

※宝永4年(1707)の駿河印野村(富士山東麓の村。静岡県駿東郡の村だったが、現在は合併して御殿場市の一部となった)辺での噴火で、いくつかの火口が富士山の瘤のように隆起した。その大噴火で人も家も吹き飛ばされている様子が描かれる。山容は描かれなない。梅林彫刻。

☆〈其二〉

※〈宝永山出現〉の其の二の意味であろう。宝永山が富士山の瘤のようになっているのを望み、三人連れの旅人が、顔に瘤のある仲間のそれと見比べて、宝永山を指差している。富士山に見入って背を向けている農夫の後ろで、鋤を持ち腰をかがめる農婦の尻を指差して笑っている二人の旅人。梅林彫刻。



1241 其二

☆〈霧中の不二〉

※早朝、霧に霞む富士山を遠景にし、別の山の尾根を農具や籠を担ぎながら登る農夫たち。尾根の左側の溪谷に霧に霞む舟がうっすらと五隻描かれる。和助彫刻。

☆〈山中の不二〉

※山中の老木木の洞に生えた茸を採る農婦たちと、木の根元で鉄砲の手入れをする二人の猟師。その向こうに富士が見える。和助彫刻。

☆ 〈柳塘の不二〉

※柳の群れ立つ木々の間から望める富士山の山道を往来する旅人。腰を下ろして富士を見る二人の農夫。「大吉」と染められた腹巻をつけた馬に乗りながら富士を見る男。手に荷物を持って煙管を銜えながら赤子を背負って歩く女。天秤の荷物を担ぐ供人を連れた侍など、多くの人が往来する。吉寅彫刻。

☆ 〈七夕の不二〉

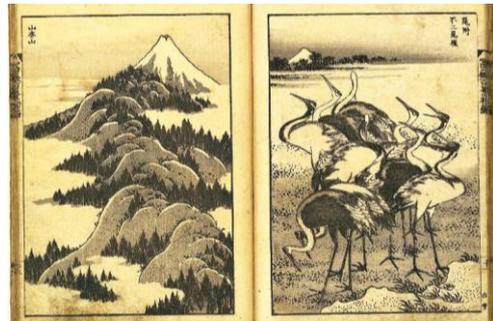
※あちこちの屋根より高く立てられた竹竿に括りつけられた短冊が風にそよいでいる。手前の屋根の柵には二本の竹が立てられ、図の上部に突き抜けている。吉寅彫刻。

☆ 〈袖ヶ浦〉

※うねる波と切り立つ岩の下に掘られた室に座像らしきものが描かれ、岸近くの家並の向こうに富士が描かれる。空には鳥が群れ飛んでいる。相模国足柄郡袖ヶ浦の寒々とした景觀といわれる。

☆ 〈尾州不二見原〉

※『富嶽三十六景』の〈相州梅澤左〉の構図に似ている。地上に群れる十羽の鶴の向こうに富士山を描く。古雪彫刻。 1242 山亦山 尾州不二見原

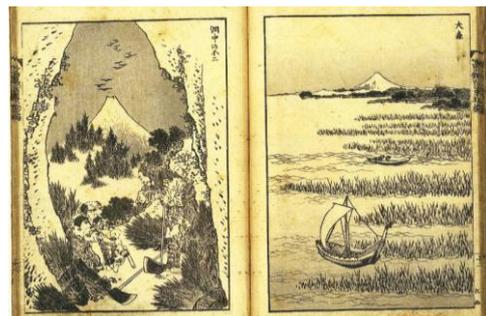


☆ 〈山亦山〉

※図の手前から瘤のように凹凸を繰り返す連山の山容は、文字通り山亦山のようなものである。尾根を続きを鳥瞰し、その先に富士山を描いている。

☆ 〈大森〉

※江戸の大森海岸から富士を望む図。手前には帆掛け舟が停泊し、その向こうの葦の間には海苔を採っていると思われる舟が浮かんでいる。葦のように見えるのは竹や木を組み合わせ海苔を付着させる筈と呼ばれる養殖用の仕掛といわれる。江仙彫刻。 1243 洞中の不二 大森



☆ 〈洞中の不二〉

※山の洞で、鉞を置いて座って休んでいる樵。その前で鉞を杖にして立って休んでいる樵。二人のいる洞の内側から富士山を見た図。空には雁が群れ飛んでいる。

☆ 〈松山の不二〉

※群生する丈の低い若い松のある丘陵で、多くの旅人が休んでいる。揚帽子の女の一行やお供の男たち。向こうから坂道を登ってきた旅人たちがいる。杉の向こうに富士山。一説に茸狩りの図としている。吉寅彫刻。

☆ 〈烟中の不二〉

※木の股に「青面金剛」注の文字が彫られた石と、その下に小さな金剛が安置されている。

その木の前で、旅人が、はらはらと落ちてくる紅葉を集めた焚火の前で手をあぶったり、煙草を吸って休んでいる。馬も手綱を垂らして側で休んでいる。焚火の煙を通して透かし見える富士山が描かれる。吉寅彫刻。

注) 青面金剛：帝釈天の使者の金剛童子。身体は青色、目は赤く三眼。怒りの表情で病魔を退散させるという。

☆〈田面の不二〉

※田面に移る逆さ富士。四羽の鶴が地上に降り立ち、二羽の鶴が飛んでいる。向こうの岸にも四羽の鶴が休んでいる。江仙彫刻。 1244 田面の不二



☆〈蘆中筏の不二〉

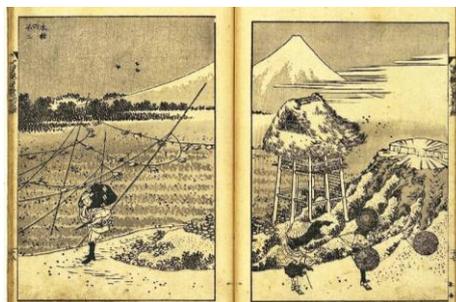
1245 蘆中筏の不二

※舟着き場で笠を被る二人の男が釣りをしている。船着き場から突きだした板の先に座って景色を眺める子ども。蘆の生える水面には船頭が竿さす五

隻の筏が進んでいる。背の高い蘆の穂先から富士が覗く。江仙彫刻。

☆〈木枯の不二〉

※『富嶽三十六景』の〈駿州江尻〉同様、木枯らし吹きすさぶ中を行く男は、鳥もちの竿を持ったまま、鳥が集まるように仕掛けた所に立っている。側に建てられた小さな祠のような屋根の茅葺が風で煽られ、その前の道を行く男の担ぐ天秤の前後の籠が裏返しになっている。後ろを行く僧の僧衣も強く煽られて木枯らしに吹きさらされている。背景に富士が描かれ、鳥が三羽飛んでいる。米吉彫刻。 1246 木枯の不二



☆〈元旦の不二〉

※富士を背景に、丸杵に三の字の模様を染めた衣装を着た三河万歳の二人とすれ違う年始周りの一行。主人は袴姿で、荷物を担ぐ使用人が先に行く。主人の後ろには差し箱を担ぐ供人。一行の右側にも松飾を背負った男がすれ違う。図の左下には大きな門松と「富」と書かれた凧が置かれている。正月の風景。江仙彫刻。

☆〈江戸の不二〉

※江戸城の鯉鉾から雪の富士を望む。

☆〈鏡臺の不二〉

1247 鏡臺の不二

※富士の頂上にかかる巨大な夕日が光が放射状に空



に放たれている。手前には山形の小さな橋を渡る農夫。その後についていく。橋の下を潜り抜ける舟は、狭く低い橋下を通るため、身を屈めている船頭と客たち。図の左の岸には藁を被った大きな樽が二つ描かれる。富士を鏡台に、太陽を鏡に見立てる。図左の桶はなにか不明。江仙彫刻。

### ☆〈裏不二〉

※馬を洗う男の前には煙草の葉が整って干されている。裏富士が望める農家の風景。馬の足元には桶に手をやっている女と子ども。図右には、赤子を背負った女が紐を引きながら何かの作業をしている。側で鳥が餌を啄ばんでいる。富士は干した煙草の葉の向こう側に、影のように黒く描かれる。米吉彫刻。

### ☆〈笠不二〉

※富士の頂上にかかる巻きつくようにかかる笠雲。手前の浅い川を渡る人たち。赤子を背負い鋤を担いだ農婦。牛を引っ張り渡る男。大きな背負い箱を担ぐ男。鋤み箱を担ぐ男。大きな籠を棒に結わえて運ぶ男。糸車を抱え頭に荷物を載せる女。獅子舞の衣装と道具を担ぐ男。全員は膝まで皮に浸かって渡っている。笠雲は『富嶽三十六景』〈甲州三鷹越〉でも描かれる。古雪彫刻。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（17.8×24.4）。

### ☆〈雲帯の不二〉

※帯のような雲が富士の中腹にかかっている。それを遠く見ながら僧侶が横座りに牛に乗って、富士を見ながら橋の上を牽かれて行く。牛飼いの男は手綱を強く引っ張っている。図の左には水車小屋が描かれ、大きな鋤み箱を三人の人足が運んでいる。横で大小の刀二本を差した侍が、笠を少し持ち上げて様子を見ている。江仙彫刻。

### ☆〈花間の不二〉

※咲き誇る桜花の間から望む富士。川辺の台地に咲く花の下では三味線を弾く芸者と三人の男が酒宴をしている。川のこちら側の茶店と、川向こうの高台にある座敷には料理を運ぶ釣り綱が仕掛けられ、店の男がそれを引いて籠に載せた料理を運んでいる。吉寅彫刻。

### ☆〈豊作の不二〉

※稲の実った田圃の盛り上がった畦道を行く二頭の馬につけた腹巻等には「大吉」「仕合吉」などと書かれている。馬を牽く男は鋤を肩に担いでいる。馬の後ろには荷物を天秤棒に架けた行商の男。そこから直角に曲がった細い道にも、天秤棒を担ぐ行商人。向こうからやってくる女は頭に荷物を乗せ、左手で子どもの手を引いている。富士は広い田圃の向こうに描かれる。吉寅彫刻。

### ☆〈千金富士〉

1248 千金の富士

※富士の稜線のように左右に積み上げられた米俵の間に見える富士。空には数羽の千鳥が舞っている。千金とは、富嶽の「富」と、米の「富」を掛けためでたさ



を表すため、この図のみ、めでたさを示す「富士」の表記。全体に三角形の構図。江仙彫刻。

### 【歌川広重が北斎の富士を評価する】

※歌川広重は、安政6年（1859）の『富士見百景』自序で、北斎の描く富士について評価し、さらに自分の富士について述べている。

「葛飾の翁、先に富嶽百景と題して一本を顕す。こは翁が例の筆才にて、草木鳥獸器財のたぐひ、或は人物都鄙の風俗、筆力を尽くし、絵組のおもしろきを専らとし、不二は其あしらひにいたるもの多し。此図（筆者注：「富士見百景」を指す）は、夫と異にして、予がまのあたりに眺望せしを其儘にうつし置きたる草稿を清書せしのみ。小冊の中もせばければ、極密には写しがたく、略せし処も亦多けれど、図取ハ全く写真の風景にして、遠足障りなき人たち、一時の興に備ふるのみ。筆の拙きはゆるし給へ。一立斎注誌」（信州大学附属図書館「近世日本山岳関係データベース」より）。

北斎は富士を画材としながらも、いつもながらの筆才で、いろいろな対象をそのアイデアやイメージの面白さで表現している。富士はその点景としているものが多い。それに対し自分の富士は見たままを写し清書したもので、紙本も小さいので極密には描けないが、構成はそのままの風景を写したものであり、一時の興とするものであると述べている。

北斎の画才を評価しながら、「筆の拙きはゆるし給へ」と謙遜しながらも、自らの立場を多少の自負も込めて表明しているが、決して北斎の富士を批難しているわけではない。北斎の『富嶽百景』の評価ばかりでなく『富嶽三十六景』についての評価も含められていると思われる。



注) 一立斎：広重は天保3年（1832）より一立斎と号した。但し、この序文は広重没（安政5年9月6日）後の刊行なので、広重の文ではないとの見方もある。

●肉筆画「雲龍図」（絹本着色一幅。齢七十五歳北斎為一改卍筆。

印葛しか。97.5×24.2 個人蔵）

※墨摺風に描く。縦長の画面の左中央から「つ」の字のように龍尾が下に伸び、図の中央左に顔を向けている。図の左下と上に雲の中から龍の爪がのぞいている。

1249 雲龍図（2007『北斎展図録』より転載）

●肉筆画「鶴鴿図」

（「雪中せきれい」とも。この頃か。紙本着色一幅。前北斎卍筆。印葛しか。27.2×44.8 北斎館蔵）

1250 鶴鴿図（北斎館）



※雪を被った杭に止まって図の下の方を見る鶴鴿。尾が図の右上に向かった真直ぐ伸びている。

※落款で卍を使い始めた天保5年(1834)以降の作。年齢の記述がない。天保5年～6年と幅を持たせるべきか。天保5年西村屋中判花鳥シリーズでも「鶴鴿 藤」を描いている。

●扇面画「鶴鴿図」(この頃か。紙本扇面一面。着色。画狂老人卍筆。印葛しか。22.8×49.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※雪で白くなった杭にとまる鶴鴿。下向きで、鋭く伸びた尾は扇面の中央上に向いている。杭の後ろに胡粉による草が白く薄く描かれる。扇面全体は茶色の塗り潰し。

天保6(1835) 乙未 76 歳 浦賀旅人画狂老人卍、豆相ノ旅客北斎改画狂老人卍七十六歳
百姓八右衛門、三浦屋八右衛門、土持仁三郎、前北斎親父、前北斎事画狂老人乞食坊主万
字、前北斎親父、(時年七十五前北斎為一)、(北斎改为一) (葛飾北斎)、(前北斎為
一老人)、前北斎為一改画狂人卍、七十六歳前北斎為一改画狂老人卍、前北斎卍、前北斎、
卍七十六歳前北斎為一改画狂老人卍、印富士の形：孫(26歳)阿栄(38歳)

◇飢饉が続く。

◇5月8日、曲亭馬琴の長男宗伯没(39)。馬琴の宗伯の妻への態度に猜疑した百が別居して長女幸と住む。

◇6月26日、仙台大地震・津波。

◇8月29日、田能村竹田没(59)。

◇11月15日、坂本龍馬生(～1967)。

○歌川広重と溪斎英泉の『木曾街道六十九次』刊行始め。

○鈴木牧之『北越雪譜』初編刊行。

○シーボルト他『日本植物誌』刊行。

### 【浦賀に蟄居】

★前年冬または今年の春、相州、豆州へ旅する。『絵本和漢誉』(嘉永3年：1850)の下絵(天保6年：1835)の署名に「豆相ノ旅客前北斎改画狂老人卍七十六歳」とある。浦賀に蟄居する。この時、手紙では百姓八右衛門、三浦屋八右衛門、土持仁三郎などを名乗る。

※正月17日付、小林新兵衛(嵩山房)宛書簡には旅中でも元気な様子を伝えている。

「(略)私事も時候故、霜雪に被閉、旅中も心にまかせ兼候。去暮は在体故、衣類等手当行キ不申候而、七十六の老人、布子一ツにて寒中を過し申候。余は御賢察可被下候。乍然未だ(腕を振りあげているコマ絵)は、ヨンゼリとも不仕候。益出精仕候而、愈上手に相成度候。夫のみ楽みまかり候以上」(『葛飾北斎伝』p148 ルビは筆者)

### 【『唐詩選』の画料の残額を請求】

★この頃の小林新兵衛宛書簡の終わりに「浦賀旅人」とある(『葛飾北斎伝』p151)。

「舌代注 (略)唐詩選注残丁三丁半(筆者注：7ページ)、差上申候。毎度恐入候得共、画料四十二匁之内に●、過借老匁五分御引落し被遊、差引四十匁五分、何卒此者へ御恩借

なりくだされそうろうよう ひらふね ねがいたてまつりそうろううんぬん  
被成下候様、偏に奉希候云々。

ほんしたさんちやうはんぞう  
板下三丁半添

うらがりよじん  
浦賀旅人

こぼやししんべえ  
小林新兵衛様

おみせしゆうちゆう  
御店衆中様(以下略)

さんはい  
画狂老人己三拝

注)唐詩選：天保7年(1836)9月刊『唐詩選七言律』を指すか。天保4年(1833)正月には『唐詩選五言律』が出ている。残りの三丁半の画稿を送り、画料四十二匁のうち、前借の一匁五分を差し引いた四十匁五分を、自分は浦賀にいたので、使いの者へ渡してほしいというのである。

※天保5年(1834)の5月と思われる小林新兵衛宛の書簡に浦賀と思われる「遠方」の文字があるので、あるいは天保5年(1834)の夏にも浦賀にいたのかも知れない。

浦賀行きについては、海外に絵を売り渡した罪から逃れるため、放蕩の孫の借金の取立てなどの災厄から逃れるため、天保の飢饉による食糧不足から逃れるため等諸説あるも不明。

浦賀には、実父といわれる仏師川村市良衛門注の実弟川村八右衛門が西浦賀の御用廻船問屋倉田屋を引き継ぎ、倉田屋藤三郎と名乗っていたが、天保5年(1834)から7年(1836)頃には他界し、三代藤三郎の時代となっていたという(由良哲次「北斎の父系と母系」より。昭和47年『浮世絵芸術』35号所収)。その倉田屋を頼った浦賀行きと思われる。

注)川村市良衛門：実父ではなく、後妻ことの実家であるという考察もある。

### 【旅先の旅住之場所は、したゝめ不申候】

★天保7年(1836)1月17日の嵩山房(小林新兵衛)宛の書簡に「遠慮の儀御座候間、旅先の旅住之場所は、したゝめ不申候」と、思うところあって、旅先の住所は記載しないと告げている(『葛飾北斎伝』p150)。

また、2月中旬の嵩山房や英(万笈堂)や角丸屋(衆星閣)などに送った書簡には、彫刻は江川留吉脚注にするようにとの指示に続けて、終わりに「右や左りの書林様、ア、かなひませぬ、忍かアきには何も後生と、御ぼしめし」(『葛飾北斎伝』p144~145)と書いて、杖を突いた人物を描いている。北斎の自画像といわれる。

1251「杖を突いた自画像」



脚注)江川留吉：彫師。彫工の旧家江川八左衛門の系を引く名手。号五常亭。北斎の絵本・挿絵本を多く手がける。

★天保6年2月中旬の小林新兵衛宛ての手紙には「前北斎事画狂老人乞食坊主万字九拝印富士の形」の署名がある(『葛飾北斎伝』p142)。

※この頃の自画像として『葛飾北斎伝』では「書肆嵩山房が、嘗百人一首の画注を依頼せし時、翁自仮に簗并に画の下図を認めておくりたり。其の図左の如し。これ翁が自画の

像にして、頭に覆ひたるは五布蒲団なるべし。前に置きたるは澁瓶なり（割書：尿をそゝぎ入るゝの器）、これまた翁が老ひて、猶赤貧なりし形状を想像するに足るものなり」として次の絵を掲載している。23.2×15.8



絵には「前北齋親父 此篋に曰くをつけて篋せきと 老が疑惑は書肆が迷惑」とある。

1252 「澁瓶を前にした自画像」

「篋とは、罨のわくなり、篋せきとは、わくせくといふ意にて、心せわしきことなり。大意は、此の罨の篋が大きいか、小さきかなどゝ、曰くをそへて、わくせくこゝろせわしく、此の老人が疑ひまどふは、おのれはよけれど、書肆が迷惑するなりといひ、最初よりハキと慥にきめて、御注文あらば、まどふまじきにといふ意を含みて、よめるなり。罨のワク、曰くのワク、篋せきのワク、

疑惑のワク、迷惑のワク、ワクの字をかさねたるが、手際なるべし」と解説している（p 209～211）。

注）百人一首の画：上記の天保6年2月中旬の嵩山房他に宛てた書簡には「新百人一首中本、娘へ御注文候が、少々立テ引（脚注：かけひき）も御座候間、新百人一首は、老人認申し候（略）」（『葛飾北齋伝』 p 146）とあり、新百人一首は、お栄ではなく自分が引き受けるとしている。

「按ずるに、此の新百人一首は、蓋し彫刻せずして止みたるならん、過ぐる頃、書肆嵩山房に到り、此の書を問ふに、知らずといふ。よりにて四方の書賣（筆者注：書籍店に同じ）につき、百方穿鑿すれども、今猶詳ならず」（同 p 147）とある。

以上の自画像については山本陽子「葛飾北齋の肖像画における自己演出」（明星大学研究紀要 人文学部第52号を参照した）。

※荒井勉は「浦賀潜居というのは、物的な証拠がない飯島虚心の仮説である」としている（『北齋の隠し絵』 p 83）。

★この頃、深川万年橋辺に住む。（『絵本魁』序文による）。

★正月、北溪画『狂歌東関駅路鈴』（文政13年：1830）を『五十三次北齋道中画譜』と改題して北齋の名で再版する。

### 【百歳の頃は、画工の数にも入るつもり】

★2月、北齋の書賣嵩山房（小林新兵衛）その他への手紙。

「老人いつも不替、筆力日増に出精仕候、一百歳の頃は先ツ者、画工之数にも入可申存念御座候」（『葛飾北齋伝』 p 142）

### 【投米会で糊口を凌ぐ】

★この時の北齋は困窮のため「投米会」注1を企画したというエピソードを『葛飾北齋伝』（p 163）が紹介している。

「又露木氏（露木為一）の話に、北齋翁、天保飢饉の時にあたり、肉筆画帖を売りしが、

画帖のみにては、三食に供するに足らずとて、絵直し注<sub>2</sub>をなし、飯米を得るの工夫を案出せり。其の法は、絹本紙本に拘はらず、絵直しを請ふ者、先づ筆に墨をつけ、其の面に点或は線を引き、これに米菖升を添へて、翁の許におくれば、翁即其の線或は点をもととし、筆を添へて、種々のものを画き与ふるなり。これを投米会といふ。請ふ者争ひ乗り。一日に米二三斗を得たることありしと」(ルビは筆者による)

注1) 「投米会」の読み方は不明。仮に「とうまいかい」と呼ぶ。

注2) 「絵直し」は、無意味に施されている点や線を、工夫により形を成した絵に作り改める遊び(鈴木重三による脚注による)。

### 【『武者絵』の画料、金一両と銀四十二匁を受け取る】

★天保6年5月29日、小林新兵衛(嵩山房)宛書簡。

「金壹両と銀四拾貳匁注 右者、武者絵本、初丁より八丁半(17ページ)の画料として、慥に受取仕候、為念此之如に御座候、以上」(昭和7年、高見沢木版社出版所、井上和雄『北斎』p7)。

※金壹両と銀四拾貳匁：1両=6,000文(天保13年には1両=6500文になっている)×25円=15万円(1文25円で換算)。1両=銀60匁。1匁=15万円÷60匁=約2,500円。銀42匁=2,500円×42匁=約105,000円。合計約25万5千円を受け取ったことになるが、相場は一定していないのであくまで参考である。1ページ1万5千円程度である。

●料理本『料理通』(角書「江戸流行」。四編。八百屋善四郎著。時年七十五前北斎為一他画。北斎改为一筆ともある。泉屋市兵衛・永楽屋東四郎版)

※料亭八百善(現東京都台東区東浅草1-8-12 辺)の栗山善四郎による料理献立本。現在の八百善は現在、神奈川県鎌倉市十二所32、明王院境内にある。初編：文政5年(1822)、二編：文政8年(1825)、三編：文政12年(1829)に続くもの。

「八百善増築の様子」など描く。谷文晁も描く。落款の表記は「時年七十五」となっている。

1253『料理通』八百前増築の様子(すみだ北斎美術館)



●読本『絵本西遊全伝』(『絵本西遊記』)とも。三編。葛飾戴斗画。岳亭丘山(岳亭春信)訳 河内屋太助他版。早稲田大学図書館/野田市立図書館蔵)

※奥付には「画 葛飾戴斗 印戴斗」とある。初編は文化3年(1806)刊。戴斗は三編と四編の挿絵を描いている。四編は天保8年(1837)に完結。戴斗は二代。

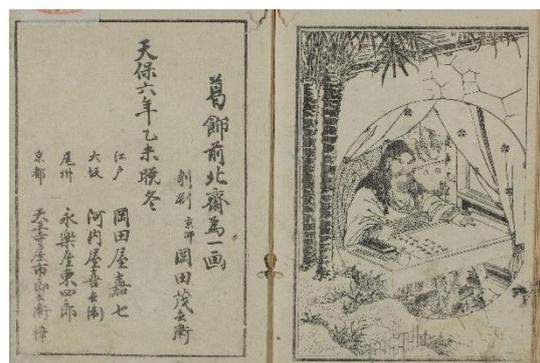
●読本『新編水滸画伝』三編後帙(1月か。五冊。高井蘭山作。前北斎为一老人画。英屋平吉版)

●読本『新編水滸画伝』四編前帙(五冊。高井蘭山作。前北斎为一老人画。河内屋版)

●絵本『画本千字文』(12月。半紙本墨摺一冊。挿絵44図。葛飾前北斎为一画。岡田屋嘉七・河内屋喜兵衛・永楽屋東四郎・天王寺屋市郎兵衛合梓。22.4×15.5 島根県

立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：  
 ピーターモース・コレクション/東京学芸大学/フリーア美  
 術館：フルヴェラー・コレクション蔵）奥付に「天保六  
 年乙未晩冬」とある。

※『千字文』の語句のいくつかに対応した挿  
 絵を描く。『千字文』は南朝・梁(502-549)  
 の武帝が、文官・周興嗣に文章を作らせたも  
 のという。同じ漢字を使わずに、四文字の対



句（計 8 文字）を 125 句作っているので千字文という。 1254『画本千字文』（国文学研究資料館）

### 【天保飢饉を肉筆画帖等で乗り切る】

※肉筆画帖を作り絵草紙屋で売らせて好評を博す。

天保飢饉の折、版元休業に伴い北斎も貧窮し、肉筆画帖を多く描いて絵草紙屋の店先で販売させて生計の足しにしたという。そのあたりの事情を飯島虚心は聞き書きの形で『葛飾北斎伝』（p 162～164）に次のように記している。

「（略）柴文（筆者注：柴屋文七）曰く、天保七年注、諸国飢饉にして、人民生に安ぜず。江戸市中にても、餓えて路上に倒るゝもの多し。故をもて諸商売は、恰休業のありさまにて、人々患難せるか中にも、錦絵、画草紙などハ、もと玩物なれハ、誰ありて買ふ者なけれハ、新刻の絵など、発行する版元なし。随て画工などの困窮は、殊に甚しかりし。此の時にあたりて、北斎忽一計を案出し、唐紙、奉書、半紙等、何紙を論ぜず、堆く机辺に積みおき、日夜腕を揮つて、山水人物、花鳥草木等、筆にまかせて書き出だし、これを裱して（表装して）、画帖となし、所々の画草紙屋の店に列ねたり。北斎の画、既に世に現はれたる頃なれハ、飢饉の中なれども、さすがに購うものありて、北斎ハこれが為めに、餓死を免かれたり。其の時の画帖ハ、往々世に存せり。表題に、肉筆画帖とあり（略）」

注）「天保七年」の話としているが、この『肉筆画帖』を指すかどうかは不明。天保 6 年（1835）の『富嶽百景』二編（西村屋祐蔵版）巻末広告に『絵本肉筆画帖』の名が見え、また同 14 年（1843）の丁子屋平兵衛の広告に「北斎祀老人肉筆画帖」も見えるという（2019『新北斎展図録』（p339）。

また、文政 6 年（1823）の西村屋与八の広告に「前北斎先生肉筆画帖」の名も見えるという（2005『北斎展』図録 p 362）。以上、刊行年は不明だが、天保の飢饉に際しての北斎のアイデアではあった。

●肉筆画『肉筆画帖』（この頃か。天保 6 年～15 年（1835～44）としている説あり。紙本着色各一幅。10 図一帖。前北斎為一改画狂人卅筆（〈桜花と包み〉〈塩鮭と鼠〉に落款があるもの、ないものがある）。印富士の形。全図、背景を省略している。各 25・6×36.1 北斎館蔵）

※『新北斎展図録』（p 339 2019 年）では、天保 14 年（1843）に丁子屋平兵衛の広告

に「北斎卍老人肉筆画帖」とあるが、落款の様子から、天保6年（1835）の西村屋祐藏の  
広告に「肉筆画帖」の名が見えるのを、本画帖に該当すると推測している。

※『2019年 永田生慈 北斎コレクション展図録』（p195）では次のように解説している。

「（略）実際、本画帖と同一の題僉注<sub>1</sub> [挿図] が貼られ、同じ図が収載された画帖が他  
にも知られ、複数点制作されたことは間違いない。（略）なお全十図が完存する画帖は現  
在、三例注<sub>2</sub>が確認されている」

注1) 『北斎翁 肉筆画帖』と書かれた題僉。

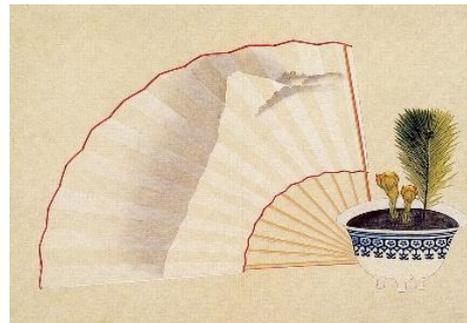
注2) 三例：北斎館（長野県上高井郡小布施町大字小布施485）。津和野葛飾北斎美術館  
（閉館。島根県立美術館：永田コレクションに寄託。島根県松江市袖師町1-5）。香雪美術館  
（兵庫県神戸市東灘区御影郡家2-12-1）の所蔵。

※「福寿草と扇面」から描き始め「桜花と包み」で描き終わるとされる（伊藤めぐみ  
「肉筆画帖について一制作の背景と研究上の諸問題」、『北斎肉筆画大成』所収。p248  
～256）。

※以下の、動植物の説明は主に「デジタル大事典」による。

#### ☆〈福寿草と扇〉（「福寿草と扇面」とも）

※画面いっぱいには広げられた扇には薄く富士山が描  
かれ、扇の要の手前には鉢に植えられた2本の  
福寿草と若松が植えられている。福寿草は、キンポ  
ウゲ科の多年草。北地に多く、高さ10～20センチ。  
早春、黄色い花を1個開き、やがて茎が伸び、羽状  
に細かく切れ込む複葉を互生する。盆栽にして正月  
の飾り物とする。根は強心薬になる。



1255 福寿草と扇（北斎館）

#### ☆〈鷹〉（「鷹匠の鷹」とも）

※赤い紐のついた金具のある止まり木（鷹架）に鋭い目をした鷹が左下方をにらんでいる。



1256 鷹（北斎館）

#### ☆〈雀とはさみ〉（22.8×49.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※画面左上に中空の雀を描き、画面右下には赤い房  
のついた握りばさみ（和ばさみ）が置かれている。

雀は、はさみを見て  
驚いているよう

に見える。舌切り雀のイメージ。落款：前北斎為一改  
画狂老人卍筆がある別摺あり。1257 雀とはさみ（北斎館）

雀は、スズメ目ハタオリドリ科の鳥。人家周辺や農  
耕地にふつうにみられ、全長14センチくらい。頭は



茶色、ほおとのどに黒い点がある。背は茶色に黒い斑点があり、腹は灰白色。

☆〈桜花と包み〉（「杯と梨の花」「器と梨の花」とも）

※画面の左側に可愛らしく葉をつけた桜花が品良く描かれ、その右側には、縁の赤い梅の絵付けの椀を半透明の布で包んでいる図。この絵に落款と印影がある。



1258 桜花と包み（北斎館）

☆〈蛇と小鳥〉

※竹の釣り竿と思われる竹の棒に止まっている小鳥を狙って、竿に巻き付いている蛇。山かがしと文鳥と思われる。



1259 蛇と小鳥（北斎館）

☆〈ほととぎすと虹〉（「ほととぎす」とも）

※画面左上から右下にかけて虹が描かれ、その下をホトトギスが飛んで、白い腹を見せている図。ほととぎすは、時鳥、子規、杜鵑とも表記する。カッコウ科の鳥。全長 28 センチくらい。全体に灰色で、胸から腹に横班がある。アジア東部で繁殖し、冬は東南アジアに渡る。日本には初夏に渡来。キョキョキョと鋭く鳴き、「てっぺんかけたか」「ほぞんかけたか」「特許許可局」などと聞きなし、夜に鳴くこともある。自分の巣をもたず、ウグイス・ミソサザイなどの巣に托卵する。



1260 ほととぎすと虹（北斎館）

☆〈鱧となでしこ〉

※赤い撫子の花と茎の上に裏表に置かれた二尾の鱧の図。鱧は、カレイ目カレイ科の海水魚の総称。体は楕円形で、側扁が著しい。頭部が右にねじれ、両眼が体の右側にあり、背びれとしりびれが体に沿って長い。右眼側は砂泥に似た褐色、無眼側は白色。海底に有眼側を上にして横たわる。マガレイ・イシガレイ・マコガレイ・ムシガレイなど。食用。撫子は、ナデシコ科の多年草。三夜に自生し、高さ 50 センチ。葉は線形で白色を帯び、対生。夏から秋、淡紅色の花を開き、花びらの先は細く裂けている。秋の七草の一。



1261 鱧となでしこ（北斎館）

☆〈蛙とゆきのした〉（「かわらと蛙」「蛙と瓦」「ゆきのしたと蛙」とも）

※円筒形の巴瓦が置かれ、それを跨ごうと片足を掛けた蛙の先にユキノシタが咲いている

図。ゆきのしたは「雪の下」と表記する。ユキノシタ科の多年草。湿った所に生える。全体に毛があり、茎は紅紫色で地をはい、節から小苗を出して増える。葉は多肉質の腎臓形で、長い柄があり、裏面は暗赤色。夏、20～50センチの花茎を伸ばし、白い花をまばらにつける。花びらは5枚あり、下の2枚が長い。葉を腫れ物の民間薬にし、食用にもする。



1262 蛙とゆきのした (北斎館)

☆〈鮎と紅葉〉 (「鮎」とも)

※澄んだ水の中を三尾の鮎が泳ぎ、紅葉の葉が数枚水面に漂っている図。鮎は、サケ目アユ科の淡水魚。全長20



1263 鮎と紅葉 (北斎館)

～30センチ。体は細長く紡錘形で、脂びれをもつ。背側は緑褐色、腹部は銀白色、胸びれ上方に黄金色の斑紋がある。秋、川の中流域で産卵。稚魚は海へ下って越冬し、春、川を上り、藻類を食べて成長する。夏に美味。

☆〈塩鮭と鼠〉

※新巻鮭に白鼠を添えた図。新巻鮭と斯尊繁栄の象徴の鼠は、正月を迎える目出度さを表す。この絵に前北斎為一改画狂老人卅筆 (印富士の形) の落款あり。



1264 塩鮭と鼠 (北斎館)

●絵本『富嶽百景』二編(正月。半紙本墨摺一冊。七十六歳前北斎為一改画狂老人卅筆。印富士の形。剝厥(彫り)江川留吉。西村屋祐蔵版。連梓：永楽屋東四郎、角丸屋甚助、西村屋与八。各約22.6×15.7 山口県立萩美術館：浦上記念館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/静岡県立美術館/東京国立博物館/浦上蒼穹堂/国立国会図書館/日本浮世絵博物館/オランダ国立民族学博物館/東洋文庫：岩崎コレクション/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション/静岡県立中央図書館蔵)

※末尾の跋文に「七十六歳」と記されて初編跋文と同じ文が掲載されている。

※以下の図版は山口県立萩美術館：浦上記念館作品検索システムより。

☆〈扉〉

※「富嶽百景二編」成鄰堂(西村屋祐蔵)の書き入れ。

☆〈井戸浚の不二〉

1265 井戸浚の不二



※富士を背景に、滑車を使って綱を引き井戸を浚<sup>さら</sup>って掃除する職人。富士の稜線と綱の線が三角形の構図になっている。

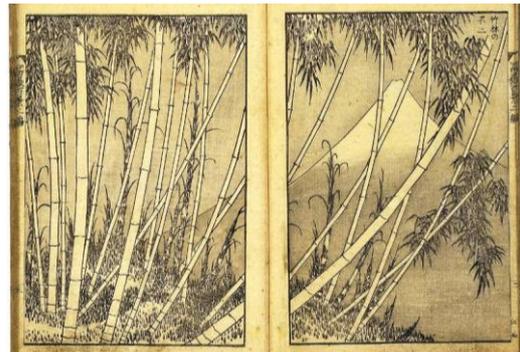
☆〈信州八ヶ嶽の不二〉

※舟の舳先から綱を打つ漁師と、舟を操る二人の漁師の図。遠く八ヶ岳越しに小さな富士が見える。綱を打つ漁師のポーズは「富嶽三十六景」の〈甲州石班澤〉の構図と似ている。江仙彫刻。

☆〈竹林の不二〉

※富士の左側の稜線に沿うように竹林が生え、その間から富士が描かれる。江仙彫刻。

1266 竹林の不二



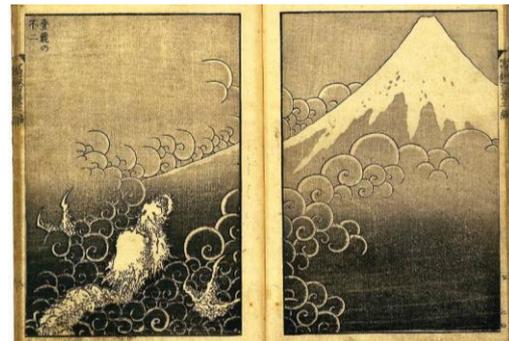
☆〈堤越の不二〉

※遠く土手の向こうに富士。その土手を馬を引き連れた農夫が行く。手前の川に渡された細い板橋を農婦が頭に桶を乗せ、手に鋤を持って渡っている江仙彫刻。

☆〈登龍の不二〉

※（「のぼりょう」と読むか）龍が富士の稜線に沿うように登る図。龍の周りには渦巻のような雲がもくもくと立ちのぼるように描かれる。下書きのスケッチがある。江仙彫刻。

1267 登龍の不二



☆〈容齋不二〉

※うねる波で水面の富士の形が歪んでいるのを舟から見ている旅人の図。吉寅彫刻。

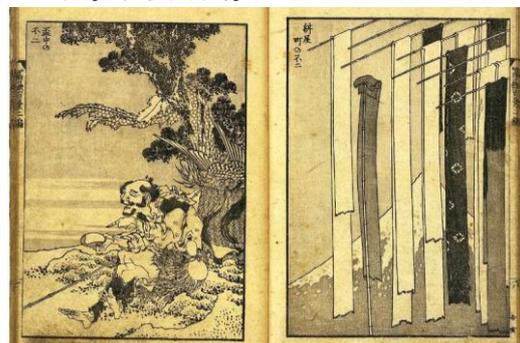
☆〈紺屋町の不二〉

※紺屋の染めものが干されている間から見える富士の図。吉寅彫刻。

☆〈盃中の不二〉

※腰蓑をつけた漁師が酒を飲んでいて、その盃の酒に映る富士を指差して笑っている図。漁師の後ろには背負い籠が置かれ、なぜか中から鳥の羽根がのぞいている。漁師は仙人を見立てたともいわれるがはたしてどうか。

1268 左・盃中の不二 右：紺屋町の不二



☆〈海上の不二〉

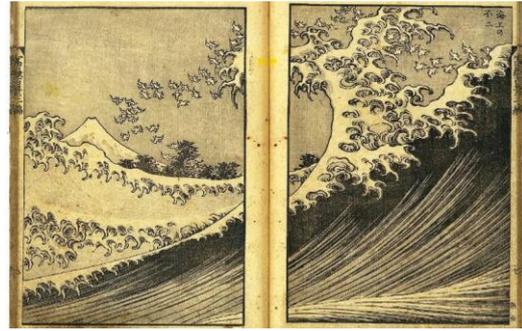
※いわゆる「北斎の波」といわれる巻き波のしぶきが、そのまま千鳥の群れに繋がり、その先に富士が描かれる。『富嶽三十六景』〈神奈川沖浪裏〉と比較されるが、人物は描かれない。朝百彫刻。

☆〈洲崎の不二〉

※洲崎弁天と思われる瓦屋根の上から江戸湾を眺望する図。帆船が浮かび、鳥が羽ばたいている海の向こうに富士が描かれる。朝百彫刻。

☆〈夢の不二〉

※大書きした鷹の羽先に雪景色の富士が薄く描かれる。鷹の足元には茄子が小さく描かれる。いわゆる一富士二鷹三なすびのめでたい図。朝百彫刻。



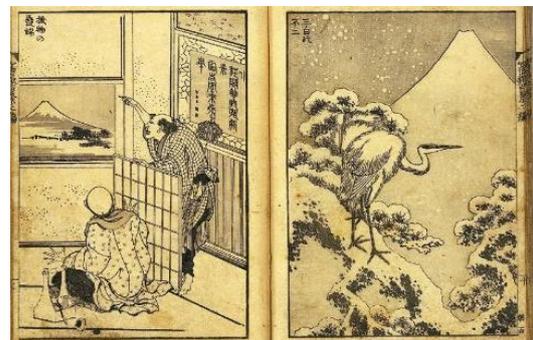
☆〈三白の不二〉

※白鶴、白雪の富士、降り積もる雪の三種の白の風景。朝百彫刻。

☆〈掛物の発端〉

※障子をはずし、絵のような富士を旅人に見せる主人。この風景から壁にかかっている掛軸ができたことを示している。

1270 左：掛物の発端 右：三白の不二



☆〈松越の不二〉

※高く伸びた日本の松の木の間から富士が描かれている。梅林彫刻。

☆〈不二の室〉

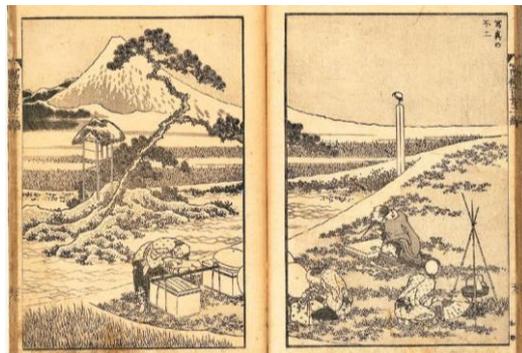
※富士そのものを描かず、山中の岩室で休む登山者たちを描く。「富嶽三十六景」の〈諸人登山〉と同趣の画。

☆〈寫真の不二〉（「しょううつしのふじ」と読むか）

※遊山しながら、二本の筆を持って富士の姿を写生する絵師。富士の左側の稜線の角度に沿うように生えている松の木越しに、富士を見ている絵師は北斎自身と見る説もある一方、貧窮の北斎が供を三人連れた遊山など出来ないとの見方もある。

図の右には、杭の上に白鷺が一羽とまっている。傍らでは酒の徳利を温めるため扇子で火を起している男、敷物などを入れた荷箱から画紙を出している男。食べ物をいれた箱の風呂敷を解いている男などがいる。和助彫刻。

1271 寫真の不二



※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.0×25.1）。

☆〈七橋一覽の不二〉

※前面の太鼓橋の橋桁の間から、遠景の橋も含めて六つの橋と富士が描かれる。手前の大

きな太鼓橋、そのしたの橋、図右の杖を突いた男が渡る橋、富士の両側の二つの橋、その手前の土手に架かる屋根形の橋、七つ目は図左の釣り人の背後にある二本の丸太とされる。古雪彫刻。

☆〈大石寺の山中の不二〉

※大石寺の山中の奇岩のある道に行く旅人たち。岩の向こうに富士。大石寺は静岡県富士宮市上条にある寺。古雪彫刻。

☆〈嶋田か鼻夕陽不二〉

※多くの杭が突き立てられた護岸で、釣りをする人や往来する人が描かれる。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.2×25.4）。梅林彫刻。

☆〈不二の麓〉

※籠を背にしたり、天秤棒で籠を担ぐ農夫や農婦たちが富士の麓を歩いて行く。富士の全景は描かれない。梅林彫刻。

☆〈夕立の不二〉

※雪化粧の富士の裾野の村に夕立が襲い、雷が光る。「富嶽三十六景」の〈山下白雨〉の雷の線と同様の描きかた。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.3×24.）。和助彫刻。

1272 夕立の不二



☆〈遠江山中の不二〉

※山中の斜めに突き出した巨木に縄をかけ、斧で切り取ろうとしている三人の樵。一人は太い枝に足をからませ、逆さになって斧を振る。木の斜めの線と逆さの男の線が三角形となり、その間から三角形の富士が描かれる。アムステルダム国立美術館蔵。和助彫刻。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.4×25.1）。

☆〈笕の不二〉

※山に架けられた笕から瀧のように落下する水を眺めながら往来する旅人や農婦たちが描かれる。古雪彫刻。

☆〈月下の不二〉

※遠く月下で砧を打つ婦人たち。近くでは野犬が遠吠えをしている。但し、『画本彩色通・二編』に描かれた狼と同じなので、この図は狼とする見方もある。遠く夕暮れの富士の上に月が出ている。江仙彫刻。

1273 月下の不二



☆〈雪の且の不二〉

※「且」は「旦」の誤り。雪の朝、降り積もった雪を掻き、富士山のように積み上げられた雪山に二匹の犬が足跡をつけながらのぼっている。吉寅彫刻。

### ☆〈文邊の不二〉

※座りながら頼杖をついて何かを思う貴人。背景に白富士。貴人の前には静かな浦が描かれているので、山部赤人の「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」を念頭にした絵であろう。「文邊」とは、文人の趣程度の意か。吉寅彫刻。

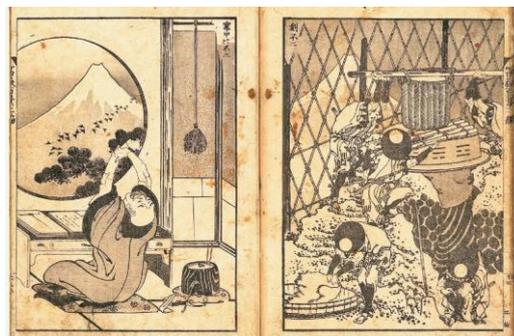
※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある(18.7×25.3)。

### ☆〈武邊の不二〉

※「富士の巻狩」（文化3年：1808 本稿 p308）に描かれた仁田四郎の猪退治の図と同趣の画。猪にのしかかり匕首を振りかざしている四郎の背後に富士が描かれる。「武邊」とは、武人の趣程度の意か。江仙彫刻。

### ☆〈刻不二〉

※竹矢来に刻まれた富士を描く。白丸印の饅頭笠の士卒たちが、前図で仕留めた猪肉を籠から大釜に入れようとしている。その他の男も兵糧の準備をしているが、もう一人は、何もせず蹲っている。あるいは「刻」と読んで、一定の時刻に、という意味か。江仙彫刻。



1274 左：窓中の不二 右：刻不二

### ☆〈谷間の不二〉

※岩間から流れる水を柄杓で汲む男と、柴を担いで休む男の図。岩の線と富士の右稜線が釣り合っている。江仙彫刻。

### 【富嶽百景三編以後、主に肉筆画に傾注】

●絵本『富嶽百景』三編（半紙本墨摺一冊。刊行年不明。二編と同時期か。無款。明治8年版あり。江戸西村祐蔵の経営不振により売却され、永楽屋東四郎版となった。各約22.6×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/国立国会図書館/山口県立萩美術館：浦上記念館/浦上蒼穹堂/アムステルダム国立美術館/フリーア美術館：プルヴェラーコレクション蔵）

※この作以降、ほとんど錦絵を描かずに浮世絵から離れる。和漢の故事や古典、花鳥や宗教的な画題で、主に肉筆画に傾注する。

※以下の図版は山口県立萩美術館：浦上記念館作品検索システムより。

※全図、江仙（江川仙太郎）の彫刻。

### ☆〈赤澤の不二〉

※富士の裾野の赤澤山（静岡県伊東市南部の海沿いの山）で、源頼朝が行った相撲で、河津三郎祐安と膜野五郎國久の取り組みを描く。『曾我物語』では、この取り組みで膜野

が負けたのを怨んだという話になる。富士は描かれない。

☆〈男體山行者越の松・野州遠景の不二〉

※男体山は、栃木県日光にある山。老松が橋のようにかかっている、雪を被ったその上を渡る数人の行者を描く。松の橋の下の間から富士が見える。

1275 左：野州遠景の不二 右：男體山行者越の松



☆〈深雪の不二〉（「しんせつのふじ」と読むか）

※富士の裾野の街道に雪が降り注ぎ、足跡をつけながら行く旅人たち。馬の腹がけには「魁」の文字が染め抜かれている。

☆〈貴家別荘砂村の不二〉

※舟の前半分を切って屋根のようにした祠の側で、三人の男が釣りをしている図。舳先に「水中出現不動明王」と書かれた木札が掛けである。その下に木像らしきものが見える。左奥に富士が描かれる。砂村はどこか不明。現在の東京都江東区砂町辺の一带か。貴家別荘は、貴人の別荘の意。

☆〈市中の不二〉

※火の見櫓に天を突くように建てられた梯子の先に半鐘がある。その先に梯子を横切るように凧糸が描かれ、さらにその先に富士が描かれる。

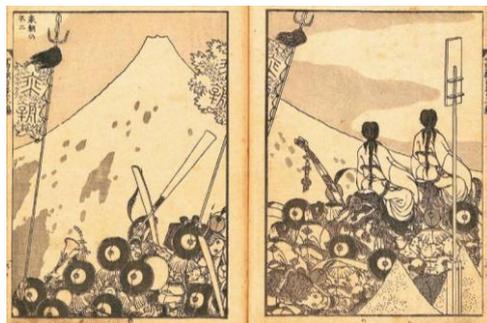
☆〈曇天の不二〉

※道祖神の石碑のある道端で、荷物を点検整理をする旅人と、それを立って見ている合羽姿の旅人。富士は全体を雲で山形に覆われ、その姿を現していない。

☆〈来朝の不二〉

※朝鮮使節が江戸参府の途中、富士の威容を全員で見ている図。

1276 来朝の不二



☆〈暁の不二〉

※明け方の富士を背景に、道を急ぐ飛脚を描く。

☆〈跨キ不二〉

※桶に乗って大槌を振りあげる桶職人の股の間から富士が覗かれる。桶に乗る職人の図は、森治版短冊シリーズ（天保1年～5年）でも「桶屋」として描かれる。

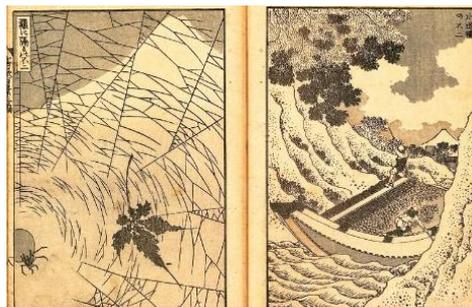
☆〈水道橋の不二〉

※水道橋を流れる神田川に、薪を積んだ舟が行く先に富士が見える。

☆〈羅に隔るの不二〉

※蜘蛛の巣に紅葉がかかり、巣の中央に蜘蛛がいる。その蜘蛛の巣を透かして富士の姿。

1277 左：羅に隔るの不二 右：水道橋の不二



「羅」は、網目のような巢の意味で用いている。蜘蛛の背後の大きな円は腹部とも、巢の中心のこしきと呼ばれる部分ともいわれる。

☆〈元良哈の不二〉

※朝鮮のオランカイから見た富士。朝鮮風の衣服をつけた女性と天秤棒を担ぐ男性が遠くの富士を眺めている。

☆〈阿須見村の不二〉

※明日見湖畔の小明見村（現山梨県富士吉田市明見）の風景といわれ、茅葺の独特な形をした屋根が並び、その間から小さく富士が見える。富士吉田は吉田口登山道の入り口。

☆〈隅田の不二〉

※隅田堤（現墨田区堤通り辺り）は隅田川添いの堤で、桜の名所で賑わった。その賑わいを描く。桜花の向こうに春の富士が見える。

☆〈八塚廻の不二〉

※お鉢巡りとも呼ばれ、富士の火口を巡る人々を描く。富士の山容は描かれない。

☆〈風情面白キ不二〉

※寺の門前で毛毬に興ずる僧侶、それを面白がる二人の男は富士に関心を示さない。毛毬が上に蹴られて、富士の山頂に乗っているように見える。

☆〈甲斐の不二濃男〉

※富士の雪が解け、山肌が男の姿に見えるようになると、それを「農男」と呼んで農作業を始める合図とした。農男が現れると豊作の吉兆としたという。農作業をする農夫の向こうに男が立っているように見える山肌の富士が描かれる。

☆〈稲毛領夏の不二〉

※川の両側で布を晒す作業をする人々。手前の土堤では食事をする人々が描かれる。稲毛領は神奈川県にあったという。霞の向こうに富士が見える。

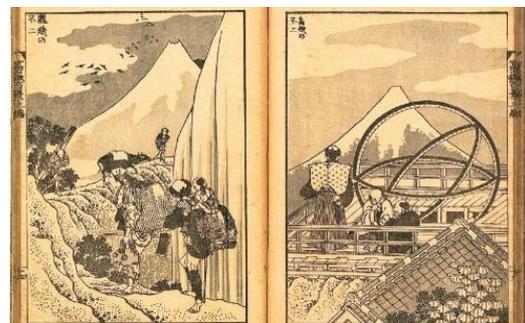
☆〈鳥越の不二〉

※江戸鳥越（台東区浅草橋3丁目。近くに鳥越神社がある）にあった渾天儀（天体の位置観測器）を供えた領歴所（浅草天文台）から富士を見る図。

☆〈瀧越の不二〉

※右側一面に流れ落ちる滝の脇に行く農家の男女。男は背負った荷物に赤子を乗せている。遠く牛を引く男の背後に富士が描かれる。

1278 左：瀧越の不二 右：鳥越の不二



☆〈村塚の不二〉

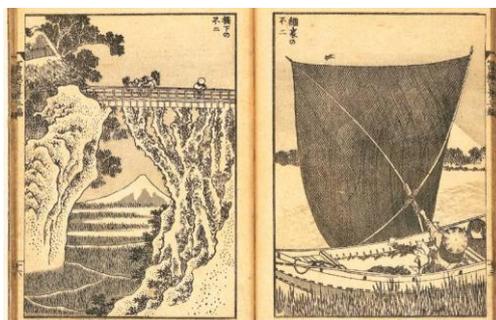
※村の境界に注連縄を木に渡して張り魔よけとしている。その下を往来する人々。注連縄が逆三角形に下げられた構図に、富士の頂上の三角形が対称的に描かれる。

☆〈青山の不二〉

※傘職人が画面いっぱい傘を開いて並べ、その間から富士が見える。傘に「富岳百景」「書肆」の文字が記されている。

☆〈網裏の不二〉

※漁師が力いっぱい引き上げた四手網を透かして薄く富士が描かれる。四手網は、網の上に魚をおびき寄せて引き上げる漁法。佃島は白魚の四手網漁が盛ん。



☆〈橋下の不二〉

※巨木が橋桁になっている橋の下から富士が望まれる。この構図は北斎がよく用いる画趣。

1279 左：橋下の不二 右：網裏の不二

☆〈足代の不二〉

※壁塗りのために組んだ足代（足場）にいる職人に、下から塗り土を差し出す職人を描く。足組みの向こうに富士が見える。

☆〈村雨の不二〉

※激しく降る雨の中、蓑笠の人々が行く。垂直に激しく降る雨の向こうに霞む富士。さしている傘に「三編」の文字がある。

☆〈狼煙の不二〉

※遠く富士の上空に狼煙（のろし）がたなびいている。手前の浜辺では打ち上げた舟の脇で焚火をしている漁師たち。護岸の上には茅葺屋根の家が立ち並ぶ。

☆〈福祿壽〉

※空飛ぶ三羽の蝙蝠の「蝠」（フ）は福を、手前の鹿（ロク）が「禄」を、遠くの富士が不死で「寿」を表しているという。「不二」の字がない図。

☆〈大井川桶越の不二〉

※大井川を大きな桶舟で渡る人々。川向こうの木の陰に富士。

☆〈見切の不二〉

※障子張りのためにはずした障子の棧に四角く区切られた富士が描かれる。船宿の看板には「やねふね にたり（荷足）ちよきふね つりふね」とある。「先客萬来 ふじや」と箱看板に描いている職人は、紙の余白がたりないため、「や」の字の縦線が書ききれない（見切れない）様子。

☆〈武蔵野の不二〉

※薄が生い茂る野の先に、月を抱いた富士が描かれ、武蔵野の風情がかもし出される。

☆〈茅の輪の不二〉※茅の輪くぐりは、六月晦日に行なわれ、茅で作った輪を潜って厄払いをする習慣。鳥居に吊るした大きな茅の輪の間から富士を描く。

☆〈不斗見不二〉

※供連れの武士が、土塀の崩れた空間から、ふと富士を見ている図。

☆ 〈山氣ふかく形を崩の不二〉

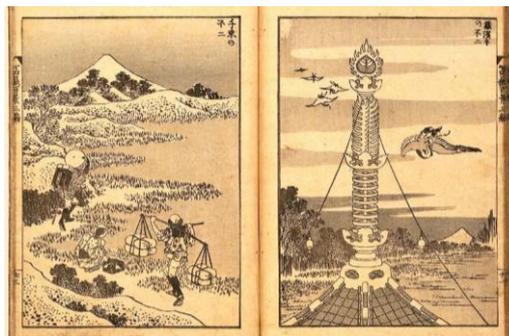
※山中の気流が富士を取り巻き、あたかも富士が崩れるように切れ切れに見える。手前では獵師と鋤を持つ農夫が煙管の火を分け合っている。

☆ 〈郭公の不二〉

※扇を持ちながら縁台に座り、富士を背景に空飛ぶ郭公の姿と声を楽しむ男の図。郭公は飛びながら泣くことはないので、図中の鳥は郭公ではなく、描かれていない郭公に耳を傾けているとされる。〈寫真の不二〉に描かれた男と同一なので北斎の姿とされる。

☆ 〈羅漢寺の不二〉

※寺塔の先端の向こうに富士を見る。塔に向かって飛んでくる鶴の群れ。「羅漢寺」は、「富嶽三十六景」でも描かれている。



☆ 〈千束の不二〉

※洗足池（現東京都目黒区南千束）から見た富士といわれる。池のほとりを天秤棒で荷物を担ぐ男、しゃがみ込んで休む女旅人、先を急ぐ饅頭笠の旅人。富士の手前に富士形の物が三つ並んでいる。1280 左：千束の不二 右：羅漢寺の不二

☆ 〈ふし 〈山冠に俊のイが木〉 穴の不二〉

※朝の掃除の際、閉めていた雨戸の割れ穴から、富士が障子に逆さに映っている。その富士の影に驚いている男たち。



☆ 〈海濱の不二〉

※半円の形で海に突き出す奇岩の間から見える富士。1281 左：海濱の不二 右：ふし穴の不二

☆ 〈蛇追沼の不二〉

※沼に富士が逆さに映っている。この画趣は「富嶽三十六景」の〈甲州三坂水面〉や『北斎漫画』13 編にも描かれている。逆さ富士の位置が富士と大きくずれている。この沼の所在地は不明。

☆ 〈大尾一筆の不二〉

※最終の富士。墨画風に描かれ黒雲が下にかかっている。1282 大尾一筆の不二



●絵手本『をとり独稽古』（夏。一冊。葛飾北斎画編。藤間新三郎補正。大島屋伝右衛門版。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※文化 12 年（1815）『踊独稽古』の改彫版。奥付に「葛飾北斎画編 藤間新三郎補正 文化十二年歳次乙亥夏発市 後編嗣刻 天保六乙未年夏月 求版 京橋弥左エ門町大島

屋伝右衛門」とある。

●絵手本『万職図考』二編・三編（葛飾戴斗先生画。河内屋茂兵衛版。国立国会図書館蔵）

※染色・根付け・煙管その他の職人のためのデザイン集。初編は文政10年（1827）刊。四編・五編は没後の嘉永3年（1849）刊。

●団扇絵『勝景奇覧』（この頃か。天保6年～15年（1835～44）と幅を持たせた見方もある。前北斎卅筆。着色揃物。藍摺の画と錦絵の画とに分れる）

☆〈木曾摺針峠〉（藍摺。四角の中に団扇形に描かれる。23.3×30.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵）

※ベロ藍の濃淡で風景を描く。眼前に琵琶湖が広がる峠道を往来する人々。石垣の上に建つ茶店に向かう人々。

摺針峠は、木曾街道の滋賀県彦根市中山町にある峠。『千絵の海』〈木曾摺針峠〉図と同じ構図。

校合摺あり（17.9×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）



1283 木曾摺針峠（太田記念美術館）

☆〈甲州身延川〉（錦絵。後摺の藍摺物もあるという。22.5×30.1 すみだ北斎美術館/東京国立博物館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館蔵）

※突き出した岩に立って投網をする人々。その背後で膝まで水に入って漁っている二人。身延山を背景に川を行く漁舟。

☆〈甲州湯村〉（藍摺。東京国立博物館/ホノルル美術館蔵）

※四角の紙の中に扇面に描く。並ぶ旅宿の入り口に向かう旅人たち。宿の中には先客が数人いる。

☆〈上列（州）榛名山〉（藍摺。23.1×30.2 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/ホノルル美術館蔵 校合摺あり。）

※四角の紙の中に扇面に描く。山道で遥か彼方の榛名山を眺める男女の旅人たち。

☆〈上列（州）妙義山〉（上部の空が藍摺の錦絵。26.4×30.9。プーシキン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/ボストン美術館/立命館大学図書館蔵。国立国会図書館には藍摺りの後摺がある。校合摺がある。）

※四角の紙の中に扇面に描く。妙義神社の鳥居と寺社を眼下にして、妙義山の山頂まで登る旅人たち。前方にも針のように聳える山々が描かれる。当初は団扇形の下部のくりぬかれた部分に妙義神社が描かれていたが、団扇絵に合うように構図を整え直しているので、当初から団扇絵として作画されたかどうか疑問が残るとする見方がある（『2005 北斎展図録』p362）

1284 上列（州）妙義山（プーシキン美術館）



校合摺あり（渡辺庄三郎『版下画帖』より）。

☆〈信列（州） 阪防（マ） 湖〉（錦絵。ホノルル美術館蔵）

☆〈相州袖ヶ浦〉（錦絵。横長図。23.7×30.4 千葉市美術館/ホノルル美術館/プーシキン美術館蔵）

※海岸にそそり立つ岩山に雪を被った松が伸びている。その下の砂浜に行く旅人と、駕籠かきたち。崖下の道に行く旅人たちの先には雪屋根の家並みが続く。

1285 相州袖ヶ浦（プーシキン美術館）



☆〈房州鋸山〉（藍摺。27.0×32.8 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

校合摺あり（17.8×24.6 渡辺庄三郎『版下画帖』より）。

●錦絵『百人一首うはがゑるとき』（この頃か。「乳母が絵解き」など数種の表記あり。乳母が子どもに百人一首を読み聞かせるという構想で作画したもの。北斎最後の錦絵の揃物。横大判。ベロ藍）。

※前北斎刊（「柿の本人暦」のみ無落款。「猿丸太夫」の落款は「前北斎」で刊無）。西村屋与八（永寿堂）から出版されたが、天保中期に経営不振となり、板木とも伊勢谷三次郎（榮樹堂：永寿堂をもじったもの）に譲って続刊されたものの結局断念された。

27 首だが 64 図の版下絵（2005『北斎展図録』 p 360 による）を合わせると 91 図以上。100 首の構想があったか。作者の意欲とは裏腹に不評であまり売れなかったのは、各歌人の歌意と画の内容が合わないものが多かったためという説もある。

版下絵〈従二位家隆〉の画中に「九 戊 戌年朱明」（天保 9 年夏）とあり、その年（79 歳）まで版下絵を描いていたことが分るといふ（『北斎の肉筆画』 p 151 青幻舎）。

※（1、2、3、6、8、西村屋与八（永寿堂）版。4、5、7、9～28伊勢屋三次郎（榮樹堂）版）

### 【表題の表記の異同・『百人一首うはがゑるとき』】

※表記については、「恵」を、そのまま「恵」と表記する図録や、「ゑ」と表記する図録もある。たとえば「宇波かゑと起〈春道列樹〉」とあったり、「「宇波か恵と起〈春道列樹〉」と表記されている。漢字の崩し字を漢字のままとするか、ひらがなとするかで、研究者に判断によって異なることを念頭に入れたい。また、画題の前の数字は筆者による。

☆1「うはかゑるとき〈天智天皇〉」（24.0×35.6 国立国会図書館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/町田市立国際版画美術館蔵）

「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ わが衣手は露に濡れつつ」

※菅や茅を組んだ苫を背や肩にした農夫たちが、田の道に行く秋の風景を描く。

☆2「うはかゑと起〈持統天皇〉」（25.2×36.3 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館蔵）

「春すぎて夏来にけらし白妙の 衣ほすてふ天の香具山」

※川で晒した白い布を棒に架けて二人で担いで行く先には、小高い山が見える。手前の川を徒歩で渡る旅人たち。

☆3「乳母かゑと起〈柿の本人磨〉」(26.2×37.7 無落款 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館/大英博物館/東京国立博物館蔵)

「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の ながながし夜をひとりかも寝む」

※焚火の煙が立ちのぼる入り江で地曳網を牽く漁師たちを描く。1286「乳母かゑと起」柿の本人磨(日本浮世絵博物館)



☆4「宇波かゑとき〈山邊赤人〉」(26.0×38.0 国立国会図書館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/ミネアポリス美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「田子の浦にうち出でて見れば白妙の 富士の高嶺に雪はふりつつ」

※田子の浦際の山道を往来する駕籠や旅人。遠くに雪化粧の富士山を描く。

☆5「乳母かゑとき〈猿丸太夫〉」(25.2×36.1 島根県立美術館:永田コレクション/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/ギメ美術館/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

画美術館美術館「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋は悲しき」

※秋の山里で働く農婦たちが、熊手を持ち、籠を背負って、列をなして手前の坂を下って帰って行く。画面左方の二人の女が指さす先の山の上には、紅葉の木の下に番の鹿が小さく描かれる。



1287「乳母かゑとき」猿丸太夫(日本浮世絵博物館)

☆6「乳母かゑ説〈中納言家持〉」(25.8×37.7 町田市立国際版画美術館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/ホノルル美術館/日本浮世絵博物館蔵)

「鵜の渡せる橋に置く霜の 白きを見れば夜ぞ更けにける」

※かささぎが三羽浮かぶ海には、唐人船が浮かんでいる夕景。岸辺の山間には民家の屋根が見える。

☆7「宇波かゑと起〈安倍仲磨〉」(25.2×37.4 町田市立国際版画美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館蔵)

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

※長安の山の上から水面に映る月を眺めている。仲磨の足元には膝まづいて仲磨を拝している二人の従者。手前には風でちぎれた軍旗がたなびく。

☆8「うはかゑと幾〈小野の小町〉」(25.1×37.1 日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

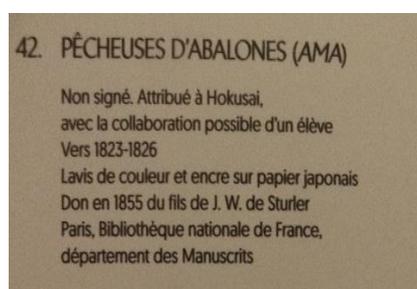
「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」

※桜の花が咲く所の農家では、洗い張りをしている二人の女や、道を掃く男、川で洗い物をする女などが描かれる。

☆9「乳母が絵と起（参議篁）（小野篁）」（25.0×36.3 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館/市立津山郷土博物館/ギメ美術館/山口県立萩美術館：浦上記念館/ホノルル美術館ギメ美術館/町田市立国際版画美術館/国立国会図書館/ /東京国立博物館/ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵）

「海（わた）の原（はら）八十島かけて漕（こ）ぎ出でぬと 人（ひと）には告（つ）げよ海女（あま）の釣舟（つりぶね）」

※海辺の岩の上で休んでいる三人の海女。海では三人の海女が漁をしている。その側では採った貝などを受け取る舟が描かれる。海女は、文政9年頃フランス国立図書館蔵の北斎に関わる作品25図の中にも描かれている。



1288 参議篁（日本浮世絵博物館） 海女 文政9年頃 45.3×31.7 着色 無款 フランス国立図書館蔵

☆10「うばがゑるとき（僧正遍照）」（26.5×37.9 島根県立美術館：永田コレクション/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館/日本浮世絵博物館蔵）

「天（あま）つ風雲（かぜぐも）の通（か）ひち吹きとぢよ 乙女（おとめ）の姿（すがた）しばしとどめむ」

※桜咲く側（そば）の舞台で二人の女による舞楽の舞が催されている。舞台下の帳（とばり）の前などには畏（かしこ）まった男たちが描かれる。

☆11「乳母か絵説（ありわらのなりひら）（在原業平朝臣）」（25.2×36.4 国立国会図書館/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館：浦上記念館/ベレス・コレクション/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館蔵）

「ちはやぶる神代も聞（き）かず菟田川 からくれなゐに水くくるとは」

※橋の下には散った紅葉の葉が多く波に流され、橋の上からそれを見ている女将と赤子を背負った男。太鼓橋を上る旅人を紐で引っ張り助ける男は、額に扇子をかざしている。

☆12「宇波かゑ登起（ふじわらのとしゆき）（藤原繁行朝臣）」（「藤原敏行朝臣」とも。25.1×35.9 島根県立美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/中右コレクション/町田市立国際版画美術館蔵）

「住（す）の江（え）の岸（きし）に寄（よ）る波（なみ）よるさへや 夢（ゆめ）の通（か）ひ路（ぢ）人（ひと）目（め）よくらむ」

※岸边に寄せた北前船の窓から二人の男が外を覗いている。遠くの上には鳥が群れをなして飛んでいる。

☆13「うばがゑと起（いせ）」（25.3×37.1 日本浮世絵美術館/大英博物館/ホノルル美術館/国立国会図書館蔵）

「難波渦短き葦の節の間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや」

※瓦職人たちが屋根で働く家の中で梅を眺める二人の芸妓を描く。

☆14「乳母が縁説〈元良親王〉」(25.6×36.7 島根県立美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/国立国会図書館蔵)

「わびぬれば今はたおなじ難波なる 身をつくしても逢はむとぞ思ふ」

※海辺の道で、木賊を背にした牛を牽く農夫の脇を、蛇の目傘で顔を隠した二人連れと荷を背負った供の男を描く。

☆15「姥かゑと幾〈菅家〉」(菅原道真 25.7×37.0 日本浮世絵博物館/大英博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「このたびは幣も取りあへず手向山 紅葉の錦神のまにまに」

※紅葉が散り飛ぶ神社の境内に牛車を停めて休んでいる従者たち。車を牽く牛も膝を折り曲げて休んでいる。

☆16「宇破か縁説〈貞倍(信)公〉」(藤原忠平 26.1×37.5 日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「小倉山峰の紅葉葉心あらば いまひとたびのみゆき待たなむ」

※紅葉深い山門で帝を迎える仏僧たち。帝が乗ってきた車が右側に描かれる。宇多上皇が嵯峨の紅葉の見事さを、子の醍醐天皇にも見せたいと仰せになったのを受けて貞信公が詠んだ歌。

☆17「うはか恵と起〈源宗于朝臣〉」(23.9×35.0 大英博物館/国立国会図書館/日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館/ギメ美術館/太田記念美術館/東京国立博物館/町田市立国際版画美術館蔵)

「山里は冬ぞ寂しさまさりける 人目も草もかれぬと思へば」

※雪の山中で5人の獵師が焚火をして暖をとっている図。

1289 源宗于朝臣(日本浮世絵博物館)



☆18「姥か衛登喜」〈壬生忠見〉(この絵のみ校合摺。前北斎刊 25.8×37.5 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

「恋すてふわが名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか」

※「船宿」「新叶屋」と大書きした戸のある宿の前に門付の女が二人いる。その側で、赤子を背負った母親、風呂敷の荷物を背負った行商人、どてらを着流して手拭を頭に乘せた男、通りがかりの男たちが門付を見ている。宿の白壁に、おそめ・久松の名を相合傘に書き入れた落書きがある。

☆19「宇波かゑと起〈春道列樹〉」(25.1×36.6 日本浮世絵博物館/大英博物館/ウイスコンシン大学マディソン校/シカゴ美術館/ボストン美術館/ホノルル美術館/東京国立博物館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」

※川を紅葉の葉が赤く染めるほど流れ、頭に桶を乗せ、子どもの手を引いて細い丸太の橋を渡る母親。子どもは紐の先の亀を引いている。向こう岸では巨大な材木が斜めに支えられ、その上で木曳きで縦に切り込みを入れている図。『富嶽三十六景』〈遠江山中〉では同じ構図が左右逆となっている。

☆20「うはか縁説〈清原深養父〉」(26.1×37.1 日本浮世絵博物館/大英博物館/国立国会図書館/東京国立博物館/町田市立国際版画美術館蔵)

「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいづこに月宿るらむ」

※宵闇の川に「新板川壺」と書かれた提灯を下げた遊興の大船の隣の船では、棹をさす船頭、炭火の火を団扇でおこす男、川水で井を洗う男などが描かれる。対岸には薄暗闇に並んだ蔵が描かれる。

☆21「うはか恵と幾〈文屋朝康〉」(26.1×37.1 日本浮世絵博物館/大英博物館/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館/アメリカ議会図書館/ウイスコンシン大学マディソン校/ハーバード大学/シカゴ美術館/江戸東京博物館/クロード・モネ財団蔵)

「白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」

※舟の中から蓮の葉を刈り取ろうとしている女たち。蓮の葉には白露が描かれる。二人の女が棹を突き立てて舟の揺れを防いでいる。

☆22「宇破か縁説〈参儀(議)等〉」(源等 25.0×36.1 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/市立津山郷土博物館蔵)

「浅茅生の小野の篠原忍ぶれど あまりてなどか人の恋しき」

※浅茅生の生える道を俯きながら行く貴人と二人の伴人。土下座して貴人を迎える道端の二人の男。手前では籠を背負い帰路につく五人の農夫。

☆23「姥か恵登幾〈大中臣能宣朝臣〉」(25.9×37.5 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/ベレス・コレクション/中右コレクション/すみだ北斎美術館蔵)

「御垣守衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつものをこそ思へ」

※門の手前で焚火のまわりでくつろぐ六人の衛士。門の向こうの丘に腰を下ろして遠くを眺めて物思いにふける貴人の姿。

☆24「宇波か縁説〈藤原道信朝臣〉」(25.5×37.0 日本浮世絵博物館/千葉市美術館/町田市立国際版画美術館/山口県立萩美術館・浦上記念館/東京国立博物館/ギメ美術館蔵)

「明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな」

※日が暮れないうちにと路を急ぐ辻駕籠かきたち。その脇で天秤棒の両端の荷物を担いでのんびり歩く行商の男。

☆25「うはかゑと起〈藤原義孝〉」(24.0×35.6 日本浮世絵博物館/大英博物館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

「君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな」

※遊興の家で寝転んでくつろいだり、外の川面を眺めている女たち。部屋の手前では風呂に入っている男二人。全員が命の洗濯をしている様子。川には鶺鴒が二羽。詞書に「女の許

より帰りて 遣わしける」とある。

☆26「宇波か衛とき〈三条院〉」(24.8×36.3 大英博物館/日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/すみだ北斎美術館蔵)

「心にもあらで憂き世に長らへば 恋しかるべき夜半の月かな」

※満月の夜の儀式で幣をかざす男と、垂冠を被り、笏を持ち平伏する三人の男。廊下の外には満月が光る。

☆27「う波かゑと幾〈大納言種(経)信〉」(25.0×37.6 日本浮世絵博物館/国立国会図書館/山口県立萩美術館：浦上記念館/ベルリン東洋美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「夕されば門田の稲葉訪れて葦のまる屋に秋風ぞ吹く」

※葦の生える田舎道を、棒にぶらさげた籠を運ぶ二人の農夫。道端の小川で足を洗う旅人や、桶に水を汲む女が描かれる。遠くの空には雁の群れ。

☆28「宇波か縁説〈権中納言定家〉」(「ていか」とも。25.0×36.8 日本浮世絵博物館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

「来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」

※塩水を桶に汲みとって来る二人の女。積み上げた簀に海水を染み込ませ、これを焼いて藻塩を造っている夫婦。その窯から出る煙が立ちのぼっている。左にはうず高く簀を積み上げる男が二人描かれる。

#### 【29～32 大正10年、版下絵からの錦絵刻版】

※大正10年(1921)10月に、京都の佐藤章太郎商店が、〈権中納言匡房〉〈素性法師〉〈中納言敦忠〉〈赤染衛門〉の4図に色付けして錦絵として刊行した(2010年『HOKUSAI画狂人北斎』緑青VOL2 日本浮世絵美術館 p78による。マリア書房)。

☆29「百人一首うばが衛登記 権中納言匡房」(大正10年、佐藤章太郎板)

「宝砂(高砂)のおのへのさくらさきにけり 外山のかすみ立すもあらなん」

※海の見える小山の桜を見る男達。湧き出る水を柄杓ですくう姉さんかぶりの女。御簾を入れた桶を頭に乗せ、赤子を背負って立っている女。山の下から登ってくる人々などが描かれる。

☆30「百人一首乳母が縁説 素性法師」(大正10年、佐藤章太郎板)

「今こんといひしはかりになか月の 有明の月を待いてつるかな」

※鐘楼のある坂道を、かがり火を持つ男に付いて行く老人。眼下には寺社の大きな屋根が連なる。鐘楼の屋根先に月が冴えている。

☆31「百人一首乳母が恵登記 中納言敦忠」(大正10年、佐藤章太郎板)

「逢見ての後のこゝろにくらふれば むかしを物をおもハざりけり」

※柵に囲われた注連縄のある神木に、頭上に蝋燭三本を乗せ、鏡を首から下げ、口に釘をくわえながら釘を打つ白装束の女。「奉納」と描かれた狛犬像の側に立てられた高札に「大正十年 開板」と書かれている。

☆32「百人一首うはか恵とき 赤染衛門」(大正10年、佐藤章太郎板)

※「やすらはてねなまし物をさよ更て かたふくまでの月をみしかな」

屋敷の回廊風の廊下に、手燭を持つ女の後にいる女主人。その後に荷物を持って付いている下女。夜空には満月が描かれる。

【『百人一首うはがゑとき』の版下絵】

※1895年に仏人シャルル・ジローによって亜鉛凸版（14.8×21.3）で復刻されたものも入れると91図に及ぶ。現存する版下絵（紙本墨絵）は64図という（ここに掲載するのはその一部）。85「従二位家隆」画中の幟に、「九戌年朱明」とあるので、その頃まで制作していたと思われる（『年譜』による）。

☆33「うはかゑと起」〈喜撰法師〉（前北斎刊。25.7×37.8フリーア美術館蔵）

「わが庵は都のたつみしかぞ住む 世をうちやまと人はいふなり」

※遠景の山に二匹の鹿がいる。手前の山の頂上から鉄砲で鹿を狙う二人の獵師。手前の街道には、客の乗った駕籠かき、天秤棒の草を担ぐ男、笠を手を持つ旅人がいる。周囲の山には紅葉が咲いている。

☆34「宇波か縁説」〈蟬丸〉（前北斎刊。25.6×37.8フリーア美術館蔵）

「これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬもあふ坂の関」

※図左の民家の前に立つ髭を蓄えた占い師風の男。脇の街道には徒歩や馬上の旅人が行く。

☆35「乳母かゑとき」〈陽成院〉（前北斎刊。26.2×38.1フリーア美術館蔵）

「筑波嶺の峰より落つる男女川 恋ぞ積りて淵となりぬる」

※民家の前の川で洗濯をする女。その周りで作業をしている、腰蓑を付けた男たち。

☆36「乳母かゑと起」〈光孝天皇〉（前北斎刊。25.6×37.1 島根県立美術館：永田コレクション・府川家資料蔵）

「君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ」

※屋敷の門の所で駕籠に乗って来る貴人を迎える宮人たち。

☆37「姥か恵登喜」〈文屋康秀〉（前北斎刊。25.7×37.8フリーア美術館蔵）

「吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ」

※「祇園御祭礼」と書かれた幟、旅人の笠、手にした巻物や紙の束等が強風にあおられ飛ばされている。着物の裾があおられ前かがみになる女、荷物を背負った小僧なども描かれる。

☆38「姥がゑとき」〈大江千里〉（前北斎刊。25.9×37.7フリーア美術館蔵）

「月見ればちぢに物こそ悲しけれ わが身ひとつの秋にはあらねど」

※薪を背負った農夫や農婦。腰をかがめて杖を突く老婆の腰を押している小僧。満月が浮かぶ田舎の風景。家鴨が数羽田圃にいる。

☆39「うはかゑと起」〈三條右大臣〉（シャルル・ジローによる復刻。14.8×21.3フリーア美術館蔵）

「名にしおはば逢坂山のさねかづら 人にしられでくるよしもがな」

☆40「姥か恵登き」〈中納言兼輔〉（24.8×36.6 大英博物館蔵）

「みかの原わきて流るる泉川 　いつ見きとてか恋しかるらむ」

※渡し船に乗っている男女。船首の船頭が舳先の向きを調整するためにかがんで棹を岸边に当てている。船尾の船頭は川に棹をさしている。

☆41「宇波かゑと起」〈坂ノ上是則〉（25.2×36.7 大英博物館蔵）

「朝ぼらけ有明の月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪」

※川に流してきた材木を引き上げて、雪を被った貯蔵庫に運ぶ男たち。

☆42「うはか恵登喜」〈紀友則〉（前北斎刊。25.8×37.8 フリーア美術館蔵）

「ひさかたの光のどけき春の日に 静心なく花の散るらむ」

※陸揚げされた舟底の付着物を松明の火で焼き落としている男たち。側で薪を運ぶ女たち。

☆43「乳母か縁説」〈藤原興風〉（前北斎刊。25.7×37.8 フリーア美術館蔵）

「誰をかも知る人にせむ高砂の 松も昔の友ならなくに」

※巨大な松の木の側の縁台でくつろぐ男女。茶の湯を沸かしている女もいる。

☆44「姥かゑ登き」〈紀貫之〉（無款。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香ににほひける」

※松の木のある家の門をくぐる狩衣姿の高位の男と供の侍。門前に籠と籠かき。道を挟んだ家の屋根に上り、壁に漆喰を塗る職人。その屋根の端に、長鎌を持った者や供人の被った笠が見える。

☆45「姥か絵と幾」〈右近〉（前北斎刊。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「忘らるる身をば思はず誓ひてし 人の命の惜しくもあるかな」

※木の鳥居に縄をかけ、補強をしている仕丁たち。手前の石灯籠の側には、女が二人、荷物を背負った旅人の男が二人いる。

☆46「姥か恵と起」〈平兼盛〉（25.7×37.7 大英博物館蔵）

「しのぶれど色に出でにけりわが恋は 物や思ふと人の問ふまで」

※街道の茶店に立ち寄る旅人たち。茶店の座敷では大きな点眼鏡で人相見らしき男がいる。

☆47「宇波か衛登起」〈清原元輔〉（前北斎刊。25.7×37.8 フリーア美術館蔵）

「契りきなかたみに袖をしぼりつつ 朶の松山波越さじとは」

※松の木の側に駕籠を置き、貴人が烏帽子を被らず、両手を袖に入れ休んでいる。その前に膝まづき、遠くで何かの作業をしている二人の男を指差している伴侍。貴人の後ろには、角隠しをした婦人がいる。

☆48「宇波か恵登き」〈中納言朝忠〉（前北斎刊。25.8×37.8 フリーア美術館蔵）

「逢ふことの絶えてしなくはなかなか 人をも身をも恨みざらまし」

※鳥居の前の桜の木の脇に腰を下ろして休む男親と子ども。前帯で打掛を着て、前髪を布で覆い、笠を持ち杖を突く遊女が、親子に向かって行く。「恨みざらまし」から、当時よく知られた「うらみ葛の葉」の古浄瑠璃から発想した絵と思われる。

安倍保明の長子安名が和泉の信太神社（葛葉稻荷明神）に参詣の折、妻の熱病に良いとされる狐の肝のために狐狩りに来ていた石川悪右衛門尉と争い、安名が一匹の狐を逃が

したことで悪右衛門に殺されそうになったとき、狐の化けた上人が現れて救われた。その後、谷川で溺れかけていた狐の化けた女を助け、やがて二人の間に子どもの清明が生まれたが、やがて七歳になった清明が狐姿の母親を目撃するという筋だて（古浄瑠璃「信太妻」〈葛の葉の子別れ〉『警女の記録と唄・語り』p23より。令和元年。江戸川区教育委員会）。

☆49「うはか衛とき」〈謙徳公〉（前北斎刊。25.6×37.4フリーア美術館蔵）

「あはれともいふべき人は思ほえて 身のいたづらになりぬべきかな」

※大がかりな糸繰り機での滑車を回す紐を操る二人の女。座って、糸巻き車で糸を括る二人の女。家の窓からは、部屋で機織りをする女が見える。

☆50「姥か縁説」〈恵慶法師〉（前北斎刊。25.6×37.7フリーア美術館蔵）

「八重むぐらしげれる宿のさびしきに 人こそ見えね秋は来にけり」

※農家の前で手で米の粃を篩い分けている母子。その側で馬から下ろした鞍を畳む女。午の後ろ足を盥に入れて洗っている農夫。

☆51「乳母か縁説」〈藤原実方朝臣〉（25.4×36.7ビクトリア・アンド・アルバート美術館蔵）

「かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを」

※看板に「伊吹山」と書いた茶屋で背中を見せて休む二人の男。茶を出す女に顔を向ける旅の女の図。

☆52「宇破か縁説」〈右大将道綱母〉（シャルル・ジローによる復刻。14.8×21.3フリーア美術館蔵）

「嘆きつつひとり寝る夜の明るる間 はいかに久しきものとかは知る」

☆53「うはか縁説」〈大納言公任〉（前北斎刊。25.8×37.5フリーア美術館蔵）

「滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ」

※山肌を流れ落ちる滝の向かい側の台地で、毛氈を敷き宴を開いている男達と二人の芸者。側で薪を用意している樵に酒を注いでいる男と、火吹き竹で火をおこしている男。

☆54「宇破か衛とき」〈和泉式部〉（前北斎刊。25.7×37.7フリーア美術館蔵）

「あらざらむこの世のほかの思ひでに いまひとたびの逢ふこともがな」

※桜の大木がある家の二階には、障子を開け放した部屋に病で寝ている女が見える。一階の門の前には供の小僧を連れた歌占の男が立ち、家の女が盆に載せた紙の札を差し出している。

☆55「姥母か縁説」〈紫式部〉（前北斎刊。25.7×38.0フリーア美術館蔵）

「めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな」

※川に渡した板橋の向こうに駕籠が数人の男と一人の女に付き添われていく。川のこちら側では、母子と女が駕籠を見やっている。子どもにつけられた紐を母親に引かれている。女は駕籠を指差している。天秤棒を担ぐ男が跡に付いている。天秤の荷物の一つから花が覗いている

☆56「宇破か縁説」〈小式部内侍〉（前北斎刊。25.8×37.7フリーア美術館蔵）

「大江山いく野の道の遠ければ まだふみもみず天の橋立」

※「文殊菩薩安置」と彫られた石碑のある寺社の渡り廊下の下で休む旅の女。その前に立つ旅の男。籠を持ち上げようとする腰蓑の農夫。道行く笠を被った二人の旅人。

☆57「乳母か縁説」〈伊勢太(大)輔〉(前北斎卍。25.4×37.8 フリーア美術館蔵)

「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな」

※屋敷の門に、数人がかりで花の咲いた桜の木を乗せた車を引き入れている。車の後ろからは二人の男が梃子の棒を使って押している。その様子を二人の仕丁が見守っている。

☆58「乳母か縁説」〈清少納言〉(前北斎卍。25.7×37.5 フリーア美術館蔵)

「夜をこめて鳥の空音は謀るとも よに逢坂の関はゆるさじ」

※坂下から上がってきて唐門をくぐる兵士たち。門前の木に登っている男が、その様子を見ている。

☆59「姥か衛止起」〈左京大夫道雅〉(25.8×37.2 フィツウイラム美術館蔵。近年まで所在不明であった。シャルル・ジロー(1854～1903)による復刻がされたものがフリーア美術館にある。25.8×37.2)

「今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな」

※内親王と密通した道雅だが、内親王の父により内親王の家の門に警護の者を立たせたという話を画材にした。門に三人の警護の者を描き、屏と幕によって通雅の行く手を阻んでいる

☆60「うはかゑ登き」〈仲(中)納言定頼〉(前北斎卍。25.9×38.0 着色。フリーア美術館蔵)

「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに あらわれわたる瀬々の網代木」

※川沿いの街道を往来する旅人。馬上の籠に乗る旅人と馬子。振分け荷物の旅人。長持ちを前後で担ぐ男達。

☆61「姥がゑとき」〈相模〉(前北斎卍。25.6×37.8 フリーア美術館蔵)

「恨みわびほさぬ袖だにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ」

※竹で組んだ高い物干しに、竿を使って布を干している女。その側で天秤の荷物を持つ男。家の中では、紐を横に渡した竿に紐を掛けている女。煙管をくわえてそれを見ている男。

☆62「うはかゑとき」〈周防内侍〉(前北斎卍。25.9×37.4 フリーア美術館蔵)

「春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ」

※宮殿の外廊下に座り、廊下から部屋の中に手を入れている貴人。柱の横からその様子を見ている二人の官女。廊下の角で話をしている二人の貴人たちがいる。

☆63「姥か縁説」〈能因法師〉(前北斎卍。25.6×37.3 フリーア美術館蔵)

「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は 龍田の川の錦なりけり」

※川の筏には竿を持つ男や腰を下ろしている男、火吹き竹で火をおこしている男がいる。遠くにも棹差す筏が行く。手前の川岸には、釣りをしている男達。岸边や川には紅葉が散り、流れている。

☆64「乳母か縁登起」〈良暹法師〉(前北斎卍。25.7×37.5 フリーア美術館蔵)

「さびしさに宿を立ち出でて眺むれば いづこも同じ秋の夕暮れ」

※祭礼の鉦や太鼓を鳴らしながら道行く人々。幣や提灯を持つ男、杖を突く女たち。側の柵で囲まれた屋根つきの高札の向こうには鳥が列をなして飛んでいく。

☆65「宇破か縁説」〈祐子内親王家紀伊〉（前北斎刊。25.7×37.3 フリーア美術館蔵）

「音に聞く高師の浜のあだ波は かけじや袖のぬれもこそすれ」

※高師の浜の大波がある浜辺で籠を持つ裸足の女と手を取り合う男。駕籠の簾を上げて浪を見る男と、客のわらじを揃える駕籠かき。高師の浜は和泉国（現在の大阪府南部の堺市浜寺から高石市あたりの一帯）の浜。

☆66「姥か恵登喜」〈藤原基俊〉（ボストン美術館蔵）

「契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり」

☆67「乳母か恵とき」〈法性寺入道前関白大（太）政大臣〉（25.5×37.2 ビクトリア・アンド・アルバート美術館蔵）

「わたの原漕ぎ出でて見れば久方の 雲みにまがふ沖つ白波」

※6人で船を漕ぐ船頭と3人の乗客の囚。爪のような、いわゆる北斎の波が船に掛かっている。

☆68「宇破か縁説」〈崇徳院〉（前北斎刊。25.7×37.5 フリーア美術館蔵）

「瀬を早み岩にせかるる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ」

※湾曲して流れる川に掛けられた板橋を渡る貴女二人に付く供人が三人。天秤の薪の束を担いですれ違いに向かう農婦。

☆69「乳母か縁説」〈源兼昌〉（前北斎刊。25.7×37.3 フリーア美術館蔵）

「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝覚めぬ須磨の関守」

※浜辺の高台で塩水を入れた樽を台車に載せ、塩水を溜める大樽に向かって引っ張る女と、樽を後ろから押す女。その側の塩掻き用の丁を担ぐ女。

☆70「姥か衛登幾」〈左京大夫顕輔〉（前北斎刊。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ」

※満月の下、二組の男たちが餅をついている。近くの湾曲した土手を僧侶と篝火を持った男が行く。

☆71「乳母か縁説」〈待賢門院堀河〉（前北斎刊。25.7×37.4 フリーア美術館蔵）

「長からむ心も知らず黒髪の 乱れてけさは物をこそ思へ」

※宮殿の部屋に座って物思いにふける女。部屋に続く渡り廊下には、女に持って行く湯桶を持つ女と、洗面の盆を持つ供の女が歩いている。

☆72「乳母か縁説」〈皇太后宮大夫俊成〉（前北斎刊。25.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」

※崖に吊した箆に乗り岩茸を採る二人の女。その下の道を行く天秤の草の束を担ぐ男。客を乗せた駕籠かき。笠を背にした道中差しをした旅人。遠くの山頂に小さく二匹の鹿が描かれる。

☆73「う波かゑと起」〈藤原清輔朝臣〉（前北斎卍。25.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「長らへばまたこのごろやしのばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき」

※小さな広場に作られた舞台上で踊りを披露する 袴姿の芸人。舞台の周りで見物する男女。

☆74「乳母かゑと起」〈俊恵法師〉（前北斎卍。25.5×37.5 フリーア美術館蔵）

「よもすがら物思ふころは明けやらで 閨のひまさへつれなかりけり」

※家の板戸を開け、袖を口元に当てて月を眺める女。

☆75「乳母か縁説」〈西行法師〉（前北斎卍。25.6×37.8 フリーア美術館蔵）

「嘆けとて月やは物を思はする かこち顔なるわが涙かな」

※笥から水が流れる手水鉢のある庵の部屋に座り、遠くの満月を眺める僧侶。

☆76「姥かゑと起」〈寂蓮法師〉（前北斎卍。25.6×37.7 フリーア美術館蔵）

「村雨の露もまだひぬ真木の葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮れ」

☆77「うはかゑとき」〈皇嘉門院別当〉（25.0×37.1 大英博物館蔵）

「難（波）江の芦のかりねの一夜ゆゑ 身をつくしてや恋ひわたるべき」

※イグサの束を多く乗せた大八車の前に渡した横棒を引く男、後ろから車を押す二人の男。坂下には塀のある屋敷が見える。

☆78「うはかゑと起」〈式子内親王〉（前北斎卍。25.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの弱りもぞする」

※部屋の座敷で、火鉢に薬缶がかかる大きな火鉢の前で、二人の女が身を寄せ合って眠っている。部屋の脇の小上がりの部屋ではもう一人の女が立膝のまま眠っている。板壁には馬の絵が嵌め込まれている。

☆79「乳母か縁説」〈殷富門院大輔〉（メトロポリタン美術館蔵）

「見せばやな雄島のあまの袖だににも ぬれにぞぬれし色はかはらず」

☆80「うはかゑと幾」〈後京極摂政前大（太）政大臣〉（前北斎卍。25.6×37.6 フリーア美術館蔵）

「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣片敷きひとりかも寝む」

※開け放たれた二階の座敷で布団の上に座り、首を背中にひねって外を見ている女。

☆81「うはかゑ登起」〈二條院讃岐〉（前北斎卍。25.6×37.3 フリーア美術館蔵）

「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし」

※砂浜の斜面を塩の塊を入れたかごを紐で引く二人の男。塩の塊を入れた籠を持ち上げている男。赤子を背負った母親と童が塩塊を入れた籠の紐を通した棒を支え持っている。

☆82「うはか恵とき」〈鎌倉右大臣〉（前北斎卍。25.8×37.8 フリーア美術館蔵）

「世の中は常にもがもな渚漕ぐ 海人の小舟の綱手かなしも」

※砂浜で数人の漁師が小舟を綱で引いている。海上には千鳥が群れをなして飛んでいる。

☆83「姥か絵登起」〈前大僧正慈円〉（シャルル・ジローによる復刻。14.8×21.3 フリーア美術館蔵）

「おほけなくうき世の民におほふかな わが立つ袖に墨染の袖」

☆84「姥か恵登喜」〈入道前太政大臣〉（前北斎卍。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「花さそふ嵐の庭の雪ならで ふりゆくものはわが身なりけり」

※石燈籠の側の桜の木から庭に散る花を、箒で掃いている母親としゃがんで塵取りに花びらを集めている童女。

☆85「乳母か衛登起」〈従二位家隆〉（前北斎卍。26.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける」

※画中の幟旗に「祭礼氏子中」とあり、その脇に「九 戊 戌 朱 明」（天保 9 年夏：1838）とあるので、その頃まで版下絵が書かれていたと考えられる。

神社の門にくくりつけられた付けられた輪をくぐる水無月祓えの神事で、御幣を振る神主と座って祈る男。肩車された子どもが輪を結わえた紐を引っ張っている。提灯を持った角隠しの女。小田原提灯を下げた杖を突く老人が帰りかけている。

☆86「宇葉か縁説」〈後鳥羽の院〉（前北斎卍。25.5×37.5 フリーア美術館蔵）

「人もをし人もうらめしあぢきなく 世を思ふゆゑに物思ふ身は」

※屋敷の屋根付き板塀の前を、竿の先につけた高提灯を担いで急いで走る男。その前に、馬上で疾駆する武具を着た武者。その前を抜き身の長刀を肩にして走る男。塀の門口から屋敷内に入る男の下半身が見える。塀の向こうから高提灯が三本、屋根越しに見える。

※未確認版下絵、〈中納言行平〉〈凡河内躬常恒〉〈曾禰好忠〉〈源重之〉〈儀同三司母〉〈大武三位〉〈前大僧正行尊〉〈参議雅経〉〈順徳院〉の 9 図（2005『北斎展図録』 p 360）。

●屏風画「鳳凰図屏風」（八曲一隻着色。齢七十六歳前北斎為一改画狂老人卍筆。印富士の形。35.8×233.2 ポストン美術館蔵）



1290 鳳凰図屏風（ポストン美術館）

※縦 35.8 cm に比して横 29.6 cm の縦大判を 8 枚続けて描いたもの。金箔を施した背景に横いっぱい羽を伸ばした鳳凰が極彩色で描かれる。

●双六画「新板和漢勇者尽飛廻双六」（この頃。大々判。色摺。葛飾北斎画 亀屋版）

てんぽう 天保7(1836)	ひのえさる 丙申	77 歳	てんじくろうにんがきやうろうじんまんじおう 天竺浪人画狂老人卍翁	うらがたひびとがきやうろうじんまんじ 浦賀旅人画狂老人卍	がきやうろうじんまんじ 画狂老人卍
齢七十七前北斎為一改画狂老人卍、七十七歳前北斎改画狂老人卍、					
前北斎改画狂老人卍、画狂老人卍翁、前北斎為一改画狂老人卍、前北斎画狂老人卍、					
びくりやうかいぞまおいななじゅうなながきやうろうじんまんじ 独流開祖齢七十七画狂老人卍、					
よひいななじゅうろくさきのほくさいいつあらためがきやうろうじんまんじ 齢七十六前北斎為一改画狂老人卍（前年のもの）、画					
きやうじんさきのほくさいまんじ 狂人前北斎卍、印富士の形：孫(27)、阿栄(39)					

◇諸国に飢饉続く。奥羽地方で死者 10 万人。

◇8月14日、曲亭馬琴、70歳を記念して柳橋万屋八兵衛（万八楼）で所藏品書画会を開き、その収入（135両）で孫に同心株を購入し与える。株に付いていた四谷信濃仲殿町（現、東京都新宿区霞ヶ岳町）の屋敷を改修。この年、神田宅を地主の杉浦清太郎に42両で売る。孫の太郎（9歳）を嫡家の当主とする。

◇12月19日、富岡鉄斎生（～1924）。

◇二代目永楽屋東四郎没（62）。

○為永春水『春告鳥』。

○歌川国貞「東海道五十三次之内（美人東海道）」。

○斎藤月岑『江戸名所図会』（後半4～7巻10冊）。

### 【秋ごろまで浦賀に逗留】

※天保6年条「浦賀に蟄居」（p640）参照。

※正月17日小林新兵衛宛の手紙。

「（略）来二月初旬には、筆紙、画之具、切れ目、相成候間、無是非老人老人、江戸へ出府仕候間、其砌は、内々にて御店へも参上、委細は、御面上に万々可申上候（略）」（『葛飾北斎伝』p148 ルビは筆者）

二月には画材が切れたので、調達のために江戸に一旦戻るが、その際には内々に小林新兵衛（嵩山房）へ出向き、いろいろ話をしたいというのである。内々に訪ねるのは浦賀に居ることを知られたくないからであろう。嵩山房は日本橋通二丁目にあった。この手紙に北斎自身と思われるコマ絵が添えられる。

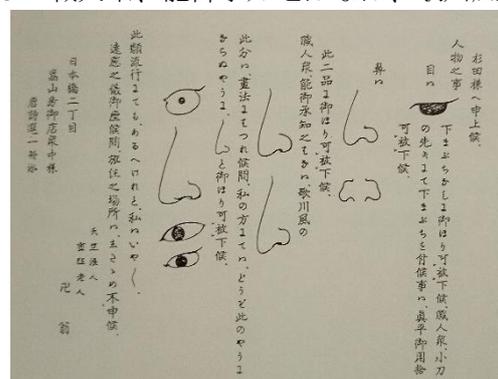


1291 「コマ絵」

嵩山房とは、武者絵の顔の彫り方について、目、鼻の具体的な形を図示しての注文をしているので、それらのことでの訪問であろう。また、同手紙に「遠慮之儀御座候間、旅住之場所は、したゝめ不申候」（p150）と、思うところがあって、浦賀に住んでいる場所は書かないとしている。自らを「天竺浪人画狂老人卍翁」と署名する。2月に一時的に江戸へ帰ったと思われる。

### 【歌川風の鼻、どうぞ此のやうにならぬやうに】

※同手紙の後半には、彫師に対し、鼻の線描を示し「職人衆、能御承知之はなは、歌川風の（歌川風の鼻の線描が書かれる）此分は、画法にはづれ候間、私の方にては、どうぞ此のやうにならぬやうに、（北斎風の鼻の線描）御ほり可被下候。（歌川風の目と鼻の線描）此類流行にても、あるべけれど、私はいやく」（『葛飾北斎伝』p149～150）とあり、歌川風の描き方が流行とはいへ、「私はいやく」と言っているのである（ルビは筆者）。末尾の署名は「天竺浪人 画狂老人 卍翁」とある。



1292 嵩山房宛て書簡

★3月頃。江戸深川万年橋（現東京都江東区常盤橋2丁目と清澄1～3丁目に架かる橋）付近に住む。この年刊『和漢絵本魁』の自序に「貴き御代の民たる事、実浮木の亀注の幸にして、万年橋の辺りに寓居なし（仮の住まいを構え）（略）」とある（注・ルビは筆者による）。

注）浮木の亀：「盲亀の浮木」のこと。大海中に住み、百年に一度水面に出て来る目の見えない亀が、ようやく浮木に遇い、その穴に入るという事。めったに遇えない幸せということ。

★墨摺りの濃淡について述べた小林新兵衛宛ての手紙の末尾に「（略）唐詩選残三丁半、差上申候。（略）かげんの違た 涼しい土用 浦賀旅人画狂老人卅三拜」（『葛飾北斎伝』p151）とある。唐詩選は、文化7年の『唐詩選画本 七言律』と思われ、「涼しい土用」とあるので夏の頃の手紙であろうから、一時的に江戸に戻ることはあっても、この年の夏までは浦賀にいたと推測できる。

★この年の秋に刊行された『広益諸家人名録』（天保丙申秋校正）に「北斎 名戴斗字 雷震一号為一画狂人 居所不定 葛飾北斎」（『年譜』による）とあり、秋頃までは居所が不明とされた。

### 【北斎の晩年の支援者・高井鴻山と出合う】

★この年、貧窮の北斎が絵草紙屋に売り込みに来た絵を、居合わせた江戸遊学中の高井鴻山が金二分注で購入したといわれる（尾崎周道『北斎 ある画狂人の生涯』（日経新書。p193））。

注）金二分：約7万5千円。金1両=6000文（仮）=二分。1文=25円で換算。

同書では鴻山との出会いについて更に別の見方も紹介している。

「北斎と鴻山があったのは天保七年ではなく、六年のできごとで、当時小布施の商人で十八屋というものが江戸日本橋で呉服商を営んでいたが、この十八屋と北斎はかねてから懇意であり、北斎は高井鴻山の人となり十八屋から聞いていた。鴻山が京で岸駒、岩岱について、また横山（筆者注：三島とも）上龍について絵を習い、絵に非常に興味を持っていることなども承知していた。十八屋はまた飛脚屋も営んでいたため、江戸遊学中の鴻山も北斎の人となりを聞いていて、北斎に逢いたく思い、同郷のことゆえ、この十八屋の紹介で両者が逢った」というのである（同書p193～194）。

後に高井鴻山は北斎の生活面・金銭面の支援者となる。文化3年（1806）生。明治16年（1833）没。信濃国高井郡小布施の豪農商・高井家十代目の熊太郎と母ことの四男。15歳のとき、京都に遊学、絵画・国学・和歌・儒学・漢学等を学び、天保4年（1833）に江戸に移住。天保7年（1836）の飢饉に小布施に帰郷し、自宅の蔵を開いて庶民を救済した。

●絵手本『新鄙形』（1月。角書「諸職絵本」。半紙本墨摺一冊。全27丁。齢七十七前北斎為一改画狂老人卅筆。印富士の形。須原屋茂兵衛版。22.4×16.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/国文学研究資料館/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東洋文庫/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション蔵）

1293 新雛形見返し（新日本古典籍総合データベースより）

※見返しは「前北齋改画狂老人卍筆 諸職繪本 葛飾新雛形 天保七丙申孟春」とある。自序には「天保七丙申 孟春 画狂老人卍述 印富士の形」とある。最終丁には「齢七十七前北齋為一改画狂老人卍筆印富士の形 剗刷江川留吉」とある。奥付には三都書肆として「勝村治右衛門（京都寺町通松原）、秋田屋太右エ門（大坂心斎橋安堂寺町）、小林新兵衛（江戸日本橋通式丁目）、須原屋佐吉（同四丁目）、須原屋茂兵衛版（同壹丁目）が連名で記される。後に永楽屋東四郎版『葛飾北齋遺墨 北齋新雛形』（刊行年不詳。淡色摺）が出る（『ピクチャーモースコレクション北齋図録』による）。須原屋茂兵衛版の広告に中・下。続編の広告あるも未刊。※様々な職人が使用できるよう文様や図面の割出しなどに言及したもの。



### 【北齋の細密画批判に反論・不学者の論一笑に備ふのみ】

※巻末の「神馬図」に添えられた、北齋の細密画法への批判に応えた文。

「客来ッて叱つて曰く。足下の細画委きに過たり、故に忽にあらざと譏人多し。改ルにしかじ。答て智者ハ其智に誇る。業等閑にして、文雅を礼とし、あるハ流行を常として、智を以て世に鳴ル、わざ鈍キハ老て下タる事速なり。幸に天我をして遇ならしむ。剩文旨にして、古法に繩せられず。去年を悔ヒきのふをハぢ、ひとり塞翁が馬に鞭うつて、此道に走る事をほしひまゝにす。齢八旬にちかしといへど、眼氣筆力壯年にかかわらず、百歳の命を保ちて、独立のこゝろざしをじやうじゆ（成就）せん事を思ふ。其客にも命あらバ、老人が言の違ざるを見給ふべし。客いかつて（怒って）憚る。不学者の論一笑に備ふ而已」（注・句読点・ルビは筆者による）。



1294 『新雛形』巻末（新古典籍データベースより）

●絵本『和漢繪本魁』（正月。半紙本。三巻墨摺一冊。全 32 丁。最終ページに、七十七前北齋改画狂老人卍筆。印富士の形。自序には「前北齋改画狂老人卍述」とある。彫工・杉田金助・江川留吉とある。扉には、「和漢繪本魁 初編 前北齋改画狂人卍筆 書林崇山房 北林堂 梓」とある。22.6×16.0 大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ピクチャーモースコレクション/山口県立萩美術館/東洋文庫/フリーア美術館：プルヴェラーコレクション蔵）。

※北島順四郎（北林堂 江戸神田鍛冶町）、小林新兵衛（崇山房 江戸日本橋通二丁目）、秋田屋太右衛門（大坂心齋橋安堂寺町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町）、和泉屋市兵衛（江戸芝神明前）、西宮弥兵衛（江戸中橋広小路）の相合版（共同出版）。

※最終図「備後の三郎高德」の図に、高德が木に「天保六乙未年四月齡七十六前北齋為一改画狂老人卍筆」と書き、版下絵の制作年月（天保6年4月）が記されていて、下絵は天保6年4月に描かれたことを示している。

1295『和漢絵本魁』備後の三郎高德（ゴンス：1883「日本の美術」国文研データベースより）

続編「葛飾振」（岡田屋嘉七広告）は未刊（永田生慈『北齋の絵手本四』p262による）。

※北齋自序に「尊き御代の民たること、実に浮木の亀の幸にして、万年橋の辺りに遇居なし、年の功を日に暈るの折から、来たれる人は、書肆嵩山房主人、例の板下をものせよと乞ふ。基巻中遍く治世に武



を忘れざる有名の壮士剛強の像を写して、智仁勇の三編に兼備せよとなり、潔きすゝめに引きたてられつ、七十に余れる老にも屈せず、弓にひとしく、まかれる腰に光陰の箭うち刻へて、的をはつさぬはつ春の唯中、時の拍子にはやり雄の画本魁と表題して、今年巳午の口を形つて恵方にむかつて筆はしめに誌す。天保七 丙申の艷陽 前北齋改画狂老人卍述 印富士の形 董斎盛義（書家）書（注・句読点・ルビは筆者）とあり、有名な和漢の剛士の像を、智仁勇の三編で完成する予定で、その版下絵を描くよう版元から依頼があったことを記している。これは『勝鹿振』と題して出版予定であったが未刊となった。版下絵は完成していて、メトロポリタン美術館蔵という（永田生慈『北齋の本懐』角川新書 p102）。

〈多力雄の命〉〈豊玉姫の本形・彦炎出見尊〉〈堤婆達多 鉄弓を彎〉〈夏の禹王洪水を治〉〈大蛇の再生 盤永姫 天児家根命〉〈藤原広嗣の灵霊 玄暴僧正〉〈大伴の良雄 記の名虎 両孤の英雄角觝に力を挑〉〈物部の守屋の大臣〉〈漢の張良〉〈蒼海公〉〈平親王 将門 倭藤太秀郷〉〈韓信〉〈伊予の尉藤原の純友 橘の遠保純友を生捕〉〈楚の項羽 烏推といふ名馬を得〉〈平井の保昌 土蜘蛛退治〉〈焚燬 鉄門を破〉〈夢中出現の鍾馗〉〈隋の臣下魔叔謀 好で小児の肉を喰〉〈制多伽童子 文覚荒行〉〈汜額女怪力〉〈平忠盛怪僧を捕ふ〉〈備後の三郎高德〉など。

●絵本『絵本武蔵鑑』（8月。半紙本墨摺一冊。22.6×16.0 見開きに「前北齋改画狂老人卍筆 画本武蔵鑑 甲冑之篇 書林嵩山房 北林堂新梓 天保七丙申朱明（筆者注：夏）発兌」とある。奥付には「七十七齡 前北齋改画狂老人卍筆 印富士の形」とある。彫工・江川留吉。秋田屋太右衛門（大坂心齋橋安堂寺町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町）、和泉屋市兵衛（江戸芝神明前）、北島順四郎（江戸神田鍛冶町）、小林新兵衛

(江戸日本橋通二丁目) 西宮弥兵衛 (江戸中橋広小路) の合版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/東洋文庫/大英博物館蔵)

※和漢の武者を題材にしたもの。『和漢絵本魁』の二編として刊行。奥付に「天保七丙申年八月発行」とある。明治10年の刊行もあり)

※画中の何カ所で自らの画論を短く記している。また、序文には「(略) 老人ことし七十有七齡、眼鏡を用ひすして、燈下に毫を揮ふ。その健にあらざれば、此勇壯をうつすことあたはし。其氣力にあらずば、この密はゑかきかたからん。奇巧妙画、おのれか拙辞のおよはさる所ハ、巻中の絵のたすけによりて、おのつから明らかならむ。天保七年六月 銀官局司 秋田太義識」(句読点・ルビは筆者)として、北斎の健康ぶりが無ければこれほどの奇巧妙画、細密の画は書けなかつたらうと述べている。

注) 秋田太義：不明。

### 【酔中筆の拙き画】

※『絵本武蔵鑑』29丁の上杉謙信と武田信玄の図について、『葛飾北斎伝』(p190)では次のように厳しく批判している。

「謙信のきりこみたる太刀を、信玄左手に軍配を持ち、逆にうけとむるのさま甚拙し。しかして信玄の右手は、一刀を引き抜かんありさまなれど、これまた甚拙し。北斎も自ら拙しとおもひければ、此に副書して、『酔中筆して曰く、紙中寸尺限あり。形自在ならず。馬上と歩行との風情は、横に広からんものを立にす。余は押ししてしるべし』と、これ即酔中の字をかりて、拙を覆ひたるものなり。実に酔中とか言はざれば、人に示されぬ画なり」(ルビは筆者による)。まるで酔って描いたような絵だというのである。

ちなみに、北斎は「文化文政年間の諸名家、大抵酒を飲まざるものなし。惟北斎翁に至りては、絶えて酒を飲まざりしなり。画の味は、蓋し酒よりも猶甘きが故なるべし」(『葛飾北斎伝』p181)



とあるように下戸であった。 1296 上杉輝虎 入道謙信/武田晴信 入道信玄 (すみだ北斎美術館)

●絵本『画本葛飾振』(版下絵一帖墨摺。無款。25.4×39.4 メトロポリタン美術館蔵)

※『和漢絵本魁』『絵本武蔵鑑』の巻末広告に『画本和漢葛飾振』とあるが未刊。見開き22図。半丁図6図の日本の武人等の版下絵。『和漢絵本魁』掲載の「絵本魁」二編と『絵本武蔵鑑』掲載広告にある「勝鹿振」がこの版下絵をもとに刊行される予定であったとされる。『2017 北斎一富士を超えて』図録p225には「俵藤太秀郷 龍宮城より宝を得る」(メトロポリタン美術館蔵)と題した『画本葛飾振』の版下絵が紹介されている。

●絵本『唐詩選画本 七言律』七編(9月。半紙本5冊。画狂老人己翁筆。高井蘭山著。

小林新兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/同志社大学今出川図書館蔵)

※天保4年の『五言律』六編とこの年の七編に挿絵を描いている。巻一に11図、巻二に11図、巻三に10図、巻四に7図、巻五に6図の挿絵を描く。袋には、画狂人前北斎卍筆とある。

●絵手本『**画本和漢誉**』(半紙本墨摺一冊。全30丁。三都書肆として、出雲屋文次郎(京都三条通升屋町)、河内屋喜兵衛(大坂心斎橋通北久太郎町)、河内屋茂兵衛(同博労町)、須原屋茂兵衛(江戸日本橋通壹丁目)、山城屋佐兵衛(同二丁目)、小林新兵衛(同)、岡田屋嘉七(芝神明前)、山城屋政吉(日本橋四日市)、紙屋徳八(下谷御成道)の連名版。大英博物館/フリーア美術館/メトロポリタン美術館蔵)

※和漢の武者が戦う様子を描く。没後の翌年、嘉永3年(1850)3月に出版される。下絵は76歳(天保6年)のもの。

嘉永3年の序文「(略)いでやはつかに此一巻をひらき見んにハ。漢に和に。いにしへの誉ある人々の戦ふさまを。まのあたり見る心ちぞせらるゝ。猶かつ画狂人の筆の巧にハ。健きものゝふのうごきはたらくばかりにこそあれ。嘉永ミとせ卯月日 山崎義成しるす」  
注) 山崎美成：不明。

※奥付には「七十七齡 前北斎改画狂老人卍筆 印富士の形/彫工 杉田金助 江川留吉(五常亭)」とある。



※見返しには「前北斎画狂老人卍筆 画本和漢誉 全一卷 嘉永庚戌(嘉永3年)孟春新鐫(新たに版を彫ること)江都東昌軒発行」とある。

※裏表紙見返しには「画狂老人卍筆 嘉永三年庚戌五月八日」とある。



※巻末の挿絵「鎌田又八がちから」図中には「画本和漢誉 豆相ノ旅客 前北斎改画狂老人卍筆 時七十六歳」とあるので天保6年の伊豆・相州の旅中に下絵が描かれていたことが分かる。

1297 蒲田又八がちから(大英博物館) 右 拡大図

●摺物「**歌占図**」(1月。独流開祖齡七十七画狂老人卍)

※文政10年の「歌占図」(北斎為一敬画。大英博物館蔵)とは別図。真偽不明。

天保8(1837) 丁酉 78 歳 齡七十二画狂老人卍 (前年の「七十七」の彫り誤りか)、 応需画狂人卍写意、齡七十八画狂老人卍 印葛しか：孫(28)、阿栄(40)
---

◇2月16日、成島柳北生(～1894)。

◇2月19日、大塩平八郎の乱。3月27日、鎮圧・自殺。

◇3月24日、江戸窮民に2万俵の施米。

◇4月2日、将軍家斉から家慶に。

◇6月、生田万の乱（越後の国学者生田万が、飢饉困窮を訴えて越後・柏崎で起こした反乱事件）。

◇6月、モリソン号事件（普吉ら日本人漂流民を乗せたアメリカ商船が浦賀に入港。浦賀奉行が砲撃した事件）。

◇仏人タゲール、写真機「タゲレオタイプ」を発明。

◇シーボルトの日本の民俗関係資料がオランダ政府に買い上げられる。これによりシーボルト日本博物館が設立される（現、オランダ国立民族学博物館）。ここで「北斎漫画」が展示され、世界初の浮世絵展となる。

◇この頃、江戸で佃煮が売り出される。

◇秋、豊作となる。

○歌川広重『江戸近郊八景』

○鈴木牧之『北越雪譜』初篇。

### 【林町から本郷に住むか・放蕩孫没か】

★「天保十年六月八日針医某話」（朝岡興禎編『古画備考』嘉永3年項より）

「北斎男子ハ御小人目付ヘカ家ヲ継、加瀬田（多）吉郎トテ本郷ノ組屋敷ヘ別宅ス、娘於栄トカハ弟子（筆者注：「才子」の誤りか）也、外ニ孫ノ男子二人アリ、北斎其後、林町注1ヨリ外ヘ転宅ス、其後、年経テ途中ニテ逢タルニ、孫兩人共、放蕩ニテ注2甚困リ候ニ付、（以下国立国会デジタルコレクションでは判読不能により Web「浮世絵分館資料館」浮世絵師総覧・葛飾北斎による）只今ハ本郷ノ俵方（筆者注：次男多吉郎）ニ同居致候ト被申候、一昨年（天保八年）ノ頃没シ注3被申候由、加瀬氏ハ墓所一覽ニ漏タル名家ノ墓所ヲ編集致サレ候ト也」（国立国会図書館デジタルコレクション「30-179 コマ」、及び WEB「浮世絵文献資料館」葛飾北斎：嘉永3年の記事より。ルビ・句読点は筆者による）

注1) 林町：林町三丁目の甚兵衛店。

注2) 孫兩人共ニ、放蕩ニテ：北斎の長女阿美与と柳川重信の間には男子が生まれたが、他にも男子がいて、二人とも「放蕩」であったという話には疑問がある。

注3) 没し：誰が没したのか不明。あるいはドラ孫か。

### 【天保8・9年は作画減少】

●地誌『日光山誌』（1月。大本五冊墨摺。植田孟縉編。序文は文政8年(1825)。齢七十二画狂老人卅筆（其一）。応需画狂人卅写意（其二）。挿絵二図〈龍頭の滝〉（其一と其二）を描く。他に二世柳川重信、谷文晁、渡辺崋山等が挿絵を描く。須原屋伊八・須原屋茂兵衛の合梓版。国立国会図書館/島根県利美術館：永田コレクション/東洋文庫蔵）

※其一にある「龍図瀧」について、「この龍頭瀧の図に『齢七十二画狂老人卅筆』とあり、この年令からすれば天保2年(1831)の制作となるが「七十二」の「二」の字体に欠損がみられ、あるいは「七」の字を彫り誤ったか欠損してこのようになったかと思われる点あり。刊年との関係からも合理性があるので、天保八年（1837）の項に入れておく。」という見

方もある（鈴木重三『在外秘宝』）。本稿もこの説に一応従う。他に、72歳の時に実際に日光に行き行って写生をし、それに基づいて描いたものという説もある（2017『北斎一富士を超えて』図録 p11）

1298 龍図の滝（初沢町の紹介による）



右図：落款部分

- 読本『**絵本西遊全伝**』（四編。河内屋源七版。早稲田大学図書館蔵。文化三年初編参照）
- 肉筆画「**王喬図**」（絹本着色一幅。齢七十八 画狂老人卅筆。印葛しか。33.0×56.5 個人蔵）

※明帝の時、楚国葉県の官吏の**王喬**は、仙人となって、葉県から鴨の羽になった靴を履き、馬車も用いず遠いところから毎朝早く帝にまみえたので、帝は不思議に思いその様子を伺い網を張って鴨を捕らえると、王喬の靴が網に残ったという（橘守国『絵本故事談』巻六の記事を永田生慈が『北斎研究』35号で紹介。P5～6）。

図は、画面左下に墨摺で網を描き、図中央に羽根を広げた鴨の背に裸足で乗り、右手をかざして落ちた靴の行方を捜している様子**の王喬**を描く。

天保9(1838) 戊戌 79歳 前北斎為一老人、**齢七十九前北斎卅：阿栄(41)**

- ◇3月10日、江戸城西丸炎上。
- ◇4月、江戸日本橋・神田大火。
- ◇6月1日、**山東京伝**、剃髪する。
- ◇8月、この頃より都々逸坊扇歌の唄う都々逸節が流行。
- ◇10月23日、高井蘭山没（77）。
- ◇水野忠邦：農村復興策（人返令）。
- ◇長崎オランダ商館江戸参府。
- ◇緒方洪庵、大坂に適塾を開く。
- ◇シーボルト、『日本』仏訳・出版。
- ◇曲亭馬琴、春頃より左目が翳むようになり、眼鏡が曇ったためとして、値段の高い水晶製の眼鏡を購入する。

### 【天保9年の浮世絵等の価格】

◇天保9年の曲亭馬琴の書簡（『馬琴書翰集成』八木書店）に次の記述がある。

「（略）近来、紙ことの**外高料**のよしにて、錦画の**価**いたく登り候。『八犬伝』残り式枚の分ハ、おろし直段壹枚三分づゝ、又芝居にていたし候錦画は、おろし直廿四文づゝに御座候（略）」（6月28日、**殿村篠斎宛**て。第五巻 p24。ルビは筆者）

「（略）錦画の紙イヨマコ、**甚高料**のよしにて、**価**前々とハ一倍に成り、西与（筆者

注：西村屋与八) のハ巻枚おろし直三分づゝ、小うり店にてハ四十八文づゝにうり候よし。役者画ハ、おろし直巻枚廿四文づゝ、小うり店にてハ三十二文づゝにうり候へども、よくうれ候よし」(7月朔日、小津桂窓宛て。第五巻P36 ルビは筆者)

紙代高騰で、錦絵なども高くなってきたというのである。それでもよく売れているという。

※一分=十文(250円)として三分(30文)は約750円(一文=25円で換算)。役者録画1枚は卸値24文(約600円)小売り値32文(約800円)である。文化2年(1805)では、役者絵1枚約200円、大判錦絵1枚は約500円程度であった。⇒文化2年「文化2年の浮世絵等の価格」参照。

●読本『新編水滸画伝』四編後帙(7月。五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。丁子屋版)

●読本『新編水滸画伝』五編前帙(五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。丁子屋版)

●読本『新編水滸画伝』五編後帙(五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。丁子屋版)

●読本『新編水滸画伝』六編前帙(五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。河内屋孫三郎版)

●読本『新編水滸画伝』六編後帙(五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。河内屋孫三郎版)

※初編は文化3年(1806)刊行(奥付は文化2年)。

●肉筆画「大黒天図」(9月。「俵上の大黒天図」とも。天保九戊戌年九月甲子日子ノ刻 齢七十九前北斎卅筆。印不明)

※天保15年(1844)「大黒天図」(現所在不明)とは別図。

天保10(1839) 己亥 80歳 画狂老人卅筆 齢八十、八十歳卅、画狂老人卅筆 八十齡、
画狂老人卅筆 齢八十歳、画狂老人卅八十、八十翁卅老人、画狂老人卅、百姓 印 葛し
か：阿栄(42)

◇曲亭馬琴、春頃より左目のかすみが生じたが、翌年春までは何とか稿本を書く。

◇1月19日、ポール・セザンヌ生(～1906)。

◇3月17日、月岡芳年生(～1892)。

◇5月14日、蚕社の獄。高野長英、渡辺華山等がモリソン号事件と鎖国政策を批判したため、鳥居耀蔵の首謀により獄に繋がる。12月18日、長英は終身禁獄、華山は蟄居となる。

◇8月20日、高杉晋作生(～1867)。

◇12月頃、人情本が流行。

★この頃、本所石原片町(現、石原1・2丁目辺。内藤山城守下屋敷跡辺。御厩河岸渡し場近く)に住む(『和楽』2017年9月。10・11月号 p71掲載の「嘉永 新鑄 本所絵図」による)。文化14年(1817)頃に石原片町に住んだともされるが、検討の要あり。

【この頃、家には飯器なし。土瓶、茶碗二、三個あるのみ】

※「戸崎氏又曰く、本所石原町片町の頃、三食は隣の煮売酒店から取り寄せる。家には飯器なし。土瓶、茶碗二、三個あるのみ。(略)関根(只誠)氏『増補類考』に曰く、翁は、生涯赤貧にして世を終ふ。壮年の頃は、一脚の机なく、飯櫃を机にかえ板下を画きしとぞ」(『葛飾北斎伝』所収座談。p 200)

続けて『葛飾北斎伝』(p 201)には、小林新兵衛(嵩山房)宛の手紙に『日光山誌』(天保8年:1837刊)の画料請求の言葉に続けて書かれた「娑婆にすむ粥なき鍋のつるされて、すくふぼさつもあらじとおもへば」(脚注:ぼさつは米の異称。すくい上げる米粒もない貧しい状態。「粥なき」の縁で出す。なお「粥なき」は「甲斐なき」に通わせる)の狂歌を記している。

★さらに本所達磨横町(現東京都墨田区本所1丁目辺。駒形橋東岸)に住む。初めて火災に遭う。

### 【初めて火災に遭う。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし】

★達磨横町注1で初めて火災に遭い、多くの縮図や車一台分の和漢古今東西の図を焼失、筆のみを持って阿栄とともに逃げる。その後、筆はあるが他の物はない。有った磁壇を破り、底の方を筆洗とし、破片を絵の具皿にして作画したという。

※「同十年の頃、本所石原町注2に住し、後に達磨横町に転じ、火災に罹る。(略)転居五十六回にして、火災に遇はざるは、実に珍し。されど終に火災を免るゝこと能はずして、乏しき衣類諸道具を失ひ、娘と共に赤裸となり、恰も乞食の如きありさまとなりし。其の火災に遇ひし時、翁は、筆を握りて家を飛び出し、娘阿栄もつゞきてあとより飛び出だし、家財をおしともおもはぬにや、取りかたづけ持ち出でる暇は、ありながら、跡をも見ずして、逃げ去りたり。さて画を請ふ者ありしが、筆はあれど、硯其の他の器具なければ、ありあふ磁壇を打ち砕き、底の方を筆洗となし、碎片を絵の具皿となし、画きて与へたり。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし。されど更に憂ふる色なし。柴文の話」(『葛飾北斎伝』p 165~166 ルビは筆者による)。

### 【車一台分の縮写(スケッチ)図を消失】

「梅彦氏曰く、北斎翁幼より画道に志し、和漢古今を論ぜず、西洋の画図に至るまで、苟見るに足るものあれば、即縮写して、これを蔵し、殆一車にみつ。此の縮写せし画図は、本所石原注3にて、火災に罹り烏有となる。翁深く嘆息して、其の以来は縮写をなさず。またおのれが下画も、敢て残しおくの意なきが如し」(『葛飾北斎伝』p 165~166 ルビは筆者による)。

注1) 達磨横町: 現墨田区本所1丁目辺。

注2) 本所石原町: 現墨田区石原1・2丁目辺。

注3) 本所石原: 達磨横町を指していると思われる。

### 【生涯の肉筆画1326点、80歳以降134点】

★この頃からは、肉筆画に傾注する。ちなみに北斎の生涯における肉筆画は1326点(2011年3月現在。久保田一洋の北斎資料を島田賢太郎が「台東区生涯学習 浮世絵講座 葛飾北斎 第5回 北斎の肉筆画と問題点」(2011年3月9日)で紹介している)。

同様に、『北斎一富士を超えて』展図録（2017年10月）p18、テイシー・クラーク「逆順で語る晩年の北斎」では「現存する年記のある肉筆画点数」として、次のように紹介している。（ ）内は点数。

80歳(19)、81歳(13)、82歳(4)、83歳(3)、84歳(16)、85歳(14)、86歳(6)、87歳(8)、88歳(32)、89歳(7)、90歳(12)計134点

★此の頃にも『肉筆画帖』を描いたか。林忠正旧蔵の『肉筆画帖』（全12図）には「画狂老人卅八十歳画」とあったという（『Hokusai』Edmond de Goncourt〈エドモント・デ・ゴンクール〉の説を『年譜』で紹介）。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）

☆草履取る手にあしはらを又握り 卅（豊臣秀吉は草履取りから葦原の国を手にしたことだ）

☆下女報謝来れば摺ンで入れて遣り 百姓（托鉢僧の鉢に報謝を入れるように下女も来た客を入れてやる）

### 【北斎の孫・多知女に結婚祝いの「鯉図」を贈る】

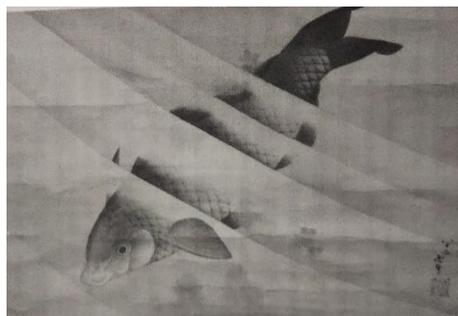
★北斎の孫（北斎の後妻ことの二男多吉郎〈後の加瀬崎十郎〉の子）多知女が白井久之助と結婚するにあたり祝いとして「鯉図」一幅を贈る。

●肉筆画「鯉図」（八十歳卅筆、印葛しか）

※水面に光が当たり、水藻が透けて見える。

※箱蓋裏「曾祖父葛飾北斎一多知女白井家に嫁スルニ当り此鯉図ノ画ヲ賜ハル 十三代 白井孝義（筆者注：多知女の長男）」

1299 鯉図（白井家蔵：内藤正人「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」より転載：モノクロ）



●肉筆画「遊鯉図」（絹本淡彩一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。65.7×30.8 個人蔵）

※光の当たる水面を泳ぐ一匹の鯉。尾の近くに水藻が描かれる。

1300 遊鯉図（dramtic-history.com より転載）

### 【西瓜図の謎・皇室との関わりは？】

●肉筆画「西瓜図」（絹本着色一幅。86.1×29.9 画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）

※宮中の誰かに「応需」（特別の求めに応じたもの）されて描いたものとされる。（今橋理子「江戸絵画と文学—〈描写〉と〈ことば〉の江戸文化史」：小林忠「画狂北斎の実像」（2005『北斎展』図録所収）による紹介）。

従来、同図は、仁孝天皇(1800~1846)の光格上皇(天保11年11月18日崩御)の依頼という見方があった(内藤正人『浮世絵再発見—大名たちが愛でた逸品・絶品』)。

※図は、半分に切られた西瓜の表面が紙で覆われ、包丁が置かれている。図の上には張られた縄に西瓜の皮の細切りが掛けられている。



※宮中の七夕の星まつりである「乞巧奠」の儀式的飾りがこの図に見立ててあり、包丁の刃についた星座のような粒が数点あるという（辻惟雄『浮世絵ギャラリー3 北斎の奇想』）。

「乞巧奠」では、様々な色の糸をかけ、水を張った盥や梶の葉などを用いることからの見立絵とも考えられている。川は紅白の糸、西瓜は盥、包丁は梶の葉を「鍛冶の刃」に掛けたとする。

※以上の見方に対して、牽牛と織女に見立られた包丁の点は、黴の汚損であり絵の具の痕跡はない。また、この絵が皇室に収められたのは明治以降であるので、皇室との結びつきはないとの見解が示された（太田彩・すみだ北斎美術館主任研究官による調査。「読売新聞」2017年10月16日朝刊記事）。

※また、令和1年（2019）5月4日「読売新聞」朝刊の記事によると、絵を納める箱の蓋裏に「雪衣珍玩」と記され、所蔵する宮内庁三の丸尚蔵館の太田彩主任研究官によれば、雪衣は同時代の国学者・小林歌城の号であり、柳亭種彦と交際があり、種彦の版本に挿



絵を描いていることから、北斎とも接点があるという。本来は小林歌城の所蔵であった。明治30年1月に崩御された英照皇太后（考明天皇の女御。明治天皇の嫡母として皇太后とされた。旧名：九條夙子）の百日祭で4月に明治天皇が京都に滞在中、絵画好きの天皇のために画商が持ち込んだ「西瓜図」を買い上げたものという。七夕の見立絵であるとしても、宮中ではなく、江戸の文化人サークルの知的な趣向ということにもなるとする。また、美術商の浜田篤三郎の所蔵を経て、1897年（明治30年）、浜田に近い美術商が納入したことが確認出来るという。かくて光格天皇縁の品とする見方は否定されたとする。1890年（明治23年）の展覧会目録によれば、北斎筆とされる西瓜の絵はほかにも知られず、1890年（明治23年）の展覧会で正岡子規が見て瞠目したという西瓜の絵は、展覧会の目録によれば、出品者は浜田篤三郎であり、尚蔵館所蔵の絵と確定できたと、同紙は解説する。

注）北斎の他の「西瓜図」が何を指すのか不明。あるいは、文化7年～15年の「西瓜と包丁図」（紙本着色一幅。北斎館蔵）を指すか。

さらに、「美を紡ぐ 日本美術の名品」展（令和1年5月3日～6月2日、東京国立博物館）図録の解説によると、「西瓜」の季語は初秋で、七夕を示し、その赤色は染色の色で、織物の名手額田姫から織姫のイメージとなり、包丁は男性を表し、西瓜の露に濡れた和紙は川を示すところから、天の川を挟んだ織姫と彦星を見立て、吊るされた西瓜の皮は、染めた絹を干しているという。

※いずれにしても、この絵が晩年の北斎の傑作肉筆画であることに変わりはない。

●屏風絵「春秋山水図」（絹本着色双幅。画狂老人卅筆齡八十 印葛しか。各71.0×

27.8 出光美術館蔵)

※右図：柴木の束を乗せた舟が溪谷を行く。船頭が棹を体を反らせて力いっぱい差している。右岸の崖には桜が咲いている。崖や岸边は点苔の描法。

左図：図の上部に峨々たる山が聳え、図の下から山肌に沿った道がくねくねと続き、その道を山上に向かって歩く笠を被った旅人が三人小さく描かれる。

●肉筆画「富士と笛吹童子図」（「富士を見る童子」「富士見牧童図」とも。絹本着色横判一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。36.2×51.1 フリーア美術館蔵)

※画面中央に右斜め上に伸びる木の幹に座り、向こう向きに笛を吹く童子。童子の前には雄大な富士が裾野を広げている。童子の足元には籠がぶら下がっている。



1302 富士と笛吹童子図 (フリーア美術館)

●肉筆画「樹上笛吹童子図」（絹本着色縦判一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。36.2×51.1 フリーア美術館蔵)

※図の右下から左中央に伸び、そこから右上に伸びる木に腰掛け、向こう向きで笛を吹く童子。足元から籠が下げられている。「富士と笛吹童子図」と同図だが落款の違い。

●肉筆画「柳上で釣りする童子」（「柳上釣童子」とも。元掛軸。絹本着色一面。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。90.0×28.2 フリーア美術館蔵)

※木の枝に乗り、水面に竿を下ろす童子。板に魚籠が下がっている。伸びた木の向こうの空には雀が三羽飛んでいる。

●肉筆画「竹林の虎図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。73.0×31.5 個人蔵)

※細い二本の竹に体を巻きつけるようにしている虎の眼が何かを狙っているようでもあり、弱々しくもある。

1303 竹林の虎図 (intojapanwaraku.com より転載)

●肉筆画「春日山鹿図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。32.5×55.8 鎌倉国宝館：氏家浮世絵コレクション蔵)

※春日山の麓には萩の花が咲き、山の中腹には雌雄の鹿がいる。背後には薄く緑と青味がかった穏やかな山が描かれる。



●肉筆画「貴人と官女図」

(絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。35.4×60.4 すみだ北斎美術館蔵)

1304 貴人と官女図 (すみだ北斎美術館)

※貴人が垣根の間から垣間見をしている。家の縁側にはあでやかな衣装の三人の官女がいる。貴人の元の周りには細密に描かれた草花が咲いている。垣間見の場面は、『伊勢物語』や『源氏物語』等の古典文学にしばしば登場する。

●肉筆画「猫図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。37.5×48.1 北斎館蔵）

※図の右側から中央に向けて伸びる蔦葉を背にして、両足を揃え首をそらして上を見上げる猫の図。

●肉筆画「放屁図」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。30.1×54.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※折烏帽子に素襖を来た男が扇を前にして蹲り放屁をする。その勢いが蜀台の蝋燭の火を靡かせている。

1305 放屁図（島根県立美術館）



●肉筆画「恵比寿図」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。44.2×61.5 個人蔵）

※ヒラメを前にして、釣竿と魚籠を後ろに置き、腕を組んで座って魚を見ている恵比寿。

1306 恵比寿図(bluedaiary2.jugem.jpより転載)

●肉筆画「蟬丸図」（紙本着色一幅。元掛幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。92.3×18.6）

※大きな袋を首から下げた髭の蟬丸が、裸足で空を見ている。背景には山水風の山が描かれる。蟬丸は「小倉百人一首」に収録された平安歌人。琵琶の名人とされる。

●肉筆画「捉魚図」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※水中の鮎を捕えようと首を水中に入れ、嘴を差し出す鶇。

●肉筆画「登龍門」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※垂直に落下する瀧に垂直に登る鯉。端午の節句に依頼されたものと見られる。

●肉筆画「珊瑚引きの図」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※波打ち際で赤い大きな珊瑚を縄で引く黒い皮膚の異国風の男の図。

●肉筆画「宝珠掃きの図」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※巻子を肩にし、箒と塵とりを持って丸い玉（如意宝珠注）を集める男の図。

注）如意宝珠：仏教で靈験を表すとされる宝の珠。観音や地藏が手に持つ。

●肉筆画「滝見巡礼」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。中外産業株式会社：原安二郎コレクション蔵）

※垂直に落ちる滝の下でそれを見上げる巡礼の男。図上方の土色の岩肌は垂らし込みと点

苔の描法で描かれる。超縦長の構図を生かして滝の落下を強調している。

1307 滝見巡礼 (akumamoto.web.fc2.com より転載)

●肉筆画「月下獵夫」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。66.5×23.6 北斎館蔵)

※雁の群れが横切る白い満月の下、火縄銃を抱え、山刀を腰にさし、腰蓑をつけて鹿笛を吹く獵夫。

●肉筆画「雜画卷」(28 図。紙本着色一卷。天保十己亥ノ冬 画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。26.7×138.5 フリーア美術館蔵)

※様々な画材を散らして描いた巻物。

巻の右から「鯉節・ごまめ・水引」「河骨に鵠」「蓮」「松」「雪景・狗子」「波濤」「南瓜」「猪」「茄子に山葵」「釣狐」「白梅に塩鮭」「鯉に笹」「唐芋に水仙」「開き秋刀魚に瓶」「かさごに鰈」「河豚に大根」「海浜」「隅田川の紅葉」「李白觀瀑」「和鈇」「青白磁鉢に根葉」「蓮根にくわい・他」「猫に揚羽蝶」

「山芋に鰻」「瓢箪に鯰」「樹陰小屋」「氷上の狐」「寿老人に唐子」(「大尾」と書いた巻物を持つ)

●肉筆画「雁と歌仙」(紙本着色一幅。画狂老人北斎齡八十。印葛しか。中外産業株式会社：原安二郎コレクション蔵)



※火鉢を前にして、脇息に臂を掛け、顎に手をやり、遠くの雁の群れを眺めている歌仙。歌題を思案しているところか。

1308 雁と歌仙 (akumamoto.web.fc2.com より転載)

●肉筆画「美人牛之図」(着色一幅。八十翁卅老人筆。印葛しか。60.0×32.0 山本美術 HP による)

※柴木を屋根型に組んで背に乗せた牛の手綱を持って、煙管を使いながら立っている女の図。牛は墨絵風に描かれる。



●肉筆画「幽霊図」(画狂老人卅筆：以下不明。) ※所在不明でモノクロ写真が現存。80 歳の作品とされる(『北斎妖怪百景』京極夏彦 国書刊行会による) 灯籠に「南無阿弥陀仏」とあるが、北斎は日蓮を信奉しているので「南妙法蓮華経」とあるべきか。

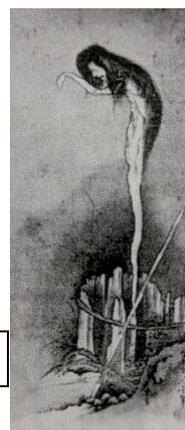
1309 幽霊図 (『北斎妖怪百景』より転載)

●肉筆画「幽霊図」(「うらめしや」とも) 無款。所蔵不明)。



※井戸から出て手を前に出している図。縦モノクロ画（「九十老人人叢筆・印：葛しか」）。巷間に「うらめしや」という北斎作品があると伝えられている図（島田賢太郎「台東区北斎研究会ニュース 2016/8」による）真偽不明。

幽霊図（うらめしや 個人蔵）



天保11(1840) 庚子 81 歳 百姓、総房旅客画狂老人人叢 筆・印：葛しか
前北斎改画狂老人人叢、画狂老人人叢筆 齡八十一、画狂老人人叢、画狂老人人叢、画狂老人人叢
之印、葛しか、富士の形、齡八十一、齡八十一歳：阿美与 (52)、
阿栄(43)

◇11月、阿片戦争。

◇11月14日（西暦）、クロード・モネ生（～1926）。

◇12月14日、谷文晁没(78)。

### 【馬琴失明するも『八犬伝』執筆に意欲】

◇曲亭馬琴、左目が更に悪化。夏には11行の細字から5行の大字にして、手探りで「八犬伝」の第九輯、45巻までを何とか書きあげる。11月には失明状態となって、「（略）いかにもせん術なければ、書案を退け筆を投捨て、ひとり嘆息のあまり、『ながらふるかひこそなけれ見えずなりし書巻川に猶わたる世は』とうち詠じて、炉に寄りてのみ居る程に（略）」という有様となった。息子宗伯の妻お路に代筆させるようになったが、路は文字を知らず、古典の素養も無いため、一つ一つ教えながらの作業となった。馬琴の『八犬伝』執筆の壮絶な様子は、曲亭馬琴「回外剩筆」に詳しい（岩波文庫『南総里見八犬伝』（十）巻末所収。p322～325）。

◇遠山景元（金四郎）、北町奉行に就任。

★房総方面へ旅行するか（「唐土名所之絵」の落款に、「総房旅客 画狂老人人叢 齡八十一 印之印」とある）。

★『誹風柳多留』167篇をもって終刊。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）

☆疵物とすると血の出るほど値きり 百姓（商品が疵物と知ると血の出るほどに値切る客）

●教訓本『絵入 和漢陰陽伝』2月。一冊。元禄2年（1689）藤井瀬斎筆の『大和為善録』の改題本。和漢人物の伝記教訓書。挿絵は片頁4図、両頁8図。前北斎改画狂老人人叢筆。藤井瀬斎著。奥付に書肆7名の最後に「芝神明前 岡田屋嘉兵衛」とある。22.8×16.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/フーリア美術館：ブリューナー・コレクション蔵。巻末に「天保十一年庚子春二月」とある。

※正月刊（西宮弥兵衛版）があるか。序文の末尾には「天保十一年春正月」とある。文政7年(1824)版、天保5年(1847)版もあるという。

### 【最後の一枚鳥瞰図】

●錦絵「唐土名所之絵」（横大大判一枚摺。「唐土一覽図」とも。総房旅客画狂老人卅  
 齡八十一印之印。総房旅客画狂老人卅齡八十一青雲堂（英屋文蔵）版。41.6×55.3 太  
 田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コ  
 レクション/北斎館/イエール大学美術館/東洋文庫蔵）

※袋（44.2×37.3 太田記念美術館蔵）には縦書きで「前北斎改画狂老人卅筆 印八十  
 式 唐土名所之絵 書林青雲堂発行」とある。島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美  
 術館蔵）

※「東海道名所一覽」（文政元年）、「総房一覽図」（文政元年～2）、「百橋一覽」  
 （文政6年）などの一枚鳥瞰図の最後の一枚といわれる。初めて国外の土地を描く。中国  
 全土と台湾の一部を俯瞰する。「彫師 江川仙太郎」の書き入れがある。

後の天保 14 年の版元の『世事百談』巻末広告に「北斎老人唐土名所之画 一枚 唐土  
 四百余州の山川名所をくハシ  
 く画き、彩色にてわかち、  
 見安からむれば、詩文ハさら  
 なり。漢楚三国志の軍談を讀  
 んでも、この地図をかたハラ  
 に置く時ハ、古戦場に至りて  
 軍ものがたりを聞くがごと  
 く、いささかも解セざること  
 なし」（句読点は筆者による）  
 とあり詩文や軍談を讀書する  
 者の便に供するためであった  
 という（『北斎クローズアップ  
 IV p 43』。旅行先の房総で  
 描いたとされる。



1311 唐土名所之絵（すみだ北斎美術館）

●団扇絵「鷹図」（この頃か。錦絵一枚。動物の団扇絵の最晩年の作。総房旅客前北斎改  
 画狂老人卅。印富士の形。判元不明。22.5×30.0 ギメ美術館/江戸東京博物館蔵）



※房総方面に旅した途中の絵か。北斎は天保 11 年  
 （1840）に房総方面に旅している。図は、団扇の形に  
 沿うように鷹が描かれる。背景は下から上に、濃い藍  
 から薄い藍のグラデーションとなっている。

1312 鷹（東京都江戸東京博物館）

●肉筆画「若衆文案図」（絹本着色一幅。画狂老人  
 卅筆齡八十一。印葛しか。73.3×32.7 氏家浮世絵  
 コレクション（鎌倉国宝館内）蔵）

※手紙の文案に思案する若衆の図。背後に風呂敷に包まれた数冊の冊子。手前には巻紙と

硯箱と小刀が置かれている。

●肉筆画「若衆図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十一。印葛しか。80.4×32.7 大英博物館蔵)

※「若衆文案図」と対で製作されたもの。床几に右足を左膝に足組をして腰掛けた若衆が、何かを思案している。賛に「春風春雨損嬌姿 露重幽花一両枝 何以佳人多所思 様注波帯涙倚床時 為雪船君題奴」とある。

注) 様：『2005 北斎展図録』では「様」としているが、「横」とも読める。

1313 左：若衆文案図(氏家コレクション) 右：若衆図(大英博物館)



●肉筆画「椿と鮭の切身図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十一。印葛しか。24.7×32.0 北斎館蔵)



※椿の切り花の茎に支えられるように鮭の切り身が一切れ置かれている。背景は描かれない。

1314 椿と鮭の切身図(北斎館)

●肉筆画「箒星を見る唐人図」(紙本着色一幅。

画狂老人卅筆・齡八十一歳。印葛しか。133.0×37.7 中右コレクション蔵)

※縦長図の左上に黄色がかった箒星が流れ、それを見上げている唐人が描かれる。

●肉筆画「海老に炭図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十一。印葛しか。21.3×29.0)

※籠状の炭置きの前に、口先を前にして長い糸状の髭を地に這わせた図。 1315 海老に炭図(ameblo.jp より)



●肉筆画「仲国と小督」(絹本着色二幅。各 100.5×35.7。右幅：画狂人北斎卅筆 印齡八十一歳。左幅：画狂人北斎卅筆 印 齡八十一)

1316 仲国と小督 (<https://tamegoro.exblog.jp/iv/list/>より)

※『平家物語』(巻第六)からの画題。高倉天皇が、妻となった平清盛の娘徳子より美貌の小督を愛し、天皇の子を産んだことで、清盛の怒りを買って、嵯峨野に隠れた小督。天皇から小督を探すよう命じられた仲国が嵯峨野で「想夫憐」の琴の音を耳にし(右幅図)、小督の存在を知った仲国が馬上のまま笛で琴に合わせた場面を描く(左幅図)。

●摺物「鮎」(横長判色摺。画狂老人記。印文不明。16.1×50.3 ベルリン東洋美術館蔵)

※二尾の鮎が水中に泳ぐ図の左側には俳諧が多く記されている。左端に「あめやすき(天保)十一子 中秋」とある。なお、摺物については『秘蔵浮世絵大観 12 ベルリン東洋美術館』の解説で永田生慈は次のように述べている。

「寛政末年(1789~1801)から、天保(1830~44)初年頃にわたり数多くの摺物を制作。天保5年以降は、ほとんど摺物はしていない。最晩年期の摺物は極めて少ない」(p247)



1317 鮎 (部分：ベルリン東洋美術館)

天保12(1841)	辛丑	82 歳	八十二翁画狂老人記、為一八十二叟記、百姓、北斎改葛飾
為一、前北斎為一老翁、八十二叟画狂老人記、画狂老人記、画狂老人、八十二老記、			
北斎改為一、画狂人北斎、北斎為一、試筆八十二翁記、画狂老人記筆齡八十二歳、			
画狂老人記齡八十二歳、八十二老記、葛飾北斎(文化3年の落款を引き継ぐ) 辰政、			
葛しか、一老人(「いちろうじん」か)、富士の形：阿栄(44)			

◇閏1月30日、大御所徳川家斎没(69)。

◇2月7日、曲亭馬琴の妻百没。『回外剩筆』(岩波文庫版『南総里見八犬伝 10 巻』所収)で自らの失明を告白。

※「(略)馬琴が八犬伝の著作中に失明し、苦心惨憺、漸く之を完成せるよしは、その回外剩筆に詳なり(略)」(『曲亭馬琴序文選』より。大妻女子大学文学部：高木元「近世後期小説受容史詩論—明治期の序文集妙文集をめぐって」所収)。

◇2月25日(西暦)、ピエール＝オーギュスト・ルノアール生(～1919)。

◇5月5日、水野忠邦による天保の改革始。書物問屋・地本問屋組合解散。

◇5月9日、高島秋帆、徳丸ヶ原で輸入砲の訓練。

◇10月10日、江戸中村座より出火。市村座など類焼。

◇10月11日、渡辺崋山自殺(49)。

◇10月25日、奢侈禁止令(儉約令)。

◇12月16日、江戸三座、浅草に移転。

◇シーボルト『日本』英訳・出版(仏訳は天保9年：1738)。

◇9月2日、伊藤博文生(～1909)。

◇月日不明、飯島虚心生(～1901)。

○8月、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』脱稿(息子宗伯妻お路による代筆。翌13年刊)。

★御膳海苔所注、中島平左衛門販売の柳亭種彦による浅草海苔の報条(広告)文に添えた絵(藍摺「海苔採り」の絵)にある北斎の署名：八十二翁画狂老人記筆。広告文は柳亭

種彦。

注) 御膳海苔所：将軍家や上野寛永寺に上納する新海苔を扱う所。中島平左衛門がそれを扱ったかは不明。

### 【阿栄、其の品行は頗正し、常に翁の傍にありて、孝養怠りなし】

★この頃の阿栄の様子（四方梅彦談。『葛飾北斎伝』 p 313）。年代は明確でない。

「又曰く、北斎翁は、もとより乱情にして、室内の掃除をきらふといへども、阿栄は、翁ほどの乱情にあらず、されば頭髪などは、常に乱だせしことなし、其の室内を掃除せざりしは、柱げて翁の意の従ひ居たるものゝごとし、しかして其の品行は頗正し、情夫などありたることを聞かざるなり、常に翁の傍にありて、孝養怠りなし、感賞すべきことなり」

### 【新編柳多留に序文を書く】

★『誹風柳多留』この年の廃刊に際し『新編柳多留』刊行（五世川柳風叟〈水谷緑亭〉編。嘉永2年：1849まで55編 錦耕堂、山口屋藤兵衛版）。北斎が序文を記す。

「柳樽の酒を好む人ハ 腹たゞず、泣きもせず、笑ひ上戸で、下戸にも（略） 為一八十二隻卍（百姓）」（宿六心配『謎解き北斎川柳』より）

★「百姓」も北斎の川柳号か。『葛飾北斎伝』（p139～140）には、天保5年頃のこととして、次のように記される。「（梅彦談）北斎翁 嘗て川柳風の狂句を好み、名を百姓といひ、秀吟頗る多し。実に葛飾連の棟梁たり」

この記事によれば、天保5年頃以前の『誹風柳多留』に載る「百姓」号による川柳は北斎のものか。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社 解釈は筆者）。

俳号：百姓・百性。

☆一ト足つつに売れて行蛸の足 百姓（蛸の足は一本ずつ売れていく。近松門左衛門「曾根崎心中」の「死に行く身をたとふれば～一足づつに消えて行く」を踏む）

☆地藏堂近所の餓鬼の遊び所 百姓（地藏堂は近所の子どもの遊び所になっている）

☆病上がり折ふし苦い口も吸ひ 百姓（病み上がりの欲望のまま、薬の苦さの残る口でロづけを求める）

☆我顔に泣てわかれて売る鏡 百姓（困窮し、鏡まで売らざるを得ない泣き顔が映っている）

☆薬ふる日にハ干鰯も毒ハなし 百姓（五月五日正午の雨で薬を作るとよく効くので、干鰯にも毒はない）

☆腮で追ふ蠅は天窓で又つるみ 百姓（性交過多で体力もなく顎で蠅を追うも、頭の上では蠅も交接する）

☆たがひに吸た生キ口をよせて泣く 百姓（口寄せの巫女が、生きている恋人の接吻の唇で泣いている）

☆身を捨て美しく売る貝屏風 百性（貝屏風は身を捨てた貝殻で美しく売る。遊女も同じだ）

●絵手本『名頭武者部類』（見返しに『源平名頭 絵本武者部類』。角書に「絵本早引」とある。中本一冊。北斎改葛飾為一筆。18.4×12.8。和泉屋市兵衛（甘泉堂）版、鶴屋金助連梓。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/立命館大学ARC蔵）奥付に「天保十二丑年秋新刻」とある。

※題材に関係した見出しの漢字によって絵柄が引き出せる武者図の絵手本。一部を色摺摸

刻した後摺の『絵本武者揃』(小本一冊 21丁 菊屋幸三郎版)や、一部摸刻した『武者尽絵本 全』(中本墨摺一冊。16丁 大坂・鹿嶋堂版)等がある。

1318 名頭武者部類 (すみだ北斎美術館)

●絵本『双錦画鑑』(一冊。前北斎為一老翁。西村屋与八、藤屋宗兵衛版。13.0×19.0 国立国会図書館蔵)

●地誌『花の十文 附 十論考』(一冊。

墨摺。橋樹園早苗述。龍遊子閑淵校。八十二叟画狂老人卍筆。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵)

※御殿山・南ノ海辺・西の山辺・小金井・滝ノ川・飛鳥山・上野・日暮里・吉原・隅田川などの周辺の地誌。北斎は「小金井の景」一図を描く。橋の上を人々が行き、その先に茅葺屋根の家が数件版下絵のように描かれる。他は北溪が描く。

●絵手本『為一漫画』(一冊。画狂老人筆。清光楼版)

※文政6年(1823)『今様櫛捻雛形』の「きせるの部」の装丁を变形して抜き出した改題本。奥付に「天保十二年補刻」とある。

●読本『絵本新田功臣録』前・後編(角書「矢口神靈」十冊。小枝繁作。葛飾北斎画。

印画狂人。岡田茂兵衛版 早稲田大学図書館/関西大学図書館蔵)

※『春宵奇譚 絵本玉壁落穂』(文化3年(1806)1月前編刊、文化5年(1808)1月後編刊)の改題再刊本。

●肉筆画「柳に鳥図」(絹本着色一幅。八十二叟画狂老人卍筆。

印葛しか。84.8×42.5 ポストン美術館蔵)

※柳の葉が靡く近くに、十四羽の鳥が一斉に飛んでいる様子が描かれる。画面下には、鳥の頭に噛みついていてる鳥がいる。

1319 柳に鳥図 (ポストン美術館)

●屏風画「扇面貼交屏風」(紙本墨画淡彩扇面。二曲一隻扇面貼交屏風。上弦49.3 下弦25.7×14.3 フリーア美術館蔵)

※第一図：蓮の葉に蛙図。北斎改為一筆。印辰政。

第二図：隠士図。画狂人北斎画。印辰政。

第三図：田舎の風景図。北斎為一筆。印一老人。

第四図：岩に帆船図。八十二老卍筆。印葛しか。

●肉筆画「大黒に大根図」(「見立児島高德図」とも。絹本着色一幅。画狂老人卍筆八十二歳 印葛しか。86.3×42.7 鎌倉国宝館：氏家コレクション)

※高德が後醍醐天皇に向けて桜の木に詩を書きつけた『太平記』の故事による着想。

※元弘3年(1332)3月、児島高德は隠岐に流される途中の後醍醐天皇を奪回せんと追いか



けたが果たせず、志だけでも告げようと天皇の宿所に忍びこみ、庭の桜の木の幹に中国越王勾踐の故事に習い十字の詩を書いたという。

「天莫空勾踐/時非無汎蠡」（天は春秋時代の越王・勾踐を見捨てなかつたように、後醍醐天皇をお見捨てにはなりません。必ず

汎蠡のような忠臣が現れてお助けすることでしょう） 1320 大黒に大根図（鎌倉国宝館：氏家コレクション）



●肉筆画「雲龍図」（1月。紙本着色一幅。試筆八十二翁卍。印葛しか。97.3×31.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※縦長の画面の上部に龍の顔を描く。図下に向かって身体が下がるが、途中の胴体は黒雲にまぎれて見えず、図下から尾の部分が巻き上がるように描かれる。黒雲が濃淡のグラデーションで描かれる。嘉永2年(1849)にも似た構図の「雲龍図」が描かれる。

1321 雲龍図（島根県立美術館）

●肉筆画「水草鷓鴣図」（着色一幅。画狂老人卍筆 八十二歳 印：葛しか 加島美術蔵）

※鷓鴣はクイナ科の水鳥。水草の側に立っている。

1322 水草鷓鴣図



●摺物「三囲の初霞」（1月。「三囲渡し舟」とも。紙本色摺。八十二翁卍筆。印富士の形。14.4×18.6 すみだ北斎美術館蔵）

※初霞の中、隅田川に松飾りをつけた舟が浮かび、対岸には松が茂る三囲神社が描かれる。

天保13(1842)	壬寅	83歳	八十三歳	八右衛門、三浦屋八右衛門、亀沢町三浦屋八右衛門、前北斎卍、前北斎為一、前北斎為一、画狂老人卍	八十三歳、画狂老人卍、八十三翁卍	印葛しか、之印、富士の形：阿栄(45)
------------	----	-----	------	--	------------------	---------------------

◇2月21日、富士講禁止（但し、江戸では92講あり）。

◇2月、為永春水（長次郎）の人情本の内容が淫らであるとして北町奉行遠山景元の取調べを受け、手鎖50日、家主のもとに監禁。版元の丁子屋平兵衛等七名も家主に監禁処分、過料五貫文（5000文＝約125,000円：1文＝25円で換算）。板木師三名も過料五貫文（約125,000円）。

◇2月、柳亭種彦（彦四郎）、『修紫田舎源氏』三十九編刊行後、絶版を命じられる（未完となる）。版元鶴屋喜右衛門は版木が没収・焼却される。種彦は6月に手鎖が解除されたが7月19日没（60歳、自殺か）。

【柳亭種彦、取り調べで北斎の所業を口外せず】

※種彦は一旦、赦免されたが再度、艶本『春情妓談 水揚帳』（歌川豊国画）に関し取調べを受けたり（三田村鳶魚説）、種彦の豪華な修紫楼（浅草堀田原：現蔵前3丁目）の新築（天保7年：1836）などで詰問（拷問）されたりして獄死したのではないか。その際北斎の阿蘭陀人に渡した絵のことや、北斎から譲られた西洋の品物なども詮議されたが、北斎については一切口外しなかったため、北斎は種彦に対しての負い目と、贖罪意識がその後の制作の視点となり、詮議が及ぶのを避けて小布施行きとなったという説もある（荒井勉『北斎の隠し絵』（p 99～101）。

◇5月15日、鈴木牧之没（73）。

◇6月4日、一枚刷り錦絵の禁止。出版取締令。人情本禁止。

◇役者絵、遊女絵禁止。

◇唄・浄瑠璃・三味線の女師匠の弟子取り禁止。

◇琉球使節来朝（将軍家慶即位の慶賀使）。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇江戸で岡場所（公的でない遊女屋）禁止令。

◇異国船打払令。薪水給与令。

◇アヘン戦争で清朝敗北。南京条約。

◇この年より地本絵草紙問屋の自主的改印から名主直接の検閲となる。

◇寺門静軒『江戸繁盛記』が風俗紊乱により、静軒は他家への仕官禁止となる。

### 【七代目市川団十郎、江戸十里四方処払】

◇七代目市川団十郎（改海老蔵）が、身分不相応な贅沢として、南町奉行所鳥居耀蔵により手鎖、家主預り処分、江戸十里四方処払となる。団十郎は信奉する成田山新勝寺に一年間蟄居し、成田屋七左衛門と改名。その後上方や九州の芝居小屋を巡業し、7年後に江戸に戻る（「資料館ノート」第117号 江東区深川江戸資料館）。

◇天保の改革により、昨年末から翌14年にかけて、中村座（日本橋葺屋町）、市村座（日本橋堺町）、森田座（木挽町5丁目）が200年程日本橋地区にあった芝居小屋が猿若1丁目から3丁目辺（現東京都台東区浅草6丁目辺）に移転した。

### 【1両が6貫500文となる】

◇8月5日、「銭相場公定に伴う物価引下げ令」が發布され、1両を6貫500文（6500文）と定められる。1両＝6500文×25円（筆者による想定価格）＝162,500円。両の価値の引き上げで、逆に銭（最下級の文）の価値を下げ、諸物価の引き下げを図った（参考。大石慎三郎「〈資料紹介〉天保13年8月”銭相場公定に伴う物価引下げ令“について」学習院大学経済論集4号 1966年）。

◇11月、浮世絵価格制限令「壹枚絵之儀ハ、已来粉色七八編摺を限、売直（値）段壹枚拾六文已上之品、可為無用」

※浮世絵の一枚絵に7・8色以上の彩色を禁止、小売り価格は1枚16文（約400円）以上を禁止とした。

○曲亭馬琴『南総里見八犬伝』刊行（完結。文化11年～天保12年まで28年間の労作）。

★この頃、本所亀沢町 榎馬場（榎馬場。現墨田区両国4-34-11。榎稻荷神社がある）の借家に住む（『葛飾北斎伝』p201）。榎馬場は本所回向院の門前であった。あるいは天保10年（1839）の81歳から弘化元年（1844）の85歳まで住んだか。（井上和雄『浮世絵師伝』p171 昭和6年 渡邊版画店〈『日本浮世絵博物館所蔵 大揃い北斎』北斎資料759所収））。

### 【榎馬場の仮託住まいの様子】

★弟子露木為一（孔彰）「北斎仮宅之図」による家居の様子スケッチ（北斎は炬燵を背にして布団を肩にかけ、筆をとって描いていて、その傍らで坐してそれを見ている阿栄の図。国立国会図書館蔵）。 1323 北斎仮宅之図（国立国会図書館蔵）。

※図の露木為一の書き込みには、「平常二人二語るに我者枇杷葉湯に反し/九月下旬より四月上旬迄巨燵を放るゝ事無しと如何なる人と面会なすといへとも放るゝことなし/画くにも又かけ倦く時は傍の枕を取りて眠る/覚れば又筆を取/夜着の袖は無益也とて不付候

本所亀沢町 はんの木馬場借宅の躰、老人長く住居故、御咄ニ忍がく

御物語残、御目通之進上可仕候

昼夜如斯なる故炭にてハ逆上なす故、炭団を用ゆ、然るゆへ風の湧こと、たとゆる二物なし、

画帖扇面之儀者堅く御断申候 三浦屋八右エ門

娘ゑい

為一百拜

角一疊分板敷二而、佐倉炭俵、土産物の桜餅の籠、鮎の竹の皮、物置ト掃溜と兼帯也（筆者注：同様である）

蜜柑箱ニ高祖像（筆者注：日蓮像注）ヲ安置す」とある。

注）日蓮像：北斎は日蓮宗を信仰していた。

### 【その部屋、物置と掃溜と、一葉なるが如し】

★同様の記述は露木為一談として次にも示される。

露木為一談「室内のさまは、いづれもあれはてゝ、翁が傍の杉戸には画帖、扇面之儀注は、堅く御断申候、三浦屋八右衛門とかきたる紙を貼りてあり。又阿栄の傍の柱には、蜜柑箱を少し高く釘づけになして、中には、日蓮の像を安置せり。火鉢の傍には、佐倉の炭俵、土産物の桜餅の籠、鮎の竹の皮など、取りちらし、物置と掃溜と、一葉なるが如し」（『葛飾北斎伝』所収p203。ルビは筆者による）。

注）扇面之儀：挨拶やお辞儀のこと。



### 【礼儀礼讓をなすことを好まず】

★柳亭梅彦談「北齋翁は、礼儀礼讓をなすを好まず、性頗淡泊にして、人に遇ふも、嘗首を下げたることなく、唯今日はといひ、イヤといふのみにて、時候の寒暖、身体の安否など、ながくと述べたることなく、又他より食物を買ひ来り、或は人より食物を贈らるゝも、これを他の器にうつすことなく、竹の皮、重箱を論ぜず、おのれの前に置き、箸にてはさむこともなさで、直につかみてこれを食ひ、食ひ尽して、重箱、竹の皮は其のまゝにすておくなり」と（『葛飾北齋伝』 p 204～205 ルビは筆者）。

★露木為一談「北齋翁は、外出のとき下駄をはくことなく雪駄もはかない。雨で道が悪いときは、草履をはき、晴れた時は麻裏草履をはく。歩く時は常に法華経普賢品の呪文「阿檀地 檀陀婆亭 檀陀婆亭」を唱え、他が目に入らない。余中人と会っても雑談することを厭う」（『葛飾北齋伝』 p 206～207 要約 ルビは筆者）。⇒弘化 3 年（1846）条参照。

### 【猫一疋も画くこと能はず 己れ及ばずとて自棄てんとする時は、即これ其の道の上達する時なり】

「露木氏曰く、余北齋翁の門に入り、画法を学びしが、一日阿栄にむかひ、嘆息して謂て曰く、運筆自在ならず、画工とならんを欲するも、蓋し能はざるなり。阿栄笑て曰く、我が父幼年より八十有余に至るまで、日々筆を採らざることなし。然るに過ぐる日、猶自腕をくみて、余は実に猫一疋も画くこと能はずとて、落涙し、自其画の意の如くならざるを嘆息せり。すべて画のみにあらず、己れ及ばずとて自棄てんとする時は、即これ其の道の上達する時なりと。翁傍にありて、実に然り、実に然るなりといへり」（『葛飾北齋伝』 p 217～218。ルビは筆者による）。

### 【読本挿絵の評判遠のくも、絵に於いては天下一品】

★人情本『縁結娼色糸』（天保十三年。松亭金水著。歌川貞重画）の三編・卷之上・第十四回に、娘の祝言の祝いに帷子を持ってきた角助と娘の母親の対話の場面がある。

母「オヤぐ、綺麗で御座いますねえ。その画の良い事」

角助「夫りやア、為一老人の下絵だから。」

母「成程、左様で御座いませう。彼の人にも近頃年が寄つた所為か、些と評判が遠のきましたが、私共の若い時分には、読本と云へば、北齋の画に限つた様で、御座いました。」

角助「夫りやア、絵に於ては天下絶品さ。古今に一人とは、彼の人計で御座いやせう。」

※北齋は文化 9 年（1812）以来、読本挿絵の数が減少し始め、特に文化 13 年（1816）以降は、ほとんど読本挿絵に関わっておらず、83 歳の北齋が別境地を目指していたことと関係なく、一般の読本読者は彼をこのように見ていたのであろう。

★この年、信州の豪商・高井鴻山が江戸から信州に帰る。

### 【小布施に行く 八の字のふんばり強し夏の富士】

★8 月出発。9 月、北齋は高井鴻山（37 歳）に招かれ小布施に行く。「日新除魔図」の 9 月 21 日図の一枚に「獅子 書きはじめたる心おか獅子」の脇文の入ったものあるという（荒井勉『新訳 北齋伝 世界に挑んだ絵師』（p 124）ので、この頃には高井鴻山宅に

居住して、「日新除魔図」を書きはじめたと思われる。

★時代は特定できないが、旅の途中で「八の字のふんばり強し夏の富士」と詠んだという（『葛飾北斎伝』 p134）。

### 【小布施訪問はいつか】

「天保十三年秋より正月を越して翌三月まで滞在したことは、八十三歳銘記の生首の図と秋草の図、並びに八十三、四歳と歳書きのある図が、小布施の諸家に分れて保存されて居ることによる」（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊。p18）。

但し『葛飾北斎伝』では、「天保二三年の頃、北斎翁信州高井郡小布施村に到り、門人高井三九郎（筆者注：高井鴻山の名）の家に寓し、居ること一年（略）」（同p134）とある。鈴木重三の脚注では、「この、高井鴻山宅訪問推定年時は、このころ鴻山は京都に居るので、誤りとされる」としている。

一方で、京都遊学中であっても、天保2年の岩松院再建の世話人の棟札に高井の名があるとところから、この時に高井が帰郷していて、北斎の突然の訪問を受けたとする見方もあるが、本稿では一応、通説の天保13年訪問説を採っておく。以後、三度小布施に往く。

### 【小布施訪問の目的は？】

文化12年（1815）に焼失し天保2年（1830）に再建された岩松院（高井家菩提寺）の鏡間天井に大鳳凰（八方睨み図。5.5m×6.3m。150面の彩色。全面に4400枚の金箔。現在価格約5千～6千万円をかける予定）を描くこと、その手始めに東町の祭用の屋台を改造して、その天井に鳳凰と龍の二面を描き、次に上町の祭のための屋台天井に波濤の二面を描く等の案を鴻山が提示した。そのため、お栄を連れて来ることを鴻山は望んだ。

### 【高井鴻山の北斎の印象】

★一方で、北斎が高井鴻山を尋ねた様子を、鴻山自身が「卍老人予家ニ寓スルコト半歳余 一日別レヲ告ゲズシテ去ル」という表題の漢詩によって伝えている。以下の訓下し文は筆者による。

「乗ルモ招ニ由ラズ/去ルモ別レヲ告ゲズ/去来吾ガ適ニ適フ/敢ヘテ掎挈受ケズ/敖然八十有余年/併呑手ニ在リテ心ノママ欲スル所ナリ/人鬼現シ羽毛簇マル/技ハ群ヲ抜キ/富貴坐シテ致スベシ/七上還タ八下/何為ゾ窮頼に至ル/貧困富貴ハ舍テ論ゼズ/唯物ヲ写シテ物未ダ神ナラザルヲ/君見ズ冷冷ノ冬ヲ作ス者/又能ク翁翁ノ夏ヲ成ス/冷翁敢ヘテ世ニ向カヒテ請ハズ/只是丹青便ハチ命ト為ス/工夫君ノ如キハ能ク幾許ゾ/骨格ノ精今古ニ絶ス/鎖骨新タニ新面目ヲ開キ/洗シ旧習ヲ一人ノ睹ルヲ快クス/筆力年ト与ニ老ヒテ益強ク/巨障大壁ノ氣汪汪タリ/氣汪汪トシテ雲霄ヲ衝キ/翼ヲ博ツ九万ノ遥ナルヲ厭ハズ/秋風個ノ雲煙ヲ留メ去ル/描クモ未ダ乾ヲ成サズ染未ダ消エズ」

※鴻山記念館に掲示された訳文

「卍老人は、我が家に半年ほど/ある日、別れも告げずに立ち去った/卍老人（＝北斎）は、招いたわけではないのにふらりとやってくる/立ち去るときも、何も言い残しては行かな

かった。/来る時も立ち去る時も、自分の気持ちに従う。/引き留めても、それに甘んじることはない。/自分の（心の）思うままに八十余年生きてきたのだ。/卍老人は、心に浮かんだものを描き出す手を持ち/羽毛に覆われた人鬼が次々に描かれる。/その技術は群を抜いている。/富も名声も座っていて招き寄せている。/江戸へ戻っては、また旅に出る。/何をしようと疲れるということを知らない。/貧乏、富、名声など全く問題にしない。/絵を描いては（その技が）いまだ神の域に達しないことだけを憂いている。/寒く辛い冬にあっても作品を描くことのできる者は/夏の暑い盛りにあってもまた同様に過ごせるということなのだろうか。/寒くも暑くも（富や名声を得ようが得まいが）世間に媚びない。/ただひたすらに描くことが、己の使命と思っている。/君（=北斎）の、絵を描く才能や創造力は、はかりしれない。/（絵の）骨組みの緻密さは、これまでに見たこともない。/鎖の輪のように連なるその骨組みは、真に新たな作品の境地を開く。/これまでの慣習を洗い流した絵は見る人を心地よくさせる。/年をとり老いてゆくに従って、その筆の力はますます強くなってゆく。/（行く手に）巨大な壁が立ちはだかっても、創作意欲は満ち満ちている。/その気迫は、雲をつきぬけて空に駆け上がってゆくほどだ。/翼を羽ばたかせ九万里を飛ぶことだって厭わない。/秋風（=北斎）は、色鮮やかな雲煙（=作品）を残して吹き去った。/描いた画はいまだ水々しく、染めた色はいまだ色あせない」（括弧内の補筆は筆者による）

★「鴻山先生の詩文や小布施の伝説によると、北斎が小布施に最初に来た時は、全く突然であったらしい。前ぶれの約束もなく、全く突然に高井家の門前に現れて鴻山先生を驚かせたらしく、法被姿に麻裏草履、長い杖一本、娘のお榮を連れていない単身であった」（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊。p5）。これは天保 2 年のこととする見方がある。⇒ p 721 参照。

★鴻山宅（現長野県高井郡小布施町大字小布施805-1 「北斎館」の近く）では、北斎のために本宅に隣接して、近くの古民家を碧漪軒という仕事場に作り与えたと伝えられるが、実際は鴻山の祖父が建てた儻然楼の一部が碧漪軒であったともいわれる。

### 【小布施までの道のり】

★小布施までは約 240 kmで、徒歩で 5・6 日程度と思われる。旧中山道の日本橋、板橋、浦和、大宮、桶川、熊谷、倉賀野、安中、松井田、碓井峠、軽井沢、沓掛を通り、沓掛道（現在の県道 235 号線）に入り、大笹街道（現在の県道 406 号線）の大笹、旧鳥居峠を越し、仁礼（現須坂市）を経て、須坂から北国街道（現在の県道 403 号線）に出て小布施に至るルートが考えられる。

あるいは、小名木川から船に乗り、行徳から江戸川に入り、そのまま利根川を遡り、高崎を通る鳥川に入って倉賀野宿に出、そこから徒歩・駕籠・馬などで中山道、大笹街道、北国街道に行くこともある。いずれにしても北斎の年齢を思えば大変な旅である。

### 【北斎の自画像】

●墨絵「八十三歳自画像」（絵入りの手紙。紙本墨絵。八十三歳八右衛門。印卍 26.9

×16.9 オランダ国立民族学博物館蔵)

※北斎が 41・2 歳の頃描いた作品への質問に対する自画像入り返信文。

「扱申上候、此巻中に有之候下画者、老人四十一二歳之此之画にて、あまつさへ亦うつしの品も多相見へ申候中に只今になり校合もいたし候ハ者、よろしからんと品も一二品者相見へ申候、其余者已前みしゆくの業、御用捨之上、御一笑可被下候 八十三歳八右衛門 右申上候、以上 (印)」 (句読点・ルビは筆者による)

1324 八十三歳自画像 (オランダ国立民族学博物館)



●肉筆画「老人像」 (この頃か。紙本着色一枚。無款。



11.0×14.0 オランダ国立民族学博物館蔵)

1324 老人像 (オランダ国立民族学博物館)

※「八十三歳自画像」と似ているので、83

歳の自画像ともいわれている。図の何カ所に崇

印が押されているので、あるいは崇山房 (小林新兵衛) と関わりのあった絵とも思われる。

### 【北斎自画像とアゴの四角ナ女】

★亀沢町三浦屋八右衛門 (印葛しか) の署名のある書簡に北斎自身と阿栄の肖像画あり。ここに阿栄を「腮の四角ナ女」と記している (『もっと知りたい葛飾北斎』 p69)。

#### 【朝日新聞 1989・9・2 朝刊の記事】

〈目は小さく、鼻が大きく、もじゃもじゃの白髪——。その容姿が様々に描かれている江戸の浮世絵師、葛飾北斎 (一七六〇—一八四九) が晩年、自分と娘の肖像を描き、風ぼうの特徴までつづっていた手紙を、東京都内の収集家が所蔵していることがわかった。画料を受け取りに行く人物が相手にわかるように、と送った手紙で、ちやめっ気もうかがえる。北斎研究家の伊藤めぐみさんは『面長で厳しい顔つき』という従来のイメージを覆すもので、好々爺然としたイメージで描かれている」と話している。手紙は当時、亀沢町 (東京都墨田区) に住んで三浦屋八右衛門と名乗っていた北斎が、「何屋何兵衛」にあてた画料の受取状。

「一金何両ト何拾何匁石は画料として慥ニ拝納仕候為念 かくのごとく御座候以上」としたためている。その手紙の最後に、自分の横顔と、娘お栄の正面からの肖像を描き、「眼の小キ鼻之大き成白髪之モジャ くと致候親父か腮の四角ナ女」と二人の特徴を述べて、どちらかがお金を取りに行く、などと結んでいる。お金の額や相手の名を特定しないまま出している受取状で、これからお金を取りに行くという内容などから、北斎は絵を描かずにお金を無心した可能性もあるとみられている。



1326 「北斎と顎の四角ナ女」(朝日新聞)より転載

手紙は、長野県小布施町で見つかったことが研究者の間で知られていたが、現物は行方知れずになっていた。業者を通じて数年前に東京都内の収集家の手に収まったという。

※永田生慈は、「三浦屋八右衛門」と名乗っていることなどから、北斎 80 歳後半に認められたものとしている(『新北斎展図録』p 342)。

※他の自画像として、主に次の絵が知られている。

★『間女畑』(寛政 4 年頃) 口絵見返しの像：机に伏して夢を見ている図。最も早い自画像とされる。⇒寛政 4 年 (1792) 条参照。

★『竈将軍勘略之巻』(寛政 12 年：1800)：下巻最終ページの像。「時太郎可候画作」の記載があり、巻物の置かれた文机の前に座り、羽織を着て両手をつき挨拶をする図。⇒寛政 12 年 (1800) 条参照。

★「版元嵩山房(小林新兵衛)宛書簡」(天保 6 年 2 月。彫師江川留吉を使うように依頼した手紙)にある像。両手に一本ずつ杖をつき、尻端折りをして歩く姿(飯島虚心『葛飾北斎伝』p 145)。⇒天保 6 年 (1835) 条参照。

★「版元嵩山房(小林新兵衛)宛書簡」(嵩山房が百人一首の絵を依頼したときに送った手紙)にある図。

布団を頭から被り、尿瓶の前にしゃがむ姿を描く。⇒天保 6 年 (1835) 条参照。

★溪斎英泉による「為一翁(北斎)像」。(天保末期から弘化 2 年頃。26.3×18.6)

1327 『戯作者考補遺』所収「為一」像(慶応義塾図書館)

※木村黙老『戯作者考補遺』所収された英泉による北斎像を、尾形月耕が写したと思われる絵が『新增補浮世絵類考』に挿入されている。明治期の写本では北斎の辞世が描き込まれている(慶応義塾図書館蔵)。北斎 80 歳代中ごろの肖像として真に近いといわれる。図は、羽織を着て両手を結んで膝の上に置いて座る像。いくつかの複製があり、着物に反転模様のないものもある



★「杖を突いた北斎像：フェノロサ解説カタログの図」(37.2×23.7 ギメ美術館蔵)

※格子模様の袖無羽織を着て両手で杖を支え立っている全身像。80 歳ころの北斎といわれるが、年代は確定できない(天保 13~15 か)。よく知られた画像である。

井上和雄『北斎』(高見澤木版社出版所 昭和 7 年)では、天保末頃の応為の画としている(P32)。小林文七蔵版(小林文七が木版で摺起こしたもの)には「明治三十三年八月製」とあり、羽織が無地なもので素描である(フリーア美術館蔵)。

※小林文七が本図をパリのコレクター、アンリヴェヴェールに見せ、ヴェヴェールが美術商のジークフリート・ビングにこのことを話したところ、ビングがすでに持っているそっくりな絵図をヴェヴェールに譲り、ヴェヴェールは同図の真贋の鑑定を小林文七に依頼したところ、文七は、これは北斎の直筆であり、自分が1900年に版画に起こした原画であると話したという。文七が作った複製は多数存在している。また、無地の着物の像が原画であろうとしている。(以上『北斎一富士を超えて』展図録 p 248 による)。



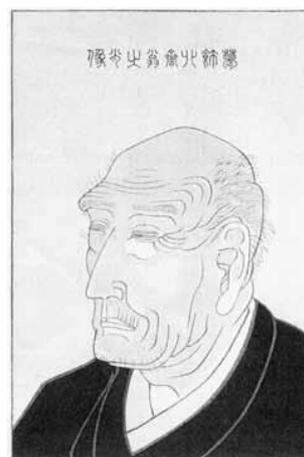
1328 フェノロサ解説カタログの図

★「『葛飾北斎伝』(飯島虚心)口絵の北斎像」(p 23)。

『葛飾北斎伝』解説で鈴木重三は次の様に述べている。

「本書でなお問題視されるものに、巻頭近くに挿入された『葛飾北斎翁の肖像』(本書二三頁)の信憑性に関する件がある。従来、一部の論者を除いては、ほとんど無批判に、代表的な北斎肖像として、ゴンクール『北斎』(Hokusai, 1986) 筆者注や、フェノロサ解説付の北斎の肉筆展の目録 *Catalogue of the Exhibition of Painting of Hokusai* (小林文七刊、明治三四年)に転載されるなど、広く普及、紹介されて来たものであるが、本稿の「構成と内容」のところでも少しふれたように、すでに『北斎伝』刊行時点で、著者虚心自身が巻下九丁裏(本書一九九頁八行目)に割注で、「巻首にある翁の像は、白井(筆者注：白井孝義)、本間(筆者注：本間耕素)、小林(筆者注：小林文七)諸氏のすゝめによりて、掲げたるのみ注」と、責任回避ともとれる口調で、掲載をためらった気配を見せている。(略)いずれにしても、現時点でこの図を真像と断定することは留保すべきである」(岩波文庫版 P393~395)」とある。

1329 『葛飾北斎伝』口絵に掲載されている北斎像



図は、眼窩が突き出て、耳が大きく口を結んでいる像。後頭部にまばらな毛髪がある。

注：(ゴンクール『HOKUSAI』の巻頭に載せられた北斎の肖像の下に「Peint Par SA fille Oyei」とあり、お栄の画としている。

※平成6年(1994)11月11日読売新聞夕刊記事では「北斎どんな顔だった？」と題し、以下のように記載している。

〈一般的に知られている北斎の肖像は、ほお骨が張った長い顔で、切れ長の厳しい目が特徴だ(筆者注：本図を指す)。北斎が死んで四十四年後の明治二十六年(1893年)、浮世絵研究家の飯島虚心がまとめた日本で初めての北斎研究書「葛飾北斎伝」(蓬枢閣)に載

った。三年後、フランス人ゴンクールが出版した「北斎」にも転載され、世界に広まった。

虚心の「北斎伝」出版から七年後、この肖像は東京・上野で開かれた北斎展に出品された。ところが、虚心は別人を装って「局外閑人」のペンネームで、読売新聞の批評欄に次のような批判記事を載せた。

「このごとき怪しき肖像を出せるは、これ世人を欺くに似たり、また北斎翁をあなどるに似たり」/翁死してわずかに四十余年の今日、その顔を知れる人々もなお現存すれば、これを掲ぐるは、はなはだ快からず」

さらに虚心は「事実の精確を主として著せるこの書も、それがためにあるいは信を失うに至らんとて、痛く拒みたれども、聴かず、ついに巻頭に掲ぐることとなりたるなり、遺憾の至りというべし」と告白している（筆者注：仮名遣いは記事のまま）。出版元の浅草の浮世絵商・小林文七の意向で、肖像を載せざるを得なかったのを悔やんでいた、とみられる。

この肖像の原図は現存しておらず、由来もはっきりしない。だが、文七は北斎展の年、この肖像とうり二つの「北斎像」（筆者注：フェノロサ解説カタログの図を指す）を摺（す）り物にした。

虚心の没後、「局外閑人」は虚心本人だったことが公になった。だが、北斎に関するこれまでの研究で、先の新聞記事についてはほとんど触れられていない

伊藤めぐみ（筆者注：当時、墨田区北斎館解説準備室〈現すみだ北斎美術館〉担当の学芸員）はこの記事に基づいて「虚心が『北斎伝』の肖像の件で悔やんでいる気持ちが痛いほど伝わってくる、文七が虚心を利用した可能性も高い」と分析している（『北斎研究』16号）

肖像画については「葛飾北斎の肖像画における自己演出」（山本陽子『明星大学研究紀要—人文学部 第52号』2016年3月）の論考があるので参照されたい。

●合巻『<sup>「じらいやどてうけのもののがたり</sup>児雷也豪傑譚』（1月。全42編中の四編。美図垣笑顔作。前北斎卅筆。和泉屋<sup>いづみや</sup>市兵衛版。17.8×12.0 早稲田大学図書館/専修大学向井信夫文庫蔵）

※天保10年（1839）から明治元年（1868）まで書き継がれた本。挿絵は歌川国貞。北斎は袋に<sup>やまだほうぎょく</sup>山田抱玉・<sup>うたがわくにさだ</sup>歌川国貞とともに合筆する。

●合巻『<sup>おしどりものがたり</sup>鴛鴦譚』（角書き「<sup>こんらいひながた</sup>婚礼雛形」。版心には「<sup>どりのものがたり</sup>をし鳥物語」とある。1月。二冊。山東京伝作。柳亭応需雪景写前北斎為一。印之印。鶴屋喜衛門版。17.6×11.9 名古屋市蓬左文庫蔵）

※北斎最後の合巻挿絵となるが、天保4年（1833）の合巻『<sup>しゅっせやくこまんのでん</sup>出世奴小方之伝』の表紙絵をそのまま流用しているため、天保13年に描いたものではない。

●絵手本『<sup>いっぴつえほん</sup>一筆絵本』（3月。文政6年『<sup>でんしんかいしゅ</sup>伝神開手 <sup>いっぴつがふ</sup>一筆画譜』の縮模再刻版）

※『北斎の絵手本 二』（永田生慈 岩崎美術社）によれば、「『<sup>いっぴつがふ</sup>一筆画譜』の改題縮刷版（中本）一冊、全24丁」。見返しに「北斎先生画 <sup>いっぴつえほん</sup>一筆絵本 <sup>とうとぶんこうどうし</sup>東都文江堂梓」とあり、奥付に「天保十三 <sup>みずのえとら</sup>壬寅年三月新刻 <sup>えどばくろちようよしだ</sup>江戸馬喰町吉田屋文三郎 <sup>かぬいちょうふじやそうべ</sup>同亀井町藤屋宗兵衛

同南紺屋町三河屋甚助」とある。

### 【北斎作品の重要文化財指定第3号・孫なる悪魔を払う「日新除魔図」】

●肉筆画「日新除魔図」（紙本墨絵 10 図。各 32.0×23.0 北斎館蔵）

現存作品から、「獅子の図」を、この年の 11 月 28 日から本所榎馬場で描かれていて（久保田一洋氏『北斎娘 応為栄女集』p73 による）、小布施でも翌 14 年 12 月 29 日まで、全 219 図を（国華社『葛飾北斎 日新除魔帖』（村山旬吾編。明治 40 年 10 月。国立国会図書館デジタルコレクション。p7）日課として描いたと思われる。この 219 図は松代藩士・宮本慎助が所有していた。⇒弘化 4 年（1847）条参照。

※この「獅子の図」は、いわゆる「日新除魔」と呼ばれ、高井鴻山が保管していたものを、北斎とお栄が小布施を訪ねたときに、高井鴻山から渡され、弘化 4 年（1847）に、浅草田町の北斎宅で、江戸にやってき宮本慎助に譲られたとされる（金田巧子『栗の詩』44 号の記事を、神山典士『知られざる北斎』（p222）で紹介）。

※「HOKUSAI 新聞」（2016 GW 号 VOL28 北斎館）でも同内容の記事となっている。

「『日新除魔』（紙本墨絵。各図 32×23）。唐獅子や獅子舞の一連の絵は世界中に 200 以上あるという。天保 13 年（1842）～天保 14 年（1843）にかけて日課として描いたものをその都度軒下に捨てたものをお栄や弟子が拾い集め、弘化 4 年（1847）に「日新除魔」と名づけ、松代藩士・宮本慎助に与える」。

※露木為一談「北斎翁、本所榎馬場に住せし頃、毎朝小さき紙に獅子を画き、まろめて家の外に捨てたり。或人偶拾ひ取りて披きみれば、獅子の画にして、行筆軽快、尋常にあらず、より翁に就き賛を請ふ。翁即筆を採りて、『年の暮さてもいそがし、さはがし』。或人更に翁に問ふ、何の故に毎朝獅子を画きて捨て給ふや。翁の曰く、『これ我が孫なる悪魔を払ふ禁呪なり』と」（『葛飾北斎伝』p232 ルビは筆者による）。

※孫は天保 8 年（1837）に没したと推定されるが、あるいは存命であったか。または没後も尻拭いに追われていたのか不明。

※「国宝・重要文化財（美術工芸品）の指定等について 平成 15 年 3 月 20 日 文化庁の文部科学大臣への答申」によりこの年（2003 年）5 月 29 日「紙本墨画日新除魔図」（219 枚）として重要文化財に指定された。答申時の所有者は「坂本安子 京都府京都市左京区修学院関根坊町8-2」となっている。現在、九州国立博物館蔵。

### 【文化庁の「国指定文化財等データベース」の記事】

「（『二美人図』『潮干狩図』の重要文化財作品に比べて）これに対して、日新除魔図は注文制作でも画稿でもなく私的な作画である点で、他と区別される珍しい作例である。

多作で知られる北斎には、版画はいうに及ばず、肉筆画も多く遺存しているが、国内には画稿類はさほど多くは知られていない。いわんや一つの主題をかくも多様かつ継続的に描き続けた例は他に見出し難い。

本図は北斎の八四歳（筆者注：83 歳の誤りか）の天保十三年（一八四二）から翌十四年にかけて、毎朝日課として描かれたもので、さまざまな姿態の獅子を伸び伸びとした筆

致で描いた約一八〇枚の獅子図と、約四〇枚の獅子舞などの人物図からなる。

本画帖に綴じ込まれていた北斎の自序、宮本仲氏によって『先考遺墨』と題された、父宮本慎助氏の記録、仲氏による画帖跋文によれば、北斎は弘化四年（一八四七）に本図を慎助氏に与えている。当初の形態は北斎の自序に毎朝描き捨てたというように、綴られてはいなかったと思われるが、『先考遺墨』によればこれを得た宮本慎助氏が仮綴じとした段階があり、画帖跋文には仲氏の時代に画帖としたことが記されている。

画帖装となる前に若干散逸したものがあろうだが、明治三十九年（一九〇六）に紹介された時点で二十九枚がまとまって宮本家に襲蔵されていた。注文制作に供する目的ではないため通常は保存しないはずのものが散逸を免れ、二〇〇枚を超える数量で一括されて今日まで伝えられたことはまことに稀有な事例であるといえよう。（略）

本図は北斎の豊かな創造力のあふれ出るさまをそのまま紙上にとどめた貴重な証左として一括して保存されるべきものである」

※一方で、「獅子の図」は小布施滞在中（天保13年〈1842〉9月～天保14年〈1843〉9月）に鴻山の別宅で日課として描き、200枚程を宮本慎助に渡したものだという説あり（荒井勉『北斎の隠し絵』p61 AA出版）。

※北斎は、「獅子の図」の他の一冊を松代藩家老・小山田老岐にも譲っていた。宮本慎助の絵を見て北斎に依頼したものという（荒井勉『北斎の隠し絵』p63 AA出版）。

※他に、晩年に弟子の本間北曜に与えた「日新除魔」（年代不明。10/10、10/11、10/23、10/24、10/25、11/5、11/13、11/18、11/25の9図。酒田の本間家蔵本）の獅子画があるという（『北斎館肉筆画大図鑑』による）。但し、10/26図が記載されていないので、それを加えれば計10図である。

注：嘉永元年（1848）に、酒田から江戸に出た本間北曜は6月5日と8日に北斎に会い、8日には「認物」（贈り物）を貰っている。このとき北斎から日新除魔図10図持ち帰っているとしている（佐藤七郎「北曜の『旅日記』と北斎」（昭和53年11月8日「信濃毎日新聞」掲載記事より）。この10図は、現在北斎館所蔵。



1330 霜月十八日図

●扇面画「秋草扇面」（「秋草」「秋の七草」とも。紙本扇面淡彩。画狂老人卅筆齡八十三。印葛しか。23.3×50.5 北斎館蔵）

※秋の七草を墨で葉を描き、花のみ着色した図。小布施で描いたもの。これにより北斎が天保13年に小布施を訪れたことが分かる。



1331 秋草扇面（北斎館）

●肉筆画「渡舟図」(「とせんず」と読むか。「富士遠望図」とも。絹本着色一面。もと掛軸。画狂老人卅筆 齢八十三歳。印葛しか。84.8×42.2 フリーア美術館蔵)

※客を乗せた舟首の船頭が竿を差し、船尾の船頭が腰を屈めて舵をとっている、舟の反りと波の反りが一致している。中景に樹木繁る中に民家が描かれ、遠景に富士が聳える。

●肉筆画「拷問図」(画狂老人卅筆。印葛しか。72.0×36.5。松本の日本浮世絵博物館で発見)

※この年獄門死した柳亭種彦を念頭おいて描いたものか(荒井勉『北斎の隠し絵』P107~110)。 1332 拷問図(日本浮世絵博物館)

●肉筆画「鬼を打つ鐘馗」(絹本着色一面。もと掛幅。画狂老人卅筆 齢八十三歳。印葛しか。85.2×42.2 フリーア美術館蔵)

※棍棒を振りあげ、反りかえった鬼を打つ鐘馗。

●肉筆画「生首図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆 齢八十三。27.4×43.1 摘水軒記念文化振興財団蔵：千葉市美術館寄託)

※竹竿に縄で括りつけられているように見える生首。ざんばら髪が首全体に巻きついていて、



歯を食いしばり、半眼の目つきで睨んでいる。右の頬には死斑が現れている。竹竿には柄杓が添えられている。打ち首の際の刀の血を洗ったのに用いたものか。他に文化7年~11年(1810~14)頃と嘉永元年(1848)にも「生首図」がある。

1333 生首図(摘水軒記念文化振興財団：千葉市美術館寄託)

●絵暦「門松」(1月。「門松に注連縄」とも。紙本色摺。八十三翁卅筆。印富士の形。13.7×18.6。すみだ北斎美術館蔵)

※図の左に門松と正月飾りをつけた注連縄が描かれる。



天保14(1843)	癸卯	84歳	三浦屋八右衛門、八十四叟新柳樽卅誌、葛飾北斎、
前北斎卅翁、葛飾卅老人八右衛門、東都北斎卅翁、葛飾の老人八十四老卅なり、			
八十四老卅、八十七老志卅、齢八十四歳画狂老人卅、印葛しか、富士の形：阿栄(46)			

◇1月28日、長谷川雪旦没(66)。

◇3月27日、香川景樹没(76)。

◇閏9月、水野忠邦失脚。

◇閏9月11日、平田篤胤没(68)。

◇12月22日、為永春水没(54。深酒、神経症。自殺か)。

◇12月28日、江戸鍛冶橋より出火。木挽町、築地も類焼。

◇上海開港。上海はイギリス租界となる。

◇この頃、江戸で稻荷ずしが作られるようになる。

◇安永5年(1776)以来中断していた将軍の日光社参が復活する。

◇歌川国芳「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」が天保改革批判として評判となるも、版元が版木を削る。

### 【浮世絵一枚 20文～30文】

◇天保末年頃の浮世絵は一作品およそ20～30文(現在の500円～750円位)で、初摺で200枚、ベストセラーで2000枚程度の刊行といわれる。

★この年、『北斎漫画』六編がパリ国立図書館の版画室に収蔵される(2017『北斎一富士を超えて』図録所収、ティモシー・クラーク「逆順で語る晩年の北斎」p28)。

### 【転居60回】

★本年まで転居60回といわれる。

★3月江戸に戻る。小布施から江戸へ帰る際、高井鴻山の別宅「碧瀟軒」での一人だけの生活では不便なので娘のお栄を連れてやがて小布施に戻るとのことであったが、なかなか小布施に戻って来ないので、9月には是非来るよう督促した鴻山に対する4月21日付の北斎の返信。

「(略)当年九月発足仕兼候へは、来三月ニ御座候。先達而、被仰聞候は四両金も入り可申与被仰聞得共、弥七様被申候は貳両ニて事足り可申と被申候。数々存寄も御座候得とも、兎角は御地へ参り候。而之上之御断ニ後座候得は、勘弁仕候。而之上亦々後便ニ可申上候。何連参り候ニは相違無之候。両人之身分は宜敷御取斗ヒ可被下候。恐々四月廿一日 三浦屋八右エ門 高井三九郎様 玉机下九拜」(天保14年4月21日 高井鴻山宛書簡。句読点・ルビは筆者)

※同書簡にある「四両」「二両」はお栄の件で金銭で処理する事を指すと思われるが、『北斎大鳳凰図』(岩松院。平成15年)では次のように解説している。

「九月にはとても行けません。それというのは連れて行く筈であった娘お栄の旅行につき、親戚のもので反対をし、それを訴えるとまで強がっている。お金をやって処置することもできるが、あまりにも口惜しい。何とか処置して、来年三月には、お栄ともども必ず参上するから、親子二人の身の上よろしく頼みます—こういう北斎の手紙です」(p6～7)

お栄の旅行手形の取得に手間取っているという見方もある。

### 【阿栄の「関羽図」松代にあり】

※小布施からの帰りに松代に寄った時のエピソードが荒井勉『北斎の隠し絵』に紹介されている。

「松代の郷土史家、高橋霊峰談『北斎の娘のお栄の作品が、真田家にはありました。『関羽図』といって、碁を打ちながら、関羽が腕の手術をしている場面です。山寺常山という人の家には、北斎が滞在した話が伝わっています。小布施からの帰り道に、北斎が常山の家に宿泊していた時、小布施の高井家から使いがやってきたそうです。使いの者が、謝礼金をたくさん持参し、北斎に差し出しました。でも北斎は、自分の取り分だけ手もとに置き、残りを使いの人に返したそうです。これを見ていた山寺常山は、北斎の無欲な様

子に感心し、この話が山寺家に代々伝えられてきています』」  
(p 150)

ここでいうお栄の図は「関羽割臂図」(絹本着色一幅。應為栄女筆。印葛しか。140.2×68.2) のことである。印号の「葛しか」の形は北斎が天保 14 年から弘化元年(1844)頃のものに似ているという考証もある(久保田一洋『北斎娘 應為栄女集』p 28)ので、その方印を使ったとすれば本図はこの頃の作品ということになる。但し、江戸で描かれたものか松本で描かれたものかは不明。

1334 応為：関羽割臂図(クリエヴァンド美術館)

☆松代で北斎の絵を持っている人は、宮本慎助、真田幸貫、山寺常山、小山田老岐、八田彦次郎の五人という(同 p 154)。

●北斎と思われる川柳(田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社)

☆一年の埃が仁王の臍の垢 百姓(一年の埃が臍に溜まった仁王のお身拭い)

☆困もひまを潰して狢の蚤 百姓(困い者の女も旦那が来なければ、狢の蚤を拾って暇を潰す)

☆どうだ良香と旧苔の髭を撫 百姓(都良香が詩の下旬に悩んでいると鬼が即座に読み「どうだ良いか」)

☆真赤な嘘は紅粉の耳こすり 百姓(赤い唇を耳に寄せてささやく遊女の言葉は真つ赤な嘘だ。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「紅粉」が「口紅粉」)

☆二番目が出たでわけなく這入り升 百姓(正月の芝居の二番目は空いていて入りやすい。交接も同じ)

☆味ふて見よや新酒の柳樽 八十四叟新柳樽 卅誌(宿六心配『謎解き北斎川柳』による。『新編柳多留』は新酒のように楽しめるものです。どうぞ味わってください。天保5年以降なかった「卅」号を記す)

●読本『絵本漢楚軍談』(10月。角書「訂正補刻」。初輯。全二十冊。為永春水訳。葛飾卅老人八右衛門画図。丁子屋平兵衛版。22.5×15.7 早稲田大学図書館蔵)

※中国の小説を為永春水(筆者注：この年12月に没)が翻訳したもの。二輯は弘化2年(1845)1月刊。

☆『馬琴書翰集成』天保12年(1841)11月16日 殿村篠斎宛(第五卷・書翰番号94)

「当夏より丁子屋ニテ「漢楚軍団絵本」彫立候。絵ハ前之北斎ニ画せ候由。北斎ハ当年八十二三歳ニ成候処、細画之写本ヲ画キ候事、細心之至リニ候。艾ハ為永春水ニ綴らせ候よし。(略)」(ルビは筆者による)。

●読本『江戸紫三人同胞』(4月。角書「万屋助六三浦屋総角」。文化5年(1808)と6年(1809)の読本『総角物語』前後編の二冊を合冊して改題再刊したもの。柳亭種彦作。葛飾北斎画。群玉堂：河内屋茂兵衛版。早稲田大学図書館蔵)

※北斎の絵は文化6年の後編に描いたものを採録。

●絵手本『卅翁艸筆画譜』(『北斎草画』)とも。半紙本墨摺一冊。全24丁。和漢の故事や動植物の31図を描く。23.0×16.0。奥付には「前北斎卅翁筆。鈴木栄次郎彫刻天保十四載癸卯初春 吉辰発市 東都書舗 金幸堂寿梓」とある。裏表紙には馬喰町の



金幸堂の他に菊屋幸三郎など十の書肆が連記されている。大英博物館/メトロポリタン美術館/愛知教育大学附属図書館蔵)

※無題の後の画題は仮題。

【初巻】〈無題：大黒〉〈孟宗〉〈雨中の獅子〉〈晩冬の山水〉〈関寺小町〉〈蟻螂・香瓜〉〈鵜羽を振ふ〉〈屈原・汨羅の漁夫〉〈万歳の亀・野藿〉〈無題：官女〉〈布袋の戯〉〈無題：椎茸・三番叟〉〈丁子・胡椒〉〈梨の花・鬘渠〉〈風雨の竹〉〈サフラン・花王〉〈群鳥・蜘蛛・千日紅〉〈無題：月見る狸〉〈奈良の秋〉〈無題：雪中船〉〈鳶尾〉〈烏骨鶏・苺〉〈無題：塾の先生〉〈黄尋〉



1335 「卍翁艸筆画譜」無題：三番叟（大英博物館）

※〈無題：三番叟〉の画が「葛飾北斎筆 三番叟図 背景無地 縦長装 八十七志卍筆 印百 縦三尺九寸三分 巾一尺一寸三分」

として有名な贋作事件（昭和4年：1929、春峯庵事件）に出品された。⇒弘化4年（1847）「河骨に鵜図」の項参照

●絵手本『北斎漫画』草筆（1月。「北斎漫画草筆之部」とも。半紙本一冊墨摺。全24丁。前北斎卍翁筆。菊屋幸三郎版 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/浦上蒼穹堂蔵）

※ほとんど『卍翁艸筆画譜』と同じ（配列は異なる）。序文・刊行年・版元の著名も同じ。

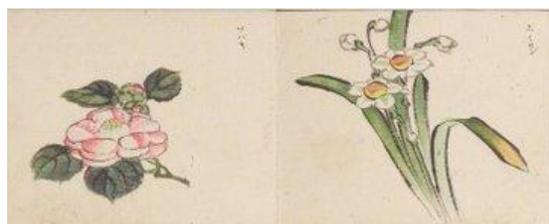
●絵手本『伝神開手 北斎画苑』（1月。半紙本淡彩3編。全21丁。前北斎卍翁筆。和泉屋金衛門、俵屋清兵衛、秋田屋太右衛門、永楽屋東四郎合梓。24.0×16.2 日本浮世絵博物館/東京芸術大学附属図書館/大英博物館蔵）

※ほとんど『卍翁艸筆画譜』と同じ（配列は異なる）。序文・刊行年・版元の著名も同じ。二・三編は北斎以外の絵師による別本（以上『年譜』による）。

●絵手本『北斎漫画 全』（全20丁。半紙本一冊墨摺。早稲田大学図書館蔵）奥付は『卍翁艸筆画譜』と同じ形式だが、「東都 前北斎卍翁筆 書舗 平林堂寿梓」に変わっている。内容は『卍翁艸筆画譜』とほとんど同じ（配列は異なる）。

●絵手本『肉筆北斎絵手本帖』（紙本着色。肉筆画帖。15図揃物。全体12.1×271.8 太田記念美術館）

※巻頭に「自出度八十四の春とハなりぬ」と口上が記され、その下に北斎が袴を着て座礼をしている図が描かれる。



1336 肉筆北斎絵手本帖 ツバキ スイセン



エビ 口上（太田記念美術館ツイートより）

〈北斎口上〉に続き〈エビ〉〈ゴマメ カヤ カチグリ〉〈マツ〉〈スイセン〉〈ツバ